

オリンピックと資本主義社会

②第2部 オリンピックはなぜ、いかに復興されたか

内海和雄

「①課題設定」は『一橋論叢』第134巻第2号、2005年8月号に掲載した。

第2部 オリンピックはなぜ、いかに復興されたか
はじめに：時期区分について
第4章 19世紀のヨーロッパと体操・スポーツの誕生
第5章 オリンピック「復興」の基盤
第6章 オリンピズム：クーベルタンの思想と行動
第7章 ギリシャの近代化と第1回アテネ・オリンピック
第2部の総括

はじめに：時期区分について

1. オリンピック史の時期区分について

オリンピック史に関する文献の大半は第1回のアテネ大会から現在の大
会までの概要を記述する大会史ないし記録史である。

一方、若干のオリンピック史研究では時期区分を行いながら、一定の歴
史像を滲み出している。時期区分の概略は、大きくは以下の4つの範疇に
分けられる。

①第1は、「帝国の時代」「超国家主義の時代」「冷戦の時代」「冷戦後の時代」等、政治・経済的な情勢の区分をそのままオリンピックにも適用したものである。確かにオリンピックもそうした情勢の中に存在するものであるから、それらの区分と大きくずれることはないが、これではオリンピックの主体的な区分とはならない。これらはオリンピックの内的な発展の論理ではなく、政治史、経済史の一般的時期区分、つまりスポーツ史、オリンピック史にとっては外的な時期区分を適用していることになる。

②第2は、オリンピック史を外的な条件と内的な発展との間で、軸が内外にぶれるものである。これでは、オリンピックの内的発展が焦点化されない。これらの区分は、区分それ自体の方法には言及せず、むしろ方法論的意識が弱くいわば直感的な分類となっている。

③IOC 会長毎に区分するものである。これはオリンピックの内的な論理からの区分の1つの方法である。確かに会長の役割は大きいし、各会長の時代に何があり、何を行ったかを見ることは1つの方法である。しかし、これでもオリンピックの歴史の質的変遷は見えない。『IOC：100年史』(IOC, *The International Olympic Committee-One Hundred Years*, 1994)や「オリンピック史：クーベルタンからサマランチへ」(Arnd Kruger, 'A history of the Olympic Games from Coubertin to Samaranch', *The International Politics of Sport in the Twentieth Century*, J. Riordan, A. Kruger, ed., E & FN SPON, 1999)等はこの範疇である。

④そして、オリンピック大会自体の特徴を中心にした時期区分も提起されている。ジョンソン⁽¹⁾は以下のように区分している。

- ・1896-1912 年 (オリンピックの復活期)
- ・1920-36 年 (オリンピックの成長期)
- ・1946-60 年 (オリンピックの拡張期)
- ・1964-76 年 (オリンピックのグローバル化)
- ・1980-94 年 (オリンピックの商業化)

この場合、1913-1919, 1937-1947, 1961-1963, 1977-1979 年が空白に

なっているが、この空白期も現実の歴史を構成しているのであるから、その位置付けと意義も問われなければならない。これは大会を軸とした区分である。しかしこれだと、オリンピック運動の視点が落とされてしまい、オリンピックの大会と運動の総体を把握するには問題がある。

同じく日本でも広畑成志⁽²⁾が同様な区分をしている。

- ・ 1894-1920 年（草創から自立の時期）
- ・ 1920-1945 年（飛翔から受難の時期）
- ・ 1945-1970 年（復興から前進の時期）
- ・ 1970-1990 年（激動から改革の時期）
- ・ 1990-2004 年（新世紀へ向かって）

広畑の場合、大会やオリンピックアードによる区分ではなく、むしろ外的な政治・経済状況との混合で区分されている。

以上、オリンピック史の時期区分を見てきたが、ここで問題なのは、そもそも時期区分をなぜ行うか、何故に時期が区分されるのか、各時期の主導要因と副次的要因は何なのか、等が問われねばならない。実はこれまで、オリンピック史における時期区分を分析したものは皆無であり、ここで以下、簡単に本研究における時期区分の趣旨と方法について述べておこう。

註

(1) William Oscar Johnson, *The Olympics: A History of the Games*, The Time, 1996

(2) 広畑成志『アテネからアテネへーオリンピックの軌跡一』本の泉社, 2004 年

2. 本研究の時期区分

(1) 時期区分の意図

時期区分とは対象の変遷をある一定の特徴をもった時期毎に区分するこ

とによって、対象を特徴付け、ある場合には法則化し、そこに発展の、あるいは停滞や後退の特徴を見だし、対象をより深く理解するために行うものである。その場合、外的な要因の押しつけで特徴づけるのではなく、それらを外的な条件としながらも、それらの外的な力、要素に規定された内的矛盾の質的变化を特徴づけるのでなければならない。そこでは矛盾の主導要因、副次的要因の構造の変化が把握されねばならない。

(2) 時期区分の方法

オリンピックの時期区分といっても、個別の領域に焦点化した場合、それぞれの領域の特徴によってその時期区分は異なる。例えば「アマチュアリズム」の変遷と「オリンピックの政治」ないし「商業化」あるいは「競技史」という限定された視点での時期区分はそれぞれに異なる。アマチュアリズムで言えば、その区分は大きくは1970年代の中頃を境に、それ以前をアマチュアリズムの時代、それ以降をオープン化（プロの参加も可能）として、大きくは2期に区分できるであろう。以前私がアマチュアリズムの論文を執筆していた頃、「アマチュアリズムの変遷でベルリンオリンピックを時期区分に関わらせないのか」と質問を受けたことがある。私は「後者はオリンピックと政治との関連、あるいはオリンピックの国家的援助という視点から見れば画期となるが、アマチュアリズムの変遷からは画期とはならない」と応えたことがある。同じように、アパルトヘイトの視点、ジェンダーの視点、ボイコット問題の視点等々、個別の視点はそれぞれに時期区分が異なってくるはずである。また、IOCの財政構造から見れば、その時期区分は同様に1970年代を境に大きく2分されるだろう。

さらにもう少し包括的に例えば、政治との関連つまりテロ、ボイコット、アパルトヘイト、休戦、あるいは国内統合等の視点で見ると、経済との関連つまり多国籍企業による商業主義的進出、オリンピック開催による地域振興、メディアへの露出、そしてIOCの企業化等々の視点で見ると、そしてオリンピックのスポーツ分野への影響を見る場合とでは、当然

にしてそれぞれの時期区分は同じとは限らない。オリンピックはそれだけ多様な要素を内包しながら発展してきているからである。

もっとも、オリンピックにおけるナショナリズムの視点では、明らかに国際的な政治的動向に規定され、その動向と相当に近似の区分となるであろうことは予想される。しかしそうであっても、オリンピックの総体（大会と運動）として把握は必要である。先行例のような区分はこの一環であるが、その場合にも如何なる認識によって先のような区分となるのかの説明が必要である。

さて、オリンピック（大会と運動）の総体的な把握における方法論として、内的矛盾と外的矛盾（外的力と内的との関係）との関連での把握が基本となる。内的矛盾とは第1部「課題設定」で触れた内的要因としての問題点である。これらの矛盾の蓄積度合、解決度合でオリンピックの質的変化が特徴づけられる。そして外的矛盾とは、近代スポーツ、オリンピックを生み、成長させた資本主義社会の諸要素とその変遷である。本研究のテーマの「オリンピックと資本主義社会」は資本主義社会の産物（誕生、成長・・・）としてのオリンピック把握である。この視点がもっとも鮮明に把握できる時期区分が求められる。

オリンピックもまた、その内的矛盾と外的矛盾の関連の下に存在するが、オリンピックの時期区分としては、たとえ大きな外的矛盾があったとしても、それが内的矛盾として大きな変化を引き起こさない場合には、その外的矛盾を持って時期区分とはならない。もちろんその外的矛盾はやがて内的矛盾に転化するだろうが、当面は転化しないとすれば、内的な量的蓄積を遂げつつ質的転化を遂げたときに、時期区分としての画期となる。

そしてそれらは以下のように描かれる。（これは2006年11月段階の仮説的内容である。今後一層の実証が進めば多少の変更はあり得ることは明記しておきたい。）

3. 時期区分の概要

①オリンピック前史（～1894年）

資本主義社会の生産力の発展と経済成長は産業革命に伴う技術革命に支えられ、交通手段の飛躍的な発達を促し、生産物の流通のみならず、消費面での拡大をもたらし、旅行という文化を新たな産業として起こした。そして生産物の市場や資源の確保を求めて西欧の先進諸国は植民地争奪に乗り出し、19世紀末には帝国主義の時代となった。それらの集約的な表現として1851年には第1回万国博覧会（ロンドン）が開催された。それ以前からも各国内では多くの博覧会が開催されていた。そして、形成されつつあった国民国家はナショナリズムを必要とした。近代科学の教育やナショナリズムの教育によって国民の育成の必要から近代公教育制度も生まれた。19世紀末からは帝国の衝突による大戦の予兆さえ感じられ、それに対抗する平和運動も次第に高揚していた。これらはオリンピック誕生の資本主義的な外的条件を形成した。

一方、オリンピック誕生の内的条件としては、19世紀に入り、資本主義社会の形成に伴う身体形成（労働力、兵力）の要請はドイツやスウェーデンでは体操（ジムナスティックス、トゥルネン）を、そしてイギリスでは近代スポーツを誕生させ、やがてヨーロッパを中心に普及させ、各種の国際組織（IF）を誕生させた。一方、近代社会に入って、ヨーロッパにおけるギリシャ回帰が起き、これらの一環にヨーロッパを中心とする多くの地で地域的「オリンピック」も開催された。また、古代オリンピックの開催されたギリシャのオリンピアの発掘調査もドイツやフランスによって推進され、オリンピックへの関心は高揚しつつあった。そして、国際的開催（万国からの参加）と多種目開催（当時の種目は単一開催）は当時のスポーツ分野にはなく、万博の様式を採用しながら、スポーツの万博であるオリンピックが復興された。これがオリンピックを生むスポーツ内の主体的条件形成であった。

オリンピックの根本思想としてのオリンピズムは、こうした時代背景にあって、クーベルタンが古代オリンピックを支えたヘレニズムの思想、近代イギリスのマッスル・クリスチャニティの思想、そして19世紀末の世界平和の思想とを結合して構成された。

近代スポーツ、そしてオリンピックの大きなイデオロギーであったアマチュアリズムは、イングランド南部を中心とするブルジョアジーの強力な推進によって押し切られたものである。アマチュアは誰からの援助も受けず、自らの財で対処するというブルジョア個人主義に粉飾された。

大陸諸国の産業革命はイギリスに遅れて出発した。それ故、労働者階級の形成も後進的であり、労働者階級を排除するという思想を大陸のブルジョアジーたちはまだ強く意識していなかった。ところが、1870年の普仏戦争とその直後のパリ・コミューンは、労働者階級の潜在力を顕在化し、大陸諸国のブルジョアジーをして一気に不安と恐怖の対象となった。こうした中で、身体形成文化を必要としていたブルジョアジーにとって、労働者階級を排除でき、しかもさらに大きな特徴はその一方で自らの中産階級の統合に役立つ「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」は、瞬く間に大陸に普及した。これこそが「創られた伝統」(E・ホブズボウム)の本質である。

中産階級の統括する国民国家の維持のためのナショナリズムは、中産階級のイデオロギーであるアマチュアリズムとも結合した。スポーツが次第に労働者階級にも浸透するに従い、結合されたナショナリズムは国家的統合として労働者階級にも適用され始めた。

この時期、外的矛盾の強力化が主要な矛盾となる。産業革命による交通・通信手段の発達、国民国家と国民養成の必要性（義務教育、ナショナリズム）、平和運動の要請、そして万博の開催などがそうである。それには情勢的に新たな運動の必要性＝特殊な対応（ドイツ、スウェーデン、イギリス、フランスの国情）も挙げられよう。

一方、内的矛盾の形成としては、スポーツの普及、オリンピックへの基

盤形成（ギリシャのザッパス・オリンピック，イングランドのマッチウェンロック・オリンピック），クーベルタンの熱意と政治的・組織的力，そしてそれを支えた財力が決定的である。

②オリンピック誕生期（誕生，不安定，1894-1920年）

1896年の第1回アテネ・オリンピック開催を決定した1894年から1920年までを想定する。大会と運動を含めた時期区分である。1916年は第6回ベルリン・オリンピックが予定されていたが，1914年の第1次世界大戦の勃発により，中止となった。その間はクーベルタンを中心とするIOC委員同志の連絡は存在したが，IOC委員会は招集されなかった。それ故，1914年から20年の第7回アントワープ大会までは不安の時期であり，1894年から1920年までを誕生と不安定を内容とする誕生期とした。

この時期，オリンピックにとっての外的条件としての政治的，経済的状况としては，ヨーロッパはまさに帝国主義の真直中にあり，一時的経済繁栄の「ベルエポック」を形成し，諸国民の消費も飛躍的に進展した。その一方で国民国家の対立もまた深刻さを増し，一触即発の危うさをも秘めていた。それ故，平和活動もいっそう活発化した。しかし，その危惧は現実化した。誰もが短期に終結すると考えた大戦は1914年から1918年まで続いた。

こうした中で，平和運動として，あるいは「スポーツの万博」として誕生したオリンピックであったが，初回のアテネを除く1900年の第2回パリ大会，1904年の第3回セントルイス大会，そして1908年の第4回ロンドン大会の3大会はいずれも，経費の問題も関わって，万博の一環としての開催であった。それはクーベルタンの意図した事ではあったが，現実にはその意図とはおよそ異なり，まさに万博の片隅の行事へと追いやられ，すでにこの段階でオリンピックの危機さえ生じたほどであった。しかし1912年の第5回ストックホルム大会はオリンピック独自の大会であり，本来の大会のイメージが確立し，やっと軌道に乗り始めた。誕生時は万博

の影響を大きく受け、開催式、表彰式なども万博から多くのヒントを得ながら、様式を確立した。1912年段階でどうにか確立の足掛かりはできた。

しかし、1914年に勃発した第1次世界大戦（～1918）は、1916年に開催予定の第6回ベルリン大会が参戦国ドイツの首都であることから開催不可能となり、中止となった。大戦後にもかかわらず2年後の1920年に早急にオリンピックが復興できたのは、益々高まる労働運動、社会主義運動への危機感とそれへの牽制、ブルジョアジー自身の国際的統合の必要性が、一層強く求められたからである。

1920年までをこの時期に含めたのは、1916年の中止を克服して、確立期のはじめである1920年までとしたからである。

この時期の外的矛盾は、第1次世界大戦への危機感から平和運動への希求（スポーツの万博としてのオリンピック）、ナショナリズムの自覚と競争、各国における体育の確立（労働力、兵力養成の本格化）などがある。

一方、内的矛盾であると同時に主要な矛盾は、内的矛盾に転化し、大陸へのアマチュアリズムに包まれたスポーツの普及と万博の付属としてのオリンピックへの危機感と同時にオリンピックへの期待感である。とはいえ、この時期、オリンピックの権威、求心力は増加しつつあり、競技様式の発展と確立があった。それはブルジョア文化としての確立と定着が進んだからである。

③オリンピック確立期（1920-1948年）

この時期はいわゆる戦間期（1918-1936）を中心に、オリンピアードに置き換えた場合、1920-1948年までとした。ここでも、1936年ベルリン大会以降は第2次世界大戦に突入し、1940年（第12回東京大会）と1944年（第13回ロンドン大会）が中止となり、オリンピックは外圧により危機に陥った。そして1948年に確立期後半の危機は一応終止符が打たれた。それ故、1948年までとした。

「確立」の意味は、オリンピックの権威が増し、参加国が増大したこと、

オリンピックの開催の様式が一層強固となった事である。特に1936年のベルリン大会は、国家の全面的なバックアップの下に、大会としては盤石の体制を確立した。

この戦間期にオリンピックは確立した。1924年の第8回パリ大会、1928年の第9回アムステルダム大会、1932年の第10回ロサンゼルス大会、そして1936年の第11回ベルリン大会である。特にベルリン大会はナチスドイツの国家的威信をかけた一大イベントとなり、その政治的利用に対する批判の対象となったと同時に、一方では未だに不安定な公共援助の視点から見れば、国家行事としてのオリンピックとして、歴史的にそのイメージが確立した点でも特徴的である。

この戦間期は、資本主義が固有に持つ諸差別への対抗（オールタナティブ）がスポーツ分野にも顕在化した。それはこれまで当初からあった階級差別としてのアマチュアリズムに対するプロ化、オリンピックの女性差別に対抗して開始された「国際女性オリンピック」の開催、各国内での人種差別への対抗等である。一方、国家間の問題としては、英国連邦の自立化を意図したコモン・ウェルス大会、そしてブルジョアオリンピックへの対抗としてのソ連のスパルタキヤードや資本主義国の社会主義的勢力による労働者スポーツ運動の台頭、人民オリンピックの開催など、スポーツが大きく進展した時代でもある。とはいえ、それぞれのオールタナティブは大会の開催要項、原則4年ごとの開催、開催地持ち回り等、多くの点でオリンピックの影響を大きく受けたものである。

1936-45年は第2次世界大戦により、1940年の第12回東京大会、1944年の第13回ロンドン大会が中止となった。そのうち、1936-45年は第2次世界大戦期であり、第1次大戦と同様にIOC委員会は、委員間の通信はあったが、委員会としては機能しなかった。しかし、終戦と同時にオリンピックの再開が企画され、1948年のロンドン大会が実現した。最も、この時期にオリンピックが早急に再開された背景には、戦死した会長ラ・ツールに代わって活発に連絡を取り合った副会長のエドストロームらの戦

後の活動があったが、それらを支え、賛意を示した各国は、戦後の社会主義化の促進と、資本主義国における労働運動をはじめとする社会主義勢力の台頭に対する先進諸国のブルジョアジーの不安の増大、そしてそれへの対処としてのアマチュアリズム（労働者階級排除＝ブルジョアジーの統合）を活用した平和運動としてのオリンピックが渴望されたからである。もちろんこの背後にはこうして、アマチュアリズムが未だオリンピックを統括する有力なイデオロギーとして機能した。

こうして、この時期の外的矛盾は、戦間期の経済成長によって、諸国民の文化・権利が発展し、労働運動や社会主義運動の発展があり、生活条件の一定の向上があった。しかし、後発資本主義国（ドイツ、イタリア、日本）の台頭とファシズム化による第2次世界大戦へと突入した。

一方、内的矛盾としては、主要な矛盾として国内的、国際的にスポーツを巡る対立の激化とそれぞれの発展があった。そしてそれらはオリンピックの確立（組織、世界的名声）に対抗（オルタナティブ）する形で開催された。こうしてスポーツ、オリンピックもその理念、組織、活動の諸点において、確立したオリンピックへの対抗も生まれた。

④オリンピック発展期（1948-1984年）

第2次大戦後はアメリカの台頭と一方では東欧や中国などの社会主義圏が誕生し、これはやがて東西の冷戦へと進展した。一方、西欧では東欧社会主義の福祉の向上理念（現に1917年のロシア革命後のソ連では週48時間労働が実行され、西欧資本主義国にも多大な影響を与えた）に対抗する上からも、福祉国家を志向した。ここでの高度経済成長における公共政策は、後述するような日本の産業基盤優先策ではなく、社会的共同消費手段の優先による高度経済成長であったから、それ自体が福祉国家のいっそうの推進となった。1948年は戦後体制の確立であると同時に、社会主義国の一部参加でもある。その後の冷戦構造の始まりという意味では1952年のヘルシンキ大会を時期区分にしても良いが、戦後体制の始まりという点

で1948年とした。

「発展期」とは、旧植民地の独立に伴うオリンピック参加国数の激増、社会主義国グループの参加による、冷戦のスポーツ版が形成された。そして1970年代からはオリンピックのテレビ放映権の高騰によってIOCの組織・財政が確立し始めた時期である。

先進資本主義国の高度経済成長と、一方での旧植民地諸国の自立化志向は、1960年代を中心に、その経済的基盤は未だに宗主国に依存しながらも政治的には次々に独立を果たし、これらの国々はいずれの軍事同盟にも加わらず、非同盟諸国連合として国連やその他の場面で次第に大きな発言権を有し始めた。

これらの国際的動向は国際スポーツ、国内スポーツばかりでなく、オリンピックにも多くの影響を与えた。第1に、新独立国、発展途上国の参加は、単に経済的な援助を必要としたのみならず、人種差別（アパルトヘイト）撤廃への大きな力となり、それぞれの国、地域の発言力を増した。そしてスポーツの国際交流を飛躍的に高めた。

第2に、先進資本主義国での高度経済成長と福祉国家の結合は、これまでアマチュアリズムによって排除されてきた労働者階級、一般国民、そして女性、民族的少数者等の社会的弱者と言われる人たちもまた自ら「するスポーツ」に参加するスポーツ・フォー・オール政策を、広義の福祉政策の一環として具体化する経済的、政治的基盤を形成した。これは国民のスポーツへの関心を大いに高めた。それは「見るスポーツ」としてのプロの大量の誕生を促した。戦間期の労働者階級排除、女性差別、人種・民族差別の克服としてのオールタナティブは、資本主義の基本的課題として、スポーツ・フォー・オールの中にも引き継がれ、未だ多くの矛盾を抱えているが、一定の改善を見つつある。

第3に、スポーツ界のアマチュアリズムは1970年代にはほぼ完全に崩壊した。各競技団体にその競技開催を委ねるオリンピックも例外ではあり得ず、オリンピックもまた1980年代にはオープン化を志向した。しかし

オリンピック自体は未だ賞金を出してはいない。

第4に、発展途上国の多数参加はオリンピックの運営やIOCの運営にとっても、これまでの貧乏団体からの脱却を要請した。メディア界、あるいは多国籍企業の成長に伴って、国際的なスポーツ大会は格好の宣伝媒体となり、多大なテレビ放映権料が保証されるようになった。

さて、第2次世界大戦後の疲弊が続く中でもオリンピックが早急に復興し得たのは、第1次世界大戦直後と同じように、アマチュアリズムの護持による先進諸国での2つの側面、つまり労働者階級の排除とブルジョアジー自身の統合が未だ共通の課題として存在しており、しかもオリンピズムの平和理念が歓迎されたからである。オリンピック関係者の中には、忍び寄る商業主義に対する危機感から、未だにアマチュアリズムへの郷愁を抱く者がいるが、両者は厳然と識別して対処する必要がある。しかし、アマチュアリズムが終焉したいま、オリンピックを支える新たな理念、オリンピズムの中心理念は、世界平和への運動であろうか。

こうしてこの時期の外的矛盾は、冷戦構造（ナショナリズムの高揚）、旧植民地の独立・非同盟化に伴う権利主張、アメリカ、ソ連による支援と統合活動の活発化、先進諸国の福祉国家化、高度経済成長、諸権利の高揚などがある。そして後半にはテレビを中心とするメディアの急速な発達とそれをも巻き込んだ諸領域のグローバル化が進んだ。

そして内的矛盾は、主要な矛盾として、オリンピックは冷戦構造に伴うナショナリズムの「平和的対決の場」と化した。それ故、平和運動としてのオリンピックの価値は益々高まった。政治の直接的反映としての問題（オリンピックの政治的利用のボイコット、テロ）も生まれた。一方で先進諸国でのスポーツ・フォー・オールの高揚によって、国民の参加スポーツの高揚と、その必然としての「見るスポーツ」の頂点としてのオリンピックの価値は一層向上した。

⑤オリンピックの新たな飛躍（1984-2006 年現在）

この時期、世界は国境を越えて活動する多国籍企業とマネーファンドが、世界中の利権あさりを始め、メディアも含めてグローバル化の進展と、それによる功罪がいろいろと問題化した。そして旧社会主義圏の崩壊による新たな独立国の誕生が、新たなナショナリズムの高揚をもたらし、一方、多民族化した先進諸国でも民族問題は多く勃発した。

こうしてこの時期の外的矛盾は、東欧の旧社会主義の崩壊により独立国が増加し、それらは国際的認知を求めてオリンピックへ参加した。現在国連への加盟よりもオリンピックへの参加国の方が多い。その中で、アメリカ覇権主義が強化され、多国籍企業に都合の良い新自由主義が普及し、市場化が連動している。

一方、内的矛盾として、グローバル化に伴うオリンピック（スポーツ）のグローバル化（市場化・TV化・プロ化）が大きく進んだ。TV放映による放映権が取得出来るかどうかはスポーツ団体にとって死活問題化した。IOCの企業化、財政確立が進む一方で、その官僚化、利権化も進み、特にオリンピック招致は、単にスポーツ大会ではなくなり、その国の政治的、経済的なイベント化している。それだけオリンピックの社会的価値は高揚した。またオリンピックの高度化によって、国家間の拡大（経済格差）が生じている。国家威信の手段化、勝利至上主義化によって、ドーピングなどの新たな問題も生じている。

第4章 19世紀のヨーロッパと体操・スポーツの誕生

1. 19世紀のヨーロッパ

(1) 社会的動向

①政治・経済・社会

18世紀の第4四半世紀に始まるイギリスの産業革命とフランス（1789年）とアメリカ（1776年）における政治革命は資本主義の確立の里程碑である。そして19世紀のヨーロッパは、世界史上、希に見る大きな変化の世紀であると同時にヨーロッパが世界の中心として機能した時代であった。

18世紀末にイギリスで始まった産業革命はその後西ヨーロッパ諸国、特にフランス、ドイツを中心に浸透し、19世紀末にはそれぞれの経済的対立を引き起こした。19世紀の世界においてヨーロッパのヘゲモニーが他の地域を圧倒したこと、なかんずくイギリスが工業化における先行などによって「パクス・ブリタニカ」といわれるような主導権を掌握し、それに対して他の欧米諸国がイギリスに追いつき追い越すことを目指した⁽¹⁾。

更に、その第4四半世紀である1875年から世紀転換期までと第1次世界大戦の勃発する1914年までは、ヨーロッパ諸国の工業経済が発達し、国内的には社会的安定性が比較的増大し、多少の経済的浮き沈みはあるものの、大局的には大きく進展した。それ故、1873年から1890年代半ばの20年間は、世界経済は大きく上昇して5大産出国の鉄の生産は1100万トンから2300万トンに増大し、1890年代半ばから1914年は「ベル・エポック（麗しの時代）」といわれた。

一方、欧米から外国へ、特に非ヨーロッパ地域への投資が非常に増大した。とりわけ1873年から90年代初めまで続いた不況の間、利回りの低いヨーロッパ内での投資よりも、高い利益につながるヨーロッパ外への投資が伸びることになった⁽²⁾。それと、国外ではそれらの原料と製品輸出に関

わり、帝国化による植民地の拡大競争と投資資本の保護という軍事的プレゼンス、それに起因する世界戦争への恐怖、増大する社会主義勢力の連合化による革命への恐怖（期待）を内包した時代であった。

情報革新のなかで、国家間の連携を試みる動きも、例えば国家の枠を越えた郵便を可能にする調整機関である万国郵便連合が1875年に発足し、84年には世界標準時が設定され、世界の一体化が推進された。

帝国主義時代の世界経済の特徴は、次のように指摘される。

地理的拡大：単に西ヨーロッパだけに限定されず、アメリカや東方のロシア、さらにアジアの日本も産業化も進んだ。そしてそれらの国々が国家としての要求を掲げて世界経済、世界政治に参入した。

イギリス工業の衰退：いち早く産業革命を成立させ、世界の工場として君臨してきたイギリスも、他の国に追いつかれ、帝国はイギリス1国から多国化した。それによりイギリスは衰退したのではなく、海外投資の金融資産化と商船海運事業などへ大きく飛躍し、引き続き世界経済をリードした。

技術革命：産業革命を支えたのは技術革命である。各国での鉄道の普及はいっそうの人的、物的、情報的交流を促進させ、それがまた技術革新へと還元された。また軍事力の強化は新たな軍事技術、船舶技術を促進させた。

資本主義的企業の構造と経営方法における二重の変容：資本の集中化による巨大企業の誕生、規模の拡大によって独占化が進み、さらに国家が国民の福祉への介入などを通してこれまでの自由競争市場はむしろ縮小し始めた。また生産および経営企業体の活動の合理化を図る組織的試みも成されるようになった。

消費財市場の拡大：国民の所得水準の相対的上昇は、消費財の需要を拡大させた。

第3次産業の拡大：前項と連動して、公共、民間を問わず、サービス産業、文化産業、そして国家機能などの領域が拡大した。

こうした経済的発展は新たな支配者としての新興ブルジョアジー（商工業資本家階級）によるものであるが、彼らは大局的には国内政治としては普通選挙権を採用し、議会制民主主義を志向した。

②都市化

産業革命による鉄道網の発達、船舶の機能の発展、都市における産業の拡大は資本の都市への集中をもたらし、それは雇用を拡大させたから農村人口を都市へ追いやり、労働者階級の形成を都市部に集中させた。都市化の促進は人的、物的、情動的交流の拡大をもたらし、都市の機能を飛躍的に拡大させた。そして栄養改善等による免疫力の強化による死亡率の減少、19世紀後半の細菌学の発達や公衆衛生学、都市環境学の発達による衛生状態の改善などにより都市人口が増加した。この当時、先進諸国での大都市化が大きく促進された。それは消費財市場や第3次産業の発達と相まって、ツーリズムの発展をもたらし、イギリスの旅行業者トーマス・クックは1841年に設立されたが、その年、16万5千人の顧客を得た。各国にも同様の旅行斡旋業者が誕生した。1882年までに、毎年ほぼ20億人が鉄道で旅行するまでになった。その80%はヨーロッパ人であり、20%はアメリカ人である。こうした諸発達が、近代社会で、戦争を除く世界最大の人口集中であるとされる万国博覧会の開催を可能にさせたのである。（1851年に第1回ロンドン万博開催）

都市人口の拡大自体もそうだが、この時期職を求めて、ヨーロッパ全体では歴史的に空前の人口移動も生じていた。このことによる言語問題や、ナショナリティ問題など、その後のナショナリズム高揚に伴う諸問題が内包され始めていた。こうした都市人口の拡大は、消費地としての成立でもあり、それはやがて生まれるプロ・スポーツ、つまり観戦する大衆の基盤でもあった。

③社会主義運動の高揚

1848年はヨーロッパ史上、「革命の年」⁽⁶⁾といわれる。フランスの2月革命、ドイツ連邦の3月革命、そしてイギリスのチャーチストの第3次請願の大デモンストレーションである。これらは、各国の産業化の進行に伴うブルジョアジー自身の形成であると同時に、一方での労働者階級の形成であり、その具体的な存在形態である労働運動の昂揚を意味した。

1864年にはロンドンでマルクスを指導者とする国際労働者協会（第1インターナショナル）が結成された。これまでの空想的社会主義あるいはブルジョアの改革主義を批判し、あるいはそれらをも広く内包しながら科学的な社会主義を提唱した。しかし、イギリスで見れば、1850年代から1870年代の「繁栄の時代」には社会主義運動は弱体化した。1871年のパリ・コミューンの評価を巡って、ブルジョアの傾向、あるいは修正主義的傾向との亀裂が大きくなり、第1インターナショナルも1876年に正式に解散した。だが、マルクスが高く評価したそのパリ・コミューン自体がマルクス主義の普及には大いなる手段となり、各国政府の対労働組合・社会主義対策を全ヨーロッパのブルジョアジーとその国家に迫った。

1880年代になるとヨーロッパの社会主義運動全体が大きく高揚し、1889年にはフランス革命100周年を記念して、エンゲルスを指導者として第2インターナショナルが結成された。しかし1895年のエンゲルスの死後、分裂し、指導権を握った労働貴族層は迫りくる第1次世界大戦をナショナリズムの視点から支持、協力するようになり、解散になった。イギリスでは1890年代になるとこの間の都市化と都市下層部の一層の貧困化によって社会主義勢力は復活し始め、イギリスの労働運動は先鋭化した。（これらの社会背景は後に見るようにイギリスのスポーツ普及を大きく規定した。）これによって20世紀に入って実現する国家による福祉政策の基礎を形成することになった。

④万国博覧会（万博）

万博は戦争を除けば、近代社会における最も人の集まったイベントである。万博は産業の発展、流通の発展、交通の発展、ツーリズムの発展等が総合的に向上した都市において初めて開催しうるビッグイベントである。

参加する世界各国の文化と科学の集中と交流、そして開催国の開催能力の誇示など、そこにはナショナリズムの対立などの現実問題が多々あるとはいえ、平和的交流を意図した総合的イベントである。第1回の万博は1851年にロンドンで開催され、600万人の入場者を獲得し、全体として利潤を生んだ。ロンドンはその会場として、鉄骨と総ガラス張りのクリスタル・パレス（水晶宮殿）を建設し、その技術力を世界に見せつけた。産業革命の先端を行く、イギリスのロンドンであるが故に為し得たイベントである。

そして万博は産業資本主義の発展力を世界に示したものである。図表4-1は19世紀に開催された万博の年度、都市、訪問者、利潤—損失の関係を見たものである。1873

年のウイーン（オーストリア）を除けば、ロンドン（イギリス）2回、パリ（フランス）5回、そしてアメリカ（フィラデルフィア、シカゴ）2回である。

近代オリンピックの提唱者クーベルタンにとって、1889-90年のパリ万博はその形態などでも最も影響を与えたものである。この万博が当時、鉄

図表 4-1 万博の歴史（19 世紀）

年 度	開催都市	入場者数 (百万人)	利益—損失
1851	London	6.0	利益
1855	Paris	5.2	利益
1862	London	6.2	損失
1867	Paris	6.8	利益
1873	Vienna	7.2	損失
1876	Philadelphia	9.9	損失
1878	Paris	6.0	損失
1889	Paris	32.0	利益
1893	Chicago	27.5	利益
1900	Paris	48.0	損失

出典：Maurice Roche, *Mega-Events and Modernity: Olympics and Expos in the growth of global culture*, Routledge, 2000, p 43

の塊である「エッフェル塔」を建設し、世界を驚かせたと同時に、フランスの技術力を世界に知らしめた、フランスの誇示であった。

この万博の開催運営方式は後にクーベルタンがオリンピックを組織し、運営する上で大きな事例を提供することとなった。いや、万博を真似たといっても良い。つまり、オリンピックは「スポーツにおける万博」と言い換えても良いであろう。現に、クーベルタンは第1回アテネ・オリンピックを別とする2、3、4回のオリンピックをすべて万博の一環として構想し、行った。

⑤平和運動

帝国主義諸国の植民地争奪戦は、世界の各地で小競り合いを繰り返し、いつ世界的戦争が勃発してもおかしくない一触即発状態であった。それ故、その雰囲気にも煽られてナショナリストとして戦争を肯定する勢力は別として、多くの人は戦争の勃発を懸念した。それ故に、ヨーロッパ諸国では、そして国際的にも平和運動が多く組織された。1890年代には、戦争への懸念が高まり、世界平和会議が開催された。後に触れるが、1894年のオリンピック復興を決定したクーベルタンの招集した国際会議にも、当時のフランスの平和運動家が沢山参加していたし、クーベルタン自身もその運動に支持を寄せていた。この点で、クーベルタンがオリンピックを、世界の若者が参集し交流することを通して世界平和へ貢献するものと考えた根拠はここにある。

⑥各国の動向

ここで、当時ヨーロッパの中でも大国化していた国のうち、オリンピックにも関連の深い次の国々の動向を簡単に述べておこう。

[イギリス]

イギリスは18世紀後半にいち早く産業革命、工業化社会を開始した国であり、1830年から1850年は「改革の時代」といわれる。農業国から工

業国へ転換した時代、つまり石炭と鉄を素材に鉄道を大きく発達させた。それが先述した 1851 年の第 1 回万博のロンドン開催を可能とさせた。

1837 年にはヴィクトリア女王が即位し、1901 年の死去までの 64 年間はヴィクトリア時代と呼ばれ、イギリスの繁栄の象徴である。1850 年代から 1870 年代は「繁栄の時代」と考えられている。3% を越える高い成長率を持ち、高度経済成長期であった。この間の繁栄が、労働者階級の労働時間の短縮を始めとする生活条件を改善させ、一定の余暇の誕生が、民衆にもサッカーをはじめとするスポーツを若干でも普及させることとなった。そしてブルジョア階級も貴族・ジェントリーに対するブルジョア革命を起こすのではなく、むしろ上流階級の模倣を選択した。こうしてイギリスではフランス革命のような政治革命は存在せず、むしろ改革路線であった。当時イギリスには旧地主階級、新興ブルジョア階級（資本家、工場主、商人、銀行家など）、そして労働者階級から構成されていた。政治的実権を獲得したブルジョア階級はその政治では国家の不作为を原則とする安価な政府、自由主義政策を採った。繁栄のお零れにあずかった労働者階級も改革路線に追随し、社会主義は弱体化した。しかしこのことが、次第に都市労働者たちの生活を大きく低下させていった。

1870 年代から 1900 年辺りは「帝国の時代」であり、大きな不況期でもあった。1884 年にはすべての成年男子に参政権が与えられ、産業労働者の増大に伴う社会主義運動の大衆化も進行しつつあった。そして自由党や保守党も共に改革に熱心だったので、社会主義政党が育たなかった。

労働者階級の生活は大きく後退して、労働運動も再び活発化した。そして 1889 年にフランス革命 100 年を記念して、エンゲルスを指導者として設立された第 2 インターナショナルとも連繋した。そして 1900 年には労働代表委員会が結成され、それは 1906 年に労働党へと発展した。しかしイギリスの労働運動はイデオロギー的関心は薄く、実用主義的、漸進的、平和的改革路線を追求した。それ故、マルクスが予期（期待）したように、資本主義の最先端での社会主義化は実現しなかった。

19世紀のイギリス文化はスポーツの普及をも含んでヴィクトリアニズムとも呼ばれるが、それは新興ブルジョアジーによる文化であり、「創られた伝統」である。

[フランス]

1870年の普仏戦争で、もろくも大敗を喫したナポレオン3世の威信は地に落ち、第2帝政も崩壊した。

それを促進させたのは1871年のパリ・コミュンである。3月18日から5月26日の72日間にわたる民衆の武装（ドイツ占領軍が包囲する停戦下で、フランス正規軍の崩壊という特殊な状況における自治組織）は、やがて第3共和政を誕生させた。彼らは国内経済発展計画を推進し、工業化を促進した。鉄道網や流通革命の推進、通信網の確立、そして1880年代には義務教育を確立させた。

こうした発展がやがて1889-90年のパリ万博の成功へと連なった。特に、エッフェル塔の建設は当時の科学技術の象徴であり、世界を驚嘆させた。フランス革命100周年を記念した万博の成功はフランスのナショナリズムを高揚させた。

1880年代にはフランス革命研究の実証史学が確立し、81年には学術誌『フランス革命』が創刊され、86年にはパリ大学ソルボンヌ校にフランス革命講座が開設された。そして88年にはフランス革命史学会が発足し、フランス革命研究熱はいっそう高まった。90年代後半にはクーベルタン自身も『フランス発展史』を執筆した。

19世紀初期にはサン・シモンらの空想的社会主義が誕生したが、19世末には様々な社会主義の流派が有った。ロシア革命後に共産党となるマルクス主義、社会的経済的改革を推進する議会内穏健派、そして1905年の統一社会党となる派である。こうして、社会主義の影響はフランスにも着実に増大していた。1889年にはフランス革命100周年を記念して、エンゲルスを指導者とする第2インターナショナルがパリに設立された。1890

年代の英仏間の外交上の中心課題は中央アフリカでのせめぎ合いであった。通商上、探検上の有利な立場を得ようとするフランスと既得権を維持しようとするイギリスとの対立である。こうしたフランス内外の国情はクーベルタンや彼を取り巻く仲間へ大きな影響を与えた。

[ドイツ]

18世紀末のドイツは314の領邦国家が分立するモザイク国家であり、1475の帝国騎士領で構成されていた。神聖ローマ帝国も統率力がなかった。しかし、ナポレオンによる支配によって、その屈辱と憎悪をバネに国民国家への志向が強まった。その意味でナポレオンが「ドイツ国民」を創ったともいわれる⁽⁷⁾。

19世紀初頭、超ドイツ主義者のヤーンによるトゥルネン（ドイツ体操）運動と、外国排斥（特にフランス）という民族主義運動は顕著であった。1860年から1871年は画期的に産業の発展した時代であり、70年の普仏戦争後に鉄鋼床を有する仏領ロレーヌ州を併合した。1870-1年の普仏戦争の勝利によって、71年には統一されたドイツが誕生し、強大な国民国家が確立した。こうしてドイツは急速に経済発展を遂げ、1890年までにこれまで主にアメリカ合衆国を中心とする移民が停止した。

普仏戦争を通じて勝ち取ったドイツ統一は、紛れもなく国民国家の実現を意味しているが、当時から「未完成の国民国家」と意識されていた。新生ドイツ帝国と相容れない、いわゆる「帝国の敵」と見なされた社会集団を統合することが、ビスマルク政治の課題となった。つまり、労働者階級・社会主義者、南ドイツを中心とするカトリック勢力・中央党、ポーランド人、ユダヤ人の統合問題である⁽⁸⁾。

1880年代、90年代は国家統一されたドイツにとって新たな国民的使命や国家的誇りの探求を模索した。その具体的な現れは、植民地獲得競争への参入であった。それでも1890年までのヨーロッパの平和の維持はビスマルクの指導下のドイツの軍事的、経済的な優位性に依存するところが

大きかった。しかし90年の彼の失脚後、植民地争奪とイギリスへの対抗からドイツは強大な海軍の建設に乗り出した。そして植民地争奪戦はいっそう激しいものとなり、戦争の危機をより大きなものとなっていた。

ドイツの急激な工業化によって、都市工業プロレタリアートが膨張した。ビスマルクはパリ・コミューン（1871年）以降の社会主義運動をかなり深刻に受け止め、一方では社会保険法によって「飴」を与えながら、他方では社会主義者鎮圧法の「鞭」によって厳しく抑圧した。それでも社会民主党は1877年には50万票、12議席を獲得し、1890年には150万票、35議席と議席率20%を超えた。そして第1次世界大戦前の1912年には450万票、110議席と、その勢力と影響力を急速に拡大した。社会主義的労働組合である「自由労働組合」も1900年の68万人から1913年の257万人へと大きく飛躍した。

[バルカン]

後に触れるように、ギリシャもバルカン半島諸国の中で、ヨーロッパ列強の傘の下で、オスマン・トルコ帝国や他の小国との間での諸対立を抱えた。

バルカン半島におけるオーストリアとロシアの敵対、ドイツとフランスの対立と不信、そしてイギリスとドイツの海軍拡張競争などは世界大戦への基盤を形成していた。列強の支配下にあったバルカン地方は、オスマン・トルコ帝国の後退に伴い、民族の独立と独自の外交政策を求める諸小国が多く存在し、爆薬庫と化した。それらは支配する列強にとっては「僻地」の小騒動ではあったが、自立しつつある国民国家として、それはやがて第1次世界大戦の引火点となった。

(2) 国民国家とナショナリズム

ナショナリズムという言葉は、19世紀を通じて自由主義運動や急進主義運動、さらにはフランス革命の伝統と考えられてきたが、19世紀末に

なると右翼思想グループを示すようになった⁽⁹⁾。そして愛国主義的思想に同調しない者を排除するようになった。

①国民国家の形成

19世紀は近代的な国民国家が誕生し、「国民国家の世紀」⁽¹⁰⁾といわれる。「国民国家」とは、「近代国家」という概念が意味するのと同じ対象を、国民統合という価値を重視して観察する場合の概念である⁽¹¹⁾。

1880年代のヨーロッパは世界支配の中核であったが、1875頃の主権国家は世界的に見ても、以下のように合計で45カ国程度であった。

- ・ヨーロッパ……イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、オーストリア
＝ハンガリー、イタリア、オスマン帝国等：17カ国
- ・南北アメリカ大陸：19カ国
- ・アジア……日本、中国、ペルシャ等：4～5カ国
- ・アフリカ……モロッコ、エチオピア、リベリア：3カ国

また、19世紀半ばの工業化の中心国は、イギリス、ドイツ、アメリカ、フランス、ベルギー、スイス、チェコ、スカンジナビア、オランダ、北イタリア、ハンガリー、ロシア、日本等であった。

②ナショナリズムの基盤・要素

ナショナリズムは同じくブルジョアジーによって形成されたアマチュアリズムと結合された。つまり、「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」はそれぞれの国のブルジョアジーが進めるナショナリズムと結合させられ、ナショナリズム高揚の手段となって、それぞれの国で推進された。

ナショナリズムが具体的に表現される基盤・要素は以下の内容が考えられる。

- ・国語（言語統一）
- ・民族、人種（他民族の排斥）
- ・宗教（他教の排斥）

- ・歴史（国家史，民族史）：民族主義的，排外主義的傾向
- ・文化（シンボル：旗，国歌，イベント）
- ・イデオロギー（対資本主義としての社会主義など）
- ・領土，テリトリー

これらの要素が絡まりながら，国家としての主張をし始めたところに国民国家の時代の成立がある。

（3）近代公教育の成立

近代公教育，つまり全国民を対象とする義務教育制度の確立は，近代化する国家にとって「国民」の育成は主要な課題となった。1880年代は先進諸国の近代公教育制度が確立した時期である。それは，科学技術知識を教え，近代国家の労働者と兵士を養成しなかったからである。それはまた次第に労働者階級の要求ともなり，義務教育制度は定着することになった。しかし問題は，もう1つの近代国家の課題であった。つまり共通の言語を教え，普及させると同時に，ブルジョア国家への労働者階級の帰属意識，国家への服従心の養成，つまり愛国心，ナショナリズムの教育という「道徳の涵養」が大きな課題となった。

近代学校教育制度の確立の中で，科学技術文化を教える教科と集団生活の仕方（広くはナショナリズム）を教える生活指導などが学校の機能となった。さらに，労働者階級の家庭での食事内容の悪さを補強する目的から学校給食もまた学校の大きな役割となった。学校は同年齢の集団の場であり，感染症などの集団的な発生場となりやすい。それ故に，学校での予防・治療も一定の範囲で問われることになり，学校保健制度が必然的に確立した。そして子どもたちの身体管理の必要性から定期健康診断，定期身体測定なども学校機能として定着した。しかしこの学校保健制度は地域医療制度との関わりで，必ずしも学校だけに依存しなくて良ければ，地域に依存する保健制度を生み，学校機能からは少し外れることになった。こうしてその国の歴史，社会的諸制度の相違から，学校の機能もまた多様化し

た。そして、健康管理の上からも、そして更により積極的な意義からも子どもたちや国民の身体管理はより国家的な管轄事項となっていった。また、自主的な入隊制度で賄いきれなくなるにしたがって、徴兵制度が施行されるようになった。

(4) 近代化と身体文化

近代オリンピック誕生の基盤である近代スポーツや体操もまた近代社会の産物である。

①近代的身体要求

既述のように、近代社会における産業化、都市化と国民国家化、植民地争奪戦における近代軍隊の強化は公教育制度において身体形成と意欲・指導力の育成を目指す教科と指導を必要とした。こうした基盤を形成したのが、ドイツやスウェーデンにおける体操の開発、普及であり、イングランドにおけるスポーツの発祥である。

18世紀末、ドイツではグーツムーツらによる解剖学を基礎とした体操の開発は近代化する社会の必要性の反映であった。やがて19世紀中頃にはヤーンによって対フランスを意識した民族主義的な運動と連動するようになった。こうしてドイツの近代化へ向けて学校では体操を教科として取り入れ、さらに軍隊にも取り入れることによって、ドイツ国民、ドイツ軍兵士の身体の強健さを形成した。愛国心と結合したドイツの「身体」が「軟弱」なフランスを打倒したというのが、1870年の普仏戦争におけるフランス敗退の、クーベルタン等の総括である。

②資本主義の発展と近代スポーツの発祥

イングランドでは何故に体操ではなくスポーツが発展したのか。その前提に中世以降地域レベルで続いてきた貴族・ジェントリーの相対的自由（大陸に比較して：ダニング）に依存した雰囲気がある。その中で、乗馬、

ジュ・ド・ボーム（テニスの原型）他のゲームあるいは封建領地所有と結びついた鷹狩り、狐狩り等の狩猟やゴルフ、クリケットなどのいわゆる貴族的なゲームが高揚した。しかし近代化の過程で、次第に都市の限定された空間、時間の枠の中で楽しまれる近代スポーツ化を果たした。その一方で、封建制社会における地方の祭ないし定期市などに行われた原始的なフットボール等、先の貴族的なゲームやいわゆる闘鶏、闘犬、闘牛あるいは素手によるボクシングなどのブラッド・スポーツは衰退した。

近代スポーツはやがて近代ブルジョアジー自身の、そして子どもたちの教育としても、必須な文化として、益々広く普及し始めた。特に中上流階級の子どもの教育を担ったパブリックスクールでは、次第に中産階級としてのブルジョアジーの子どもの通学率が激増するにしたがって、その教育課程、組織の大改革を行った。典型的にはマッスル・クリスチャニティといわれる、筋骨逞しさと敬虔なキリスト教の結合による新たな指導者像の形成であり、学寮の先輩＝後輩の組織体制を確立する「ブリーフェクト・アンド・ファッキング」制度である。こうして、海外での、そして国内でのリーダーとしての活躍の場を多くしていたブルジョアジーの社会的役割に対応した教育の一環にスポーツが大きく位置づけられた。

これらはやがて近代ブルジョアジー自身の、そして子どもたちの教育としても、必須な文化として、益々広く普及し始めた。この背後には産業革命による労働者たちの身体阻害、近代の生産形態と軍事形態に見合う身体（機敏で持久性のある）の必要性があったのであり、ブルジョアジーの結社の自由による新たな「伝統の創造」も意図されていた。

都市形成に伴う都市問題の喧噪、都会の雑踏を離れ、静かな自然に戯れて、暫しのリフレッシュを楽しむハイキング・登山などの自然要求も中産階級の一部で高揚した。（これまで登山は日本においては山岳信仰の対象としての入山という形態であったが、）この近代化の中で、自然自体を楽しむいわば近代登山という文化が誕生した。

③国際的、国内的スポーツ連盟の拡大

イギリス国内でのスポーツの誕生とルール統一などを経て、スポーツは欧米の先進国を中心に、各国のブルジョアジーに受け入れられて急速に普及した。当時の世界情勢は英仏独などの間での対立状況にあったが、一方では、国内的かつ国際的に高揚しつつあった労働運動と社会主義運動に、ブルジョアジーとしても自国内で、そして国際的にも連合して対応する必要性に迫られていた。こうした背景の下に、「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」は急速に普及した。

オリンピックは各スポーツ種目の連合体であり、各競技の進行はそれぞれの競技団体に依存する。それ故、こうした種目の国際組織の確立が前提として存在したからこそ、オリンピック自体も可能であった。

註

- (1) 福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史——工業化と国民形成——』岩波書店、2005年、p 4
- (2) 同上、p 32
- (3) E・ホブズボウム『帝国の時代 I 1875-1914』野口建彦訳、みすず書房、1993年（原著、1987年）、p 17
- (4) 福井憲彦、同前、p 73
- (5) E・ホブズボウム、同前、p 72
- (6) 谷川他『近代ヨーロッパの情熱と苦悩』世界の歴史 22、中央公論新社、1999年、p 380
- (7) 同前、p 43
- (8) 伊藤定良「近代国民国家と戦争」『20世紀の戦争とは何であったのか』木畑洋一編、講座：戦争と現代2、大月書店、2004年、p 37
- (9) E・ホブズボウム、同前、p 201
- (10) 谷川他、同前、p 10
- (11) 松本彰、立石博高編、『国民国家と帝国——ヨーロッパ諸国民の創造——』山川出版社、2005年、p 6

2. 「伝統の創造」とアマチュアリズム

(1) 伝統の創造

封建貴族に代わって新たに権力の座を奪い、資本主義制度を推進するブルジョアジーにとって、その近代国家、国民国家を統合することは多くの新たな困難に直面した。その一環として国民の育成とその統合は大きな課題であった。例えば統一記念式典や革命記念式典といった機会に、国旗や国歌が国民国家に関わるモニュメントを皆が意識する形式で、新たな行事をあたかも歴史的、伝統的であるかのように政治的に創出されていった。そのような国家の内部において、それが幻想であろうと恣意的であろうと、国家の起源に正当性の根拠を見ようとする民族主義や国民主義は、排外主義的な様相を強くした。対外的には帝国主義的な覇権争いが熾烈になり、内部では大不況の影響で民衆層にしわ寄せの不満が生じる中で、民族とか国民の純粋性を考えようとする姿勢は、政治的には右翼あるいは極右に位置して、しばしば外国人やユダヤ人を排斥する動きにもつながった⁽¹⁾。

こうして、新しい国家の運営に、国民の多くを従順に引きつけるために、国家自体を伝統ある国家として、ナショナリズムを伴って運営する事が、差し迫った課題であった。こうして特に、19世紀の第4四半世紀には「伝統の創造」が必須であった。

そこで、「伝統の創造」とは、「通常、顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の慣習であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質」である⁽²⁾。

新たな自由主義は従来 of 伝統に反対した。こうして「創られた隙間は創り出された慣行によって満たされなければならなかった」⁽³⁾のである。これによって支配者にとって国家自身の正当性をいかに維持し、確立するかという問題⁽⁴⁾であった。1870年代以降、大衆政治の出現の中で、社会組織と社会秩序の維持に「非合理的」要素が重要であるという再発見⁽⁵⁾も成

された。拡大しつつある新中産階級、他の結合様式を持たない広範の中間大衆層に対して、「従属意識を劣位者に刻みつけるというより、優越者たちの共同体的優越意識」つまり統合の手段化を促進した⁽⁶⁾。これは国民国家でのナショナリズムである⁽⁷⁾。

時期としては1870年辺りから第1次世界大戦までの時期に最も多くの伝統が創造された。つまり、支配的關係性を構造化するための新しい工夫、支配や忠誠心の絆を確立する新たな方法が要求されたのである。

具体的に見れば、サッカーの大衆的儀式化がある。決勝を国王も観戦するようになり、「労働者文化」の国家化も促進された。1883年にオールド・イートニアン（アマチュア）とボルトン・オリムピック（セミ・プロ）の対抗で、後者の労働者階級が勝利してから、ブルジョアのサッカーからの「撤退」、ラグビーへの重点化が始まった。オックスフォード大学とケンブリッジ大学との諸対抗戦も1870年以降に開始された。中産階級のスポーツは伝統の創出の2つの要素（政治的なものと社会的なもの）の結合であった。

こうした「伝統の創造」の中で、主に新ブルジョア階級の女性の参加によるスポーツへの進出は、女性の社会参加の上でスポーツの果たした大きな役割を示している⁽⁸⁾。

「伝統の創造」を指摘したE・ホブズボウムは、主にアマチュアリズムに関して、労働者階級の排除よりも、むしろ新興ブルジョア階級自らの階級的統合としての側面を強調している。しかし、現実にはアマチュアリズムはこの排除と統合という2つの機能を結合させて機能した。当然にして、統合の内容はブルジョア階級の理念とするアスレティシズム、ナショナリズムと結合して展開された⁽⁹⁾。したがって、アマチュアリズムとナショナリズムは不可分な関係にある。

このように、この時期は帝国主義、植民地化の一方でそれへの対抗勢力を生みだし、また社会主義運動の高揚の一方で反革命や反社会主義のイデオロギーを生み出した。そして科学万能主義が生まれる一方で人間の非合

理主義も強調された。こうして見るとき、「1890年から第1次世界大戦の勃発に至る時代を、ヨーロッパ文明の全史の中で最も興味ある、創造的な時代たらしめた」⁽¹⁰⁾のであった。そして近代オリンピックはまさにこうした時代背景のもとに生まれたのであった。

註

- (1) 福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史—工業化と国民形成—』岩波書店、2005年、p 60
- (2) E・ホブズボウム、T・レンジャー編『創られた伝統』（西川他訳）紀伊國屋書店、1992年（原著 E. Hobsbawm (ed.), *The Invention of Tradition*, The Press of the University of Cambridge, 1983), p 10
- (3) 同上、p 18
- (4) 同上、p 409
- (5) 同上、p 414
- (6) 同上、p 21
- (7) 同上、p 25
- (8) 同上、p 451
- (9) 内海和雄『アマチュアリズム論—差別なきスポーツ理念の探究へ』創文企画、2007年
- (10) ジェイムス・ジョル『ヨーロッパ100年史 1』みすず書房、1975年、p 155-6

3. アマチュアリズム

「アマチュア」という用語は、現在でも音楽、芸術の世界などでは「愛好者」「素人」という意味で使われている。時には「プロよりも技術的に劣り、音楽・芸術で食えない連中」というやや蔑んだ意味合いも込めて使われる場合もある。中世末期から貴族のスポーツ愛好者を意味するものとして使われた。19世紀中頃から20世紀後半まで約100年続いた「アマチュアリズムに包まれたアマチュア」は全く異なった意味を有し、アマチュアリズムを体現した競技者を指すようになった。つまりアマチュアリズム

が、台頭する労働者階級を排除する目的で近代ブルジョアジー（資本家階級）以上の階級的特権的なスポーツの所有を意味するイデオロギーや制度となり、アマチュアはブルジョア以上の中・上流階級を意味するものとなった。そのアマチュアリズムが崩壊した今、アマチュアは上記のような現在の意味合いとなって活用されている。もっとも、アマチュアリズムの時代にも、アマチュアリズムに包含されない、またプロではないスポーツ愛好者は多少いたわけだが、彼等は現在と同じ意味でのアマチュアであり、アマチュアリズム時代の彼等の呼称としては取り敢えず、「アマチュアリズム外のアマチュア」とでも呼んで置きたい。

19世紀末～20世紀中頃までのオリンピックを中心とするスポーツは、単にスポーツという表現ではなく、「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」乃至「ブルジョアスポーツ」と言う表現がより適切のように思われる。

アマチュアリズムないしプロ・スポーツについてはそれぞれについて本書との関連を考慮しながら、独自に拙著としてまとめてある⁽¹⁾ので、ここではオリンピックとの関わりにおいて、アマチュアリズムを要約する。

①アマチュアリズムは、スポーツから労働者階級を排除し、ブルジョアジーがスポーツ文化を独占したことにある。この場合、高度化と大衆化の2つの側面での排除があった。直接的には高度化という面で、トップ選手（プロ選手を含む）を排除した。これがアマチュア・ルールである。1866年の全英陸上競技連盟のそれは「労働者はアマチュアではない」という露骨な階級的規定から始まった。その後「試合で賞金や賞品を期待しない」や「休業補償禁止」などの経済的規定が中心となった。そしてその両者が実質的に機能しなくなる1930年代からは、第3の要素、つまり「アマチュアは品位有る者である」とか「フェアプレーを尊重する」などの倫理的規定が中心となった。アマチュアリズムによって「スポーツで金を稼ぐとは卑しい」「プロは本当のスポーツではない」など、プロ選手（主に労働者階級）を攻撃、侮辱した。

②近代スポーツ、スポーツクラブはイングランドのブルジョアジーたち

の社会的統合を意図して、アマチュアリズムに包まれて19世紀末に「伝統の創造」として設立された。労働運動、社会主義運動への危機意識を持つ世界のブルジョアジーに瞬く間に普及した。そしてアマチュアリズムという世界に共通のブルジョアジーの統合手段は、それぞれのナショナリズムと結合して具体化された。

③他方、大衆化においては、「アマチュアは他者の援助に依らず、自前でスポーツを楽しむ者である」というブルジョア個人主義、あるいは自由主義の観念により、莫大な資金を要するスポーツ施設に対する国や公共団体の援助を拒否した。多少は設立してもアマチュアリズムで労働者階級の使用を排除した。この点で、アマチュアリズムの誕生国であるイギリスは、近代スポーツ誕生の国でありながら、国民、地域住民へのスポーツ普及という面で西欧では比較的遅れていた。

④以上のような排除によって、スポーツへの大衆の参加を阻止したので、これはスポーツ全体の市場化を大きく制約することになった。資本主義社会にありながら、その資本家たち自らが市場化を制限するという矛盾を抱えた。

⑤近代スポーツの歴史、近代オリンピックの歴史はアマチュアリズム厳守とそれに対する緩和への闘いの歴史だが、それを経済的、政治的な側面から見るとブルジョア階級対労働者階級の闘いの歴史である。

⑥それ故に、第1次世界大戦から第2次世界大戦までのいわゆる戦間期には、西欧諸国で、労働者スポーツ運動や女性スポーツ運動が高揚し、アマチュアリズムで排除された労働者階級や中産階級の女性たちがブルジョア・オリンピックに対抗して、独自の運動を展開し始めた。これらは1930年代初頭からのドイツナチズム（ファシズム）によって抑圧されてしまったが、戦後、スポーツ・フォー・オール政策の中にその意図はある程度結実されて行く。

⑦1960年代からの先進資本主義国における高度経済成長は、それらの国々における福祉国家の第2段階に、文化芸術、スポーツなどの分野も福

社の一環に組み入れ始めた。それらは国民の要求の増大の反映であると同時に、国家の側からも国民の心身の統合手段でもある。スポーツ・フォー・オール政策とはこうした両面を持つ。この大衆化によってアマチュアリズムの制約を破棄した。

⑧ 1960年代は旧植民地国の多くが独立し、世界的な認知を求めて、国連と同時にオリンピックにも参加し始めた。特に1960年のローマ大会と64年の東京大会におけるエチオピアのアベベ・ビキラ選手の男子マラソン2連勝はアフリカ諸国のナショナリズム高揚に大きな刺激となり、それ以降それらの国々では国を上げての選手育成策に乗り出し、IOCのオリンピックソリダリティーにも助けられて、国家養成の「ステート・アマチュアー（スタマチュア）」を多数輩出した。この時点で、スタマチュアは社会主義国だけのものではなくなった。そして、社会主義国のスタマチュアへの対応として、アメリカでは大学生へのスポーツ奨学金の給付（カレッジ・アマ）、日本のような企業選手（カンパニー・アマ）、そして新興国でも、先進国でも国家からの援助、ないし公務員、軍人などの身分でありながら実質はスポーツを職業としているステート・アマが一般的となり、競技の高度化が進んだ。こうして伝統的なアマチュアリズムの内実は空洞化していた。

⑨ 1980年代以降は、スポーツのグローバル化（TV放映化、市場化、プロ化）が大きく進展した時期であり、この面からも高度化におけるプロ排除は意味を成さなくなった。こうして80年代にはアマチュアリズムは完全に破綻した。

アマチュアリズムはブルジョア自身自身の階級的統合のために、「伝統の創造」であると規定したのはE・ホブズボウムであるが、ジョーン・ハーグリーブスは『スポーツ・権力・文化—英国民衆スポーツの歴史社会学—』⁽²⁾の第3章「ブルジョア・モデルの成立」は近代スポーツの成立がブルジョアジーの形成と共に、彼らの階級的統合の手段の1つとして、リーダーシップ、権威への服従、愛国心、軍国主義といったヴィクトリア時代

のブルジョア道徳、ブルジョア・イデオロギーの特性を吹き込む手段として活用されたと指摘し、それはアスレティシズムとして、あるいは階級差別としてのアマチュアリズムとして具体化されたことを述べた。こうしてアマチュアリズムとアスレティシズムのブルジョア・イデオロギーは労働者階級を排除してスポーツ文化の階級的独占を宣言すると同時に、その一方で、ブルジョア階級自身の社会的統合の手段としても機能したのである。それは個人種目によるよりも、集団種目においてより効果的に機能した。それ故に、身体形成文化を求めている、同様の要望を持つ世界のブルジョアジーによってスポーツと結合したアマチュアリズム（あるいは「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」）が急速に普及した。と同時に、スポーツがパブリックスクールに導入され、教育の一環を占める上で、アスレティシズムとナショナリズムが結合された。それ故、第1次世界大戦、第2次世界大戦直後の危機にあっても、一方での労働運動の高揚に対抗したブルジョアジーの国際的連携の場として、未だアマチュアリズムを誇示しながら、しかも平和運動的に開催できるオリンピックは、まさに全階級的の意味合いを込めながら、戦後直後に復活し得たのである。

スポーツの高度化は、アマチュアリズムのブルジョア個人主義では対応が不可能となり、やがて資本の介在を、資本とスポーツの双方から求めることとなり、この点でもアマチュアリズムは内外から崩壊した。

オリンピックの歴史はアマチュアリズムとプロ選手ないしプロ化との闘いの歴史でもあった。アマチュアリズムという、資本主義社会において資本家階級によるスポーツ独占という支配構造は、資本主義社会の原理と相容れない多くの矛盾を内包した。第1にスポーツの大衆化を抑圧し、第2にスポーツの高度化を抑圧し、第3にスポーツの市場化を抑圧した。したがって、その後のアマチュアリズムとオリンピックの歴史はこれらの抑圧思想・機構の崩壊過程でもあった。

註

(1) 内海和雄『プロ・スポーツ論——スポーツ文化の開拓者——』創文企画、

2004 年、内海和雄『アマチュアリズム論——差別無きスポーツ理念の探究へ——』創文企画、2007 年

- (2) ジョン・ハグリーブズ『スポーツ・権力・文化——英国民衆スポーツの歴史社会学——』不昧堂出版、1993 年。（原書、John Hargreaves, *Sport, Power and Culture: A Social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain*, Polity Press, Cambridge, 1986）

4. 万博の影響

18 世紀末にイギリスで始まった産業革命は、次第に周辺各国へ普及し始め、それを基礎に諸国が資本主義化を促進し始めた。その一環に国内での品評会、博覧会も数多く開かれるようになっていた。

それらの 1 つの結集点として、1851 年にロンドンで開催された第 1 回万国博覧会（Expo）である。これは総合博覧会である。それ以降 1900 年までの開催は図表 4-2 に見るように、1873 年のウィーンを除けば西欧とアメリカを中心としていた。小規模の博覧会や産業別の個別テーマ博覧会は 1851 年以前にも以降にも各国で数多く開催されていた。

(1) 万博は資本主義の象徴

万博とは、重軽工業製品を中心とする産業の展示、その商取引を目指したものである。当然、その前提ないしそれと併行して近代都市の形成が必須となり、交通網の発達、情報の普及があり、多くの旅行のための宿泊施設や観光資源の開発、それに伴う食糧流通・集積も必須となる。また、これらの興業やイベントを円滑に運営するための組織とノウハウが蓄積されていなければならない。例えば、第 1 回万博のロンドンには半年で述べ 600 万人が訪問した。これだけの多数の人口の集中は戦争を除けばあり得なかったものである。現在のオリンピックはその規模の拡大から大都市でないと開催できない実態を想像してみれば、当時の万博の開催地が大都市に集中した理由も明白である。

万博への参加は、資本主義の実態、その力を参加者に認識させた。こうして、多くの人が共通の知識を共有した。また多くの国、地域からの多数の人々の参加は、言語の交流も盛んになり、翻訳、通訳の必要性や重要性、さらに共通語の必要性をも認識させた。そして、万博は開催国を中心とする先進諸国の国威発揚の場である。例えば、第1回のロンドンでは会場の建物が、鉄骨とガラスで出来たクリスタルパレスが建設された。これは当時の技術水準、鉄鋼技術の粋を尽くしたものであり、世界中へのアピールとなり、英国の面目を世界知らしめた。また、1889-90年のパリ万博では、現在も健在なエッフェル塔が建設され、ロンドン万博から半世紀弱を経過した鉄鋼技術の到達水準とフランスの威信を示した。

こうして、万博は開催国のみならず出典した先進諸国の多くが自国の科学技術、文化水準を世界に示す場であり、民族と文化交流の場であり、それによってその後の受注へと繋げる一大商取引のイベントであり、最大の観光産業化であると同時に、平和的に国威発揚・ナショナリズムを高揚させるの最大のものである。

吉見俊哉⁽¹⁾は万博の世紀は1851年から1940年代であるとして、万博を「帝国主義のプロパガンダ装置としての博覧会、消費文化の広告装置としての博覧会、大衆娯楽的な見せ物としての博覧会という3つのテーマ」(p 259)で分析した。そして万国博覧会とオリンピックとの構造的同型性であると指摘して、「社会空間としての構造からいうなら、万国博は産業のオリンピックであり、オリンピックはスポーツの万国博であった」(p 273, 下線：内海)と規定した。

註

- (1) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書、1992年。尚、吉見はここで、1889年のパリ万博以降、「人類の展示」として植民地原住民を展示し、支配国の優越性と恩恵を顕示した帝国主義の内容がオリンピックにも持ち込まれ、オリンピックもまた帝国主義の一環に組み込まれたことを述べた。そして万博の世紀が終わる1940年代以降は万博に替わってオリンピックが主要なイベントとなってきたこと、その背景にメディア、特にテレビに

よってオリンピックがスペクタクル化したことを指摘している。

(2) 万博がオリンピックに与えた影響

世界的なイベント開催の必要性、可能性、現実性そしてその影響力を目の当たりにしたスポーツ関係者も、臆気ながらもスポーツでの世界大会をイメージするようになった。

1859年にはギリシャのアテネで古代オリンピックの復活を願うザッパス・オリンピックが開催された。ルーマニア在住のギリシャ人（ディアスポラ）富豪のザッパスの意図は完全にスポーツ大会としての復活であったが、ギリシャ政府の主催者は、産業祭・芸術祭とセットで、ないしはそれらの1こまとしてスポーツ大会を仕組んだ。それでも、ギリシャ国内で、オリンピック復活を意識した大会が開始した。その開催様式も万博に類似した。第3回（1875）の大会は大ギリシャ博覧会（1200の国内展示者、72の外国展示者でギリシャ最大のイベント）の1部として開催された。

1880年代になるとイングランドのマッチウエンロックのブルックス博士は世界的なオリンピックの開催を提言し始めた。そして1890年には当地を訪問したクーベルタンにも伝えられたと考えられている。

そして1889-90年のパリ万博には、クーベルタン自身もスポーツ会議の主催者として参加した。そして万博全体を直接に体験した。これ以降、クーベルタンの中に、オリンピックの開催について、万博に寄り添いながら万博の力を借りて、自立せんとした構想が確立したと思われる。つまり、彼のオリンピック構想は、その資金面からも、そして世界中からの参観者の構想も含めて、万博の一環で開催することが構想されたからである。これは資金面から言えば、国家や都市からの多大な支援を期待した。したがって、第1回のアテネは別にして、第2回のパリ大会、第3回のセントルイス大会、第4回のロンドン大会のいずれもが、万博の一環としての開催であった。それは単に資金や参加者ばかりでなく、万博の開催様式、組織様式全体からも言えることである。これは明らかに矛盾である。つまりア

マチュアリズムを採用し、他者からの援助を禁止し、労働者階級を排除してきたオリンピックが国家（ないし都市）からの援助を前提としたからである。とはいえ、当時の IOC 委員にとって国家とは自分たちの階級の支配する国家であったから、その点は余り問わなかったのである。

こうして、「スポーツの万博としてのオリンピック」が構想された。つまり、これまでスポーツ領域には単一種目としての国際競技連盟はいくつか結成されていたし、その過程にあった。しかしそれぞれの組織間には全く関連が無く、別の種目が寄り集うなどという発想は全くなかった。クーベルタンはそれを寄せ集めたのである。これは万博でなくてどこから発想されたものであろうか。そして古代のオリンピアード（4年間）を採用しながら、世界の諸都市を巡回することもまた、古代オリンピックがオリンピアで固定した行事であったのに比して、まったく万博の発想に他ならない。

当時のオリンピックのイメージはまさに1都市で開催可能である規模でもあった。開催主権は都市であるが、しかし実質的な運営は国家であった。この点も又万博と同様である。そして国家元首の開会宣言、国旗・国歌の活用、さらに選手選考・派遣など、国家的な運営、式典内容も万博方式を踏襲した。そして財政もまた国家的援助を大きく期待した。この点でクーベルタンはナショナリズムの対立を避けるために都市に主権をあたえたとする根拠は弱い。

こうして、オリンピックもまた、資本主義社会が到達した経済的、文化的発展水準に規定されながら、その推進の一環として、万博という先行事例を模しながら構想された。万博もオリンピックも、まさに資本主義の象徴といえるであろう。そして「伝統の創造」の一環であろう。

図表4-2は万博の第1回ロンドンから第30回の大阪までを示したものである。インターバルこそ4年ではないが、世界各都市を巡回する方式は採られている。そして世界戦争による開催不能も何度か経験している。近年の万博は、情報網のグローバル化の中で、当初ほどではないとはいえ、そのインパクトは未だに大きなものがある。

図表 4-2 万博の参加者数と収支

Periods	City	Visits (millions)	Profit-Loss	International Sport Organization
1851	London	6.0	Profit	Olympic Games (Summer) 1:1896 Athens
1855	Paris	5.2	Profit	
1862	London	6.2	Loss	
1867	Paris	6.8	Profit	
1873	Vienna	7.2	Loss	
1876	Philadelphia	9.9	Loss	
1878	Paris	6.0	Loss	
1889	Paris	32.0	Profit	
1893	Chicago	27.5	Profit	
Pre-1914				
1900	Paris	48.0	Loss	2:1900 Paris
1901	Buffalo	8.1	Profit	
1904	St Louis	19.7	Loss	3:1904 St Louis
1908	London	8.4	Profit	4:1908 London
1910	Brussels	13.0	Loss	
1911	Glasgow	11.5	Profit	5:1912 Stockholm
1915	San Francisco	18.8	Profit	6:1916 Berlin (×)
Inter-war				
1924/5	London	27.0	Loss	7:1920 Antwerp
1926	Philadelphia	6.4	Loss	8:1924 Paris
1927	Paris	no data	no data	9:1928 Amsterdam
1929	Barcelona	no data	no data	
1931	Paris	33.5	Profit	10:1932 Los Angeles
1933/4	Chicago	48.7	Profit	
1937	Paris	34.0	Loss	11:1936 Berlin
1938	Glasgow	2.6	no data	
1939	San Francisco	17.0	Profit	
1939/40	New York	45.0	Loss	12:1940 Tokyo (×) 13:1944 London (×)
Early post-war				
				14:1948 London
				15:1952 Helsinki
				16:1956 Melbourne
1958	Brussels	41.5	Profit	17:1960 Rome
1964/5	New York	51.0	Loss	18:1964 Tokyo
1967	Montreal	51.0	Loss	19:1968 Mexico
1970	Osaka	64.2	Profit	20:1972 Munich
				21:1976 Montreal
				22:1980 Moscow
				23:1984 Los Angeles
				24:1988 Seoul
				25:1992 Barcelona
				26:1996 Atlanta
				27:2000 Sydney
				28:2004 Athens
				29:2008 Beijing

出典 : Maurice Roche, *Mega-Events and Modernity: Olympics and Expos in the growth of global culture*, Routledge, 2000, p 43

第5章 オリンピック「復興」の基盤

1. オリンピック復興の先行例

封建時代における封建領主たちが主催した領地内での狩猟行動は、領地内の見回りと軍事トレーニングを兼ねていた。そしてボクシング選手をパトロネージしたり、トーナメント大会を開催することは貴族としての権勢を誇示する機会とも考えられていた。近代に入ってゆく上でも尚、同様な風習は残存した。つまり、地域の盟主として、あるいは慈善として、それらの競技会は企画された。

近代都市が形成される前のスポーツは、封建貴族（ジェントリー）等が中心の農村的スポーツつまり狩猟、クリケット、乗馬、ゴルフ、釣りなどが行われていたが、産業化と都市化に伴って、フットボール（サッカーやラグビーの未分化なもの）などの集団的な球技が大きく普及し始めた。16世紀中世文学にも、例えばシェークスピアの劇作にも古代オリンピック大会の表現が出てきており、その他の著作にも活用され、古代オリンピックへの郷愁は高まっていた⁽¹⁾。1793年のグーツ＝ムーツ『青少年の体育』の1章はオリンピック記述である。

図表5-1は中世以来、「オリンピック」と銘打たれた競技会である。開催国も西欧のみならず北米、北欧そしてギリシャに及んでおり、古代ギリシャオリンピックの影響とこの時期の西欧における古代ギリシャ回帰現象の一端を知ることが出来る。それぞれの大会を主催した人々は地域の盟主であり、古典教育を受けている人々が大半であったから、古代ギリシャオリンピックとその名声には皆熟知し、自らの競技会に気軽にオリンピックと冠したともいわれている。いずれにしてもそうした競技会が地域に誕生し始めたことと、それがギリシャと結合されたことに、この時代の欧米つまり自らの国と古代ギリシャとの連続性を強調した。

更に、ドイツのスポーツ史家J・K・リュールは19世紀のオリンピックイベントでこれまで研究されていない各競技大会を次のように紹介してい

図表 5-1 各地のオリンピック「復興」

Year	Event	Organisers	Country
1662-1852	Cotswold 'Olimpick Games'	Robert Dover	England
1679	'Hampton Court Olympics'	Royal court	England
1790	Proposed Olympic Games in Paris		France
1779	Olympic Games, Woritz		Germany
1819-present	Highland Games	Scotland &	overseas
1830s	'Greek Competitions', Poznan	Commercial	Poland
1834,36	Scandinavian Olympic Games, Ramlosa	Johann Schatau	Sweden
1844	Montreal 'Olympic Games'	Olympic Club	Canada
1849-1895	Much Wenlock Games-annual	W.P.Brookes	England
1853	Franconi's Hippodrome, New York	Commercial	USA
1859,70,75,88	'Zappas Games', Athens	Evangelios Zappas	Greece
1861	Wellington Games	Shropshire Olympian Soc.	England
1862-67	Liverpool Olympics, annual	Liverpool Athletic Club	England
1866	Olympic Festival, Llandudno	Athletic Society of GB	Wales
1866-1868	National Olympiad Assn. Games	National Olympiad Assn.	England
1874, 1877	(London, Birmingham, Wellington,		
1883	Much Wenlock, Shrewsbury, Hadley)		
1870s	'Olympic Games', Wrzesnia		Poland
1892	Campaign for 'Anglo-Saxon Olympiad	J. A. Cooper	England
1893	'Ancient Greco-Roman Games'	Olympic Club of San Francisco	USA

出典：Ruhl and Keuser (1997), Redmond (1988), K. Toohey and A. J. Veal, *The Olympic Games, A social science perspective*, CABI Publishing, 2003, Olympic Games revivals, p 37

る⁽²⁾.

1. 1.1796: "Olympic Games" in Paris in the framework of revolutionary festivals.
2. 1820/1850/1852: "Olympic Games" in the framework of the "Oktoberfest" in Munich.
3. 1832-1952: "Olympic Games" for school boys in Rondeau and ZMontfleury, France.
4. 1844: "Olympic Games" lasting two days in Montreal, Canada.
5. 1853: "Olympic Games" in an indoor circus (five-month run) in New York, United States.
6. 1866: "Grand Olympic Festival" in Leicester, England on the grounds of a lunatic asylum.
7. 1877: "Modern Olympic Games" in Athens, staged by a crew in Piraeus Harbour.
8. 1880-1940: "Olympic Games" at Lake Palic in Subotica, Hungary.

以上のように、中世以降オリンピック熱は高まり、またドイツによる19世紀以降のオリンピア発掘などもあって、古代ギリシャへの郷愁は高まりつつあった。こうした中で、オリンピックの復活は多くの人たちが口にはしていたし、情勢もそのことを可能にさせる条件を備えつつあった。こうして、普遍的でもある運動文化がこの近代化・資本主義化の時期に急速に増大したのは、近代的身体の要求、必要性が社会的に生まれたのと同時に、次第に流動化する社会の安定化の1つの方策として、社会統合の1つの手段としてスポーツ大会が頻繁に開催されたものである。しかもそれらのスポーツ大会は主催者である地域の貴族やブルジョアジーの教養から、オリンピックという名を冠するのがごく自然なことであった。こうして、関心は次第に国際的なオリンピックの開催へと向かい始めた。しかし問題は誰がそれに手を付けるかであった。ここで、近代オリンピックの誕生に直接、間接に連なる先行事例を少し概観しておこう。

註

- (1) Richard D. Mandell, *The First Modern Olympics*, University of California Press, 1976, Chapter2, Proposals for revival.
- (2) Joahim K. Ruhl, 'Olympic Games before Coubertin' (in J. Findling, K. Pelle, *Encyclopedia of the Modern Olympic Movement*, Greenwood Press, 2004)

2. ロバート・ドーヴァー：Olimpick Games

通称「ドーヴァー・オリンピック」をここで取り上げる理由は、当時の代表的な事例としてである。

(1) Dover Olimpick の概要

その歴史的概要（歴史・日時・種目 games not sports・賞金）は以下のようである。その場所、チッピング・カムデンはイングランドの中西部コッツウォルト地区にある。大都市バーミンガムとシェークスピアの生誕地ストラトフォード・アポン・エイボンとの中間にあり、現在では中産階級地域であり、観光地域である。

この大会は1612年に始まり、2012年のロンドン・オリンピックで400周年を迎える。とはいえ、連続して開催されてきたのではなく、時には中断しながらも現在は復活し、活動している。大きくは3期に区分される。

①第1期は1612-1652年。コッツウォルト地域に生まれ、オックスフォード大学を出て法律家となったロバート・ドーヴァーがチッピング・カムデンに住み始め、1612年の聖霊降臨節にゲームを開催したとされる。あるいは既存のゲーム大会を強ちに復活させたものとも言われる。既に1602年、1604年、1610年、1611年、あるいは1596年に行われたとの説もあるが、その点から見れば、ロバート・ドーヴァーがその大会を「創立した」のか、「復活した」のかは疑問のあるところである。が、いずれにせよ、当時、こうしたゲームが多少なりとも行われていたであろうことは

想像に難くない。

次第に盛大になり、名声も広く行き渡り、国王からの後援も受けるまでになったが、1642-46、1648-52年に及んだ市民戦争に巻き込まれて、大会の停止を余儀なくされた。市民戦争は大内乱（ピューリタン革命）とも言われ、チャールス1世（王党派）と国会（議会党員）との小競り合いの場となったからである。これまで、Dover Olimpick はカトリシズムの促進に利用されてきたが、ここに来て宗教的対立がこの地でも激化し、大会の開催が不可能となった。ロバート・ドーヴァーは王党派であったと言われ、危機にあったが、生き延びた。そして市民戦争が終了した時に、復活した。

ロバート・ドーヴァーは1612年、当時月に2日しかない休暇を有効に活用するために、周りに相談してOlimpickを開催した。場所ドーヴァーの丘は、近辺の村が一望に見渡せる位置にあり、この競技場をさながら舞台を想定したのではないかと考えられている。

②第2期は1660-1852年。ゲーム自体の復活は1708年である。この時期の参加者も多数に及び、19世紀末には参加者が3万人にも上った。下層民、ならず者までが参加し、地域全体が道徳的に低下したとする批判や、競技での賞金をめぐる喧嘩も絶えなかった。

大会自体は協会や国からの後援を得たが、特に1851年の大英博覧会の年には、大会はヴィクトリア女王に忠誠を表した。しかし、1852年を最後に大会は休止した。当時の参加はますます多くなり、競技の統制が不可能になりつつあった。そして競技の質は低下した。近辺の工業地帯から、労働者たちが挙って参加し始め、治安が悪化した。賞金を巡る争いや参加者たちの賭けが問題化した。特に、ウォースターからオックスフォードへの1846-53年の鉄道建設による労働者たちの参加と狼藉には多くの批判があった。

当時の賞品には、レスリングにはベルトないし銀時計、ハードル走には銀杯、ダンスにはリボン、袋跳びや棒登りにはマトンの足等が与えられた。（因みに、ドーヴァーの丘は1929年にホテル関連の施設を建設する目的で

グリッグズによって買い取られたが、その後ナショナルトラストに寄贈された。)

当時、娯楽もないなかで、全国に知れ渡り、労働者たちも多数参加した。しかしその一方で、治安も悪化した。近辺の村々も参加の上で、対抗意識が激化した。これらのことが中止になった原因ではないかと考えられる。

この点で、この時期は産業革命で石炭と鉄鉱石で産業化し、多くの労働者がアイルランド辺りからも大量に移住してきており、地域不安は十分高まったと考えられる。その点で、地域の融和を意図して開催されたと考えられる。それでも、参加人数が多くなりすぎて、收拾がつかなくなってしまったといえよう。

③第3期は1951年以降、約1世紀の休止を経て、1951年に復活した。しかし翌年の1952年は丁度牛の口蹄疫(foot and mouth disease)の蔓延により中止となった。活気を持ったのは次年度1953年以降である。

1965年には「ロバート・ドーヴァーズゲームズ協会」が結成された。協会の意図は、伝統的なコッツウォルトのゲームを現代の好みや要請とマッチさせて促進し、開催することである。開催日も可能な限り伝統に則って行われる。

オリンピックへの貢献も評価され、1988年にはBOAから記念銘板を送られ、1996年からはBOA旗が大会に掲げられるようになった。そしてオリンピック選手も参加するようになった。

(2) ゲーム種目・賞金

1600年代の第1期に行われた種目は、未だ近代スポーツの誕生はなく、伝統的なゲームが中心であった。当時の種目の記述は1636年に出版されたAnnalia Dubrensis(詩集)の中に記述されていることと、その本の表紙に記されている。

- ・競馬(horse-racing)
- ・コーシング(coursing)(ハウンドドッグによるウサギ追い)

- ・ハンティング (hunting)
- ・ランニング (running)
- ・跳躍 (jumping, leaping, vaulting : 各種の差異が不明?)
- ・ハンマー投げ (throwing the sledge-hammer)
- ・棒蹴飛ばし (spurning the bar)
- ・槍操作 (handling the pike)
- ・レスリング (wrestling)
- ・フェンシング (fencing)
- ・ダンス (dancing)
- ・チェス (chess)
- ・曲芸者 (tumbler)
- ・楽士 (musician, dressed as Homer)
- ・ドーヴァー城

詩集における詩人たちはロバート・ドーヴァーを褒め称えるが、その他に2つの傾向がある。1つは古代オリンピックと同一化することであり、もう1つはゲームに対するピューリタンの態度（ゲームを享楽主義として批判）を批判している。前者に関しては、詩人たちの多くは古典教育を受けていたから、ごく自然なことであった。

第2期の種目（2日間）は名声も高く、参加も多いが、批判もあったとされる。

「木曜日のゲーム」

競技の多くは団体の対抗戦が大半である。そのために、村の「ナショナルイズム」が激昂した。

- ・レスリング (wrestling) はチーム5ないし9人の団体戦で賞品は多様（金のレース、ベルト、銀杯、3ギニーの現金）である。
- ・木剣 (backswords) は男性チーム対抗戦（1チーム7, 9, 11人が約10,13,20ギニーの賞金を目指して闘う。）競技者は左手を腿に縛り付け、右手で剣を持って闘う。

- ・ 棒術試合 (cudgel-play)
- ・ ダンス (dancing)
- ・ すね蹴り (shin-kicking) は、金属を先端につけた長靴を履いて競技者が相互に肩に手を掛けて離れずに、相手を蹴り合う競技。コッツウォルト地域のゲームとして有名。

「金曜日のゲーム」

- ・ ロバ競馬 (donkey race)
- ・ 競馬 (horse race)
- ・ 投擲 (jingling) は 輪 投 げ (quoit-throwing) と 馬 蹄 投 げ (casting horse-shoes) である。
- ・ ボーリング (bowling) は九柱戯 (skittles 木製球を用いる) とローンボウルズである。
- ・ 跳躍 (leaping)
- ・ 袋競争 (running in sacks) :
- ・ モーリス＝ダンス (morris dancers) は英国の民俗舞踊で伝説上の人に扮して男が踊る。

(3) 'Olimpick' の意味

そのスペルは 1636 年に表れ、その後 Dover Olimpick では一貫して使用されている。

ロバート・ドーヴァー自身も、古代ギリシャ史の教育を受けていたから、規模は小さいがオリンピックと命名した。

(4) 誕生の社会背景・意図

各時期の組織化は宗教的、政治的、財政的な動機から成されたと考えられる。

(5) games の所有

参加者は社会的混合、参加者は土地所有のジェントリーから小作人 (working man) に及んだ。開催費用は公共の (大衆の?) 援助や後援者 (patron)、宗教的・政治的後援による。1612 年から 1616 年の死去まで、チップング・カムデンの近くであるストラットフォードに住むウィリアム・シェークスピアも観戦し、その作品の一部に反映されている。ジェームズ 1 世 (1566-1625, 在位 1603-25) やチャールズ 1 世 (1600-1649, 在位 1625-49) らによる支持を得た。後者は銃と火薬を寄付したと言われていた。ルパート王子は 1636 年には自ら参加している。

一般化すれば、ハンティング、ランニング、跳躍、ダンスなどの活動は奨励され、王の承認を得ていた。それらは住民の戦争への準備となったり、住民をビール酒場からある程度足を遠ざける原因となったからである。しかし多くのピューリタンたちは、イングランドにはゲームへの過剰な嗜好があると信じ、そして不道德、乱暴さ、酔っぱらい、さらに異教徒を起源とする祝祭 (オリンピックはギリシャオリンポスの神々への奉納行事) に対して、そして安息日を犯す何らかの活動に反対した。ここから窺えることは、1600 年代の当時、すでにイングランドではゲームがかなり行われていたということである。

(6) 現在の Dover Olimpick

大会は国内、国外を問わず関心を高め、ヨーロッパ諸国からのテレビ局や日本など遠国からの訪問者も多くなっている。

1636 年の大会内容などの伝統的な種目への回帰があり、木剣 (backwords) やすね蹴り (shin-kicking) の模範演技も行われる。と同時に、1970 年代後半からは 5 マイル走も取り入れた。競技大会への参加は天候によって左右されるが、現在ではおよそ 3000 人が参加する。地域振興の一環として、大きな意義を有しているが、2012 年のロンドンオリンピックの IOC における決定 (2005.7.6, 於シンガポール) は、Dover

Olimpick の 400 周年でもあり、これからはいっそう活気づくと期待されている。現在は BOC から援助をもらっている。

大雨で流れると、再開はしない。その分、入場料などの収入が無く、バンドなどの契約金を払うために、大きな赤字となる。過去 10 年に 1 回あった。本会は営利団体でないので、余剰金は寄付などを行っている。最近の世情か、いろいろと禁止条項も増え、反対運動もある。例えば夜に行われる松明行進（ドーヴァーの丘からチップینگ・カムデンの中央広場まで）や shicking 等は危険だ、残酷だと言う理由による。前者にはボランティアや警察も警備に多数当たる。しかし行事として今後も継続する。

2004 年はいくつかの種目の模範演技も行われた。テコンドーも行われた。「チーズローリング」など、人が坂を転がり落ちる種目もあり、けが人も若干出る。

(7) 感想

この村で、なぜこのような行事が行われたのかは、未だに未解明である。歴史的に重要な事象にもかかわらず、研究は極めて少ない。考えられることは、当時、イングランド内ではこうした土着のゲーム大会が頻繁に行われていた。それらの 1 つが継続し、生き残ったと考えられる。同じ事は、Much Wenlock Olympic に関してもいえることである。

註

- (1) Francis Burns, Robert Dover's Games Society (Chipping Campden), *Heigh for Cotswold! A History of Robert Dover's Olimpick Games*, First edition 1981, New edition 2000

参考文献

- *Vyvyan, E. R., *Cotswold Games-Annalia Dubrensis*, The Tabard Press Limited, 1970
*Celia Haddoris, *The First Ever English Olimpick Games*, Hodder & Stoughton, July 2004
*Don Anthony, *Minds, Bodies and Souls*, The British Olympic Heritage Network

(3 volumes), BOA, 1999

*Neil Tranter, *Sport, economy and society in Britain 1750-1914*, Cambridge University Press, 1998

3. マッチウエンロック

(1) マッチウエンロック・オリンピックの概要

1850年にはウエンロック・オリンピック・クラス (Wenlock Olympian Class) が生まれ、最初の大会が開催された。当時、競技会は殆ど行われておらず、ブルックス博士らの独創によるものである。オリンピック・クラスの目的は「町の住人とウエンロック近隣住民の道徳的、身体的、知的改善」のためである。

そこで行われた種目は輪投げ、フットボール、クリケットなど、スポーツと伝統的な田舎スポーツとの混合であった。ページェント（野外劇）は初回から重要な行事であった。バンドに導かれて、多くの旗、選手、役員が飾り付けた町中を競技場へとパレードした。

大会には誰でも参加できた。初期の種目は目隠しの一輪車押し (blindfold wheelbarrow races) などの地域固有の趣のある種目も行われたが、次第にスポーツ種目も導入された。それに伴い、近隣からの参加も増えた。この段階で古代ギリシャの理念が反映されていた。つまり、勝者は月桂樹の冠を貰い、名誉をたたえた詩を提供された。1890年にはクーベルタンも来訪した。ギリシャとの交流も若干進み国際的認知も進んだ。当時競技が行われた土地は Milins-Gaskell 家によって所有されていたが、1935年に町に寄付された。現在リンデングラウンドとなり、シュロップシャー県とウィリアムブルックス校が合同で活用している。

1861年、ブルックスのイニシャチブでシュロップシャー・オリンピック大会が開催された。1865年、リバプールのハリーヤロンドンドイツ体操クラブのラベンステインとともに、リバプールに全国オリンピック協会

を設立した。アマチュア選手の協会を促進するためである。1866年大会はロンドンのクリスタルパレスで行われ、1万人の観客を集めた。しかしこれに対して、アマチュア陸上競技協会（Amateur Athletic Club、後に Amateur Athletic Association）—アマチュアとはパブリックスクールかオックス・ブリッジ卒業者に限るというエリート集団で構成されている—が、イギリスのスポーツはロンドンに基盤を置く、彼らの統制下に置くべきであると主張し、ブルックス等に反対した。それでもブルックス等の運動が実り、やがて、後者は全階層へと門戸を広げた。

以上のように、ブルックスはアマチュアリズムに抵抗しつつ19世後半のイギリススポーツに極めて重要な役割を果たした。

(2) イングランドの概要

①資本主義社会とスポーツの誕生

イギリスにおける近代スポーツの発祥とその背景については第4章で述べた。その一環に、イングランド中西部の炭坑と鉄工の町マッチウエンロック（バーミンガムの北西）の篤志家、啓蒙家、福祉家が住民を組織した。

② Much Wenlock Olympic (by W.Brooks) の労働者階級の包含

ヴィクトリア期（ヴィクトリア女王）の治世（1831-1901）の都市は活気に満ちていたが、農村部は未だに牧歌的な雰囲気を持つつつ、大地主によって厳しく管理されたところも多かった。それらは「閉じられた村」と呼ばれたが、小規模の個人による自由土地保有権者によって所有された村々もあり、マッチウエンロックは後者であり、貧者や移住労働者たちに住居を提供したりした。

当時は産業革命もかなり進み、この地方も炭坑、ガス産業、鉄工業、鉄道建設などの発展によって、近代労働者が多数存在していた。一方、マッチウエンロックの様な近郊の村では季節農業労働者も必要であった。こうした工業・農業労働者の多くはアイルランドからの移民が多かった。その意味で、彼らの適応のためという視点も重要だった。アイルランドやイン

グランド西部から炭坑への移民が、第1次世界大戦前の40年間はアメリカを除いて最も高い移民率であったので、ウェールズでは「ウェルシュネス」が彼らを包摂するために創造されねばならなかった⁽¹⁾、と言われるくらいに住民の社会的統合の施策が求められていた。

ロンドンなどの大都市では労働運動なども組織化され始めていたが、マッチュエンロックのような片田舎では、それらの影響は未だ強くなかった。この町で活動するブルックスにとって、全住民を対象とする諸活動が、「未だ」許される状態にあったと考えられる。その意味で、地域全体の福祉・文化向上を視野に入れることが出来たのである。

19世紀初めのマッチュエンロックは、高額の授業料を払えない人々に何らかの教育を提供できなかった。それは1847年の学校設立まで待たなければならなかった。

1862年には「マッチュエンロックとセヴァーン合同鉄道会社」が設立され、1864年までにはバーミンガムや遠くはロンドンまでもこれまで以上の出やすくなった。

註

- (1) Richard Holt, *Sport and the British-A Modern History*, Clarendon Press/Oxford, 1989, p 249

(3) Dr. Williams P Brooks

1809年にマッチュエンロックで医師の父のもとに生まれ、医師を志してロンドンに出て勉強した。その後イタリーにも渡った。1830年には医学勉強のためにパリで学んだが、父が死亡したために翌年マッチュエンロックに戻り、父の後を継いだ。

彼は地域の知識人として、マッチュエンロックには多大な貢献をした。1841年には治安判事（小事件の裁判や宣誓の確認・結婚式の立ち会いなどを行う地方判事；普通は地方の名望家で無給の名誉職）となり、そして道路と課税委員を務めた。その後役場の議会改革に参加し、穀物通商やウ

エンロックガス会社の設立、マッチウエンロックとセバーン溪谷鉄道の建設にも関わった。

1841年には兄弟と共に農業読書協会（Agricultural Reading Society）を設立し、農民や労働者たちの自己教育のための手段を提供した。当時、農民は文字を知らなくても良いと思われていた時代であり、労働者の多くはアイルランド移民が多くいた時代である。それに伴った、図書館や博物館も設立した。こうして地域の労働者階級の改善の多くの計画を企画した⁽¹⁾。この協会からは、芸術、交響楽団、植物、地質学、地方地理学、そして体育学級も生まれた。

1850年にはウエンロック・オリンピッククラス（Wenlock Olympian Class）も生まれた。知識人として古典を学び、古代ギリシャへの関心も高く、地域の知識人としてアンテナも高く、現実にギリシャとの連絡もあった。1859年のザッパス・オリンピアの開催を知り、ギリシャ王に10ポンドを贈り、支援した。これは広く教育を受け、誕生後のよちよち歩きのギリシャ国家の動向を気に掛けていたヨーロッパ知識人の1人としての行動であろう。また彼は、そのザッパス・オリンピアの種目から自らのウエンロック・オリムピックに槍投げ、詩の競争などを導入した。

医者として、すべての階層の人々の治療に当たった。その経験から、地域住民の健康、福祉の向上には特に関心をもった。そのことが、体育・スポーツの奨励を強調するようになり、やがて公立学校での体育実現への運動に参加するようになった。イギリス学校体育誕生の功労者の1人である。ウエンロック・オリンピック協会（1860年に改名）としても1868年、1870年そして1890年には国会に体育教育の実現を誓願した。ブルックス個人としても機会あるごとにグラッドストーン他の重鎮たちに手紙で誓願した。

註

- (1) David Young, *The Modern Olympics*, The Johns Hopkins University Press, 1995, p 8

(4) 近代オリンピックへの影響

1859年に、ギリシャでのザッパスオリンピックの開催を聞いたブルックスは、勝利者の賞金とするよう10ポンドを寄付した。このオリンピックは全国産業博覧会の一環として開催され、参加者はギリシャ人に限られた。

1877年、ヴィクトリア女王のジュビリーを記念して、ブルックスはギリシャからのオリンピック賞を求めた。それに応じて、ギリシャ王ジョージ1世から銀杯が送られた。それはシュリューズベリーで行われた全国オリンピック大会で開陳された。この件を通してブルックスはロンドンのギリシャ大使館員J・ゲナディウスとコンタクトがとれるようになった。

1880年、ブルックスはギリシャ（政府）に対してオリンピックを国際大会として復活するように説得を行った。1881年、ギリシャの新聞でクリオは次のように報告している。「熱心なギリシャ崇拜者であるブルックス博士は、アテネで国際オリンピック大会が開催されるように努力している。」しかし残念ながら、ギリシャ国家は変化の過程であり、ブルックスやゲナディウスらの熱意にもかかわらず、ギリシャ政府はその要求を丁重に拒否した。

クーベルタンは、1890年にマツチウエンロックを訪問した後の12月に、自らの雑誌である『運動評論 La Review Athletique』の中で次のように書いた。「もしも、近代ギリシャがその復活の仕方を知らない近代オリンピックが復活したとするならば、それはギリシャに依るのではなく、ブルックス博士に依るのである。」このときブルックスは81歳、クーベルタンは27歳であり、国際的なオリンピックの復活の夢を共有した。

1894年にクーベルタンがパリで開催した国際会議に、ブルックスは高齢と健康を害していたために出席できなかった。そして1896年4月の第1回近代オリンピック開催の4ヶ月前に、長年の夢であった国際オリンピック大会を見ることなく死亡した。

ブルックスが1880年頃にアテネでの国際オリンピックの開催を提案し

たときには全く反応がなかった。それはギリシャにおいても近代スポーツが普及していなかったし、ヨーロッパ全体でもそうであった。1896年段階では、それは機が熟してきたということである。しかし、それを牽引する主体が未だ出現しなかった。

(5) 現在のマッチウエンロック・オリンピック

1950年に戦後の復活を遂げた。協会の年次芸術祭（3月）には200人あまりの音楽家、詩人、散文作家たちが集まる。近辺のスポーツ協会からは全国的な選手を排出している。1994年にはIOCのサマランチ会長が訪問し、「近代オリンピック大会の本当の設立者であるブルックス博士に賛辞をおくるために参りました。」と謝辞を述べた。2003年にはエリザベス女王が来町した。現在はリンデンフィールド（Linden Field）で7月第2週末に大会が開かれる。

(6) 感想

ブルックス自身やマッチウエンロック・オリンピックの研究は殆どない。「研究者が多少知っている程度で、一般人はあまり知らない。研究もあまり多くない。」とは2005年8月27日、マッチウエンロック博物館でウェンロック・オリンピック協会の書記長P.G.トンプソン氏へのインタビューへの回答である。従って、ブルックスはなぜ、全住民を対象としたのか、また階級格差の強い中で、なぜ対象としえたのか、その場合の「全住民」とはいかなる実態であったのか。あるいは、1800年代末には南部では中産階級によるアマチュアリズムが強化されている中で、バーミンガム郊外のマッチウエンロックでなぜそれが可能であったのか。労働者階級が大勢を占めていたし、彼等の社会統合が大きな課題となっていたからか、等も未解明である。また、19世紀中頃のマッチウエンロック近辺の政治、経済状況とブルックスの思想形成、あるいはイギリス資本主義形成との関連も未解明である。Ox-Bridge派の圧力の中でも、ブルックスはイギリス

スポーツ界，学校体育実現の上で果たした役割は大きい。これらの解明もまた今後の課題である。

参考文献

- ・ Furbank, M., Cromarty, H. and McDonald, G. (1996), *William Penny Brooks and the Olympic Connection*, Much Wenlock: Wenlock Olympian Society
- ・ Gabriel Murray, *The Golden Frame*, ISBN 0954 806212
- ・ Vivien Bellamy, *A History of Much Wenlock*, Shropshire Books, 2001
- ・ Derek Birley, *Land of Sport and Glory: Sport and British Society 1887-1910*, Manchester, 1995
- ・ Allen Guttman, *The Olympics: A History of the Modern Games*, University of Illinois Press, 1992
(ピエール・ド・クーベルタン『オリンピックの回想』カール・ディーム編，大島謙吉訳，ベースボール・マガジン社，1976（原著，1959））
- ・ David Young, *The Modern Olympics*, The Johns Hopkins University Press, 1995
- ・ 『オリンピックと近代 評伝クーベルタン』ジョン・J・マカルーン（柴田，菅原訳）平凡社，1988年（同著，*This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games*, John J. MacAloon, The University of Chicago, 1981）

4. ザッパス・オリンピック

第7章で展開する

5. 19世紀：オリンピック復興の基盤形成

1516年，ピンダロス（古代ギリシャの抒情詩人）の『オデッサ』とパウサニアスの『ギリシャ案内記』などがフランス語に翻訳された。モンテーニュはそのエッセーの中で，「オリンピックゲームズの大規模な，そして大衆的な集まり」と記述している。

古代オリンピック大会を論じた最初の本は1732年にグロニンゲン（オランダ）で出版された。神学者テオドラス・アントニデスが著者である。

1763年に，ドイツの学者，ヨハン・ヨアヒム・ウィッケルマンがオリ

ンピアの発掘調査を始めた。1788年にフランス人セバスチャン・ファウベルがゼウス神殿を発見した。そして、1829年、考古学的、科学的発掘を行いながら、A.プロエとP.デュボスがゼウス神殿の全容を解明した。

1889年7月21日にパリのパウル・モンセオー Monceaux によってなされた講演「オリンピック発掘」を、ケーベルタンは聞いた。

かくて、16世紀以来、オリンピック神話はいろいろな大衆文化に影響を与えてきた。ヨーロッパのエリートたちの教育はギリシャ、ローマ時代のラテン語による古典の学習が中心であったから、彼らの大半は古代オリンピックの概要にも詳しくあった。そうした背景が、既述のように19世紀に世界各地で行われたスポーツ競技会に「オリンピック」という名称を付して、その地位を保ったと考えられている。

1880年の11月前のある時、ブルックスはゲナディウス（未だロンドンの代理大使）にアテネ国際オリンピックの開催をするように提案した。

1870年代には普仏戦争に勝利したドイツがギリシャ遺跡発掘隊の派遣し、フランスに先行した。こうして1880年代にオリンピア遺跡が発見され、ギリシャ熱はいつそう昂揚した。ドイツはアーリア民族の直接の継承者を自認し始めた。

ともあれ、こうしたギリシャ回帰はヨーロッパ全体に、ギリシャについての共通教養を形成し、近代オリンピック復興の下地を形成した。この点はオリンピック誕生の外的条件の一環としてきわめて重要である。

一方、ギリシャでも1880年に、建築家リサンドロス・カフタンツォグロウはオリンピアが世界に散らばっているギリシャ人たち（ディアスポラ）の大会に留まらず、全世界の国々の人々の大会となり、東方のキリスト教徒との間にハーモニーが出来、これがオリンピック休戦、敵意の抑制をもたらすことを期待した⁽²⁾。

従って、19世紀末のオリンピックのアテネでの復興は突飛なことではなく、あるいは1人の男性（ケーベルタン）による印象深い刷新によるものでもない。むしろギリシャを含むヨーロッパ社会の主要なイデオロギー状

況に起因する⁽³⁾。

古代オリンピックないしギリシャへの関心は、1852年にエルンスト・クルティスが「オリンピア」と題する有名な講義をベルリンで行い、ギリシャ熱を一層高め、1874-81年にはクルティス自身による発掘調査が始まった。これは1870-1の普仏戦争でフランスに勝利したドイツが、その権限と財源を増してギリシャの発掘権を大幅に拡大したことの一環である。一方、ギリシャ側からすれば、遺跡の商品価値に気づき、ヨーロッパ文明の源であることをセールスポイントにして、競争心を煽り、ドイツ、フランスをはじめとするヨーロッパの国々に発掘権を与えた⁽⁴⁾。こうして、1930年代のヒットラー率いるナチ政権まで、ドイツはギリシャ発掘の主導権を握り、ギリシャに関する出版物も顕著に多かったが、オリンピックの復興はフランス、ギリシャ、イギリスの3カ国に限定された。ここには当時のドイツの置かれた国際的孤立が反映されている。

ともあれ、こうして、19世紀末、オリンピック復興の条件は整備されていった。問題はその条件を具体化する主体的条件の形成である。ここには歴史における客観条件と主体的条件の問題が秘められている。次いで、クーベルタンの主体的条件（思想、政治力、財力）の解明へと向かう。

註

- (1) David Young, *The Modern Olympics*, The John Hopkins University Press, 1995, p 59
- (2) Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S. A. 2003, p 51
- (3) Christina Koulouri, 'On the Path to Revival', *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Iphigenia Vogiatzi (ed.), Historical and ethnological society of Greece, 2004, p 28
- (4) 桜井万里子編『ギリシャ史』山川出版社、2005年、p 312

第6章 オリンピズム：クーベルタンの思想と行動

1. クーベルタンの生いたちと思想

(1) 生育

ピエール・クーベルタンは1863年1月1日、イタリア系フランスの貴族の3男として生まれた。父は画家であった。ピエールは当時の貴族の子弟の多くがそうであったように、そして父の意向として当初は軍人や法律家の道を目指していたが、それらに飽きたらず、自らの道を模索しつつ、その後法曹および外交の道も拒んだ。それは当時すでに貴族が名を挙げうる可能性が小さくなっていたという事情もあった⁽¹⁾。

マカルーンは当時の貴族の若者の行動規範を以下のように指摘している。つまり「名」（名声、名誉、美德）と「行為」（高潔なる行為、輝かしき規範、惜しむ事なき犠牲）と「天職」（軍人、天才、法学者、芸術家）との三位一体の関係は「名誉」をもたらす。そして「徳」を顕す唯一の行為はある特別な行動の範疇に属する。それは「勲功」と呼ばれ⁽²⁾、クーベルタンの生涯と彼が遺した仕事を、その固有の文化的文脈の中で理解しようとするとき、「勲功」の概念は絶えず有効性を発揮する⁽³⁾。

クーベルタンを当時の没落しつつある貴族の3男として、社会的に名をなすことは、強く意識されたであろう。これが、オリンピック復興の成果を「独り占め」にしようとする言動ともなったとも考えられる。例えば、マッチウェンロックのブルックス博士の果たした業績を殆ど無視したとか、一方、第1回のアテネ・オリンピック時に、ギリシャ関係者はオリンピック復興者としてクーベルタンの功績を全く無視したことへの怒りなど、この勲功は、生々しい人間としてのクーベルタン像としてより現実に近いのではないだろうか。

また、クーベルタンが最初にイギリスへ旅した（1883）のは、自らの方向性が未だ定まらず、その一方で、フランスの名士が皆多かれ少なかれ野

心を抱いていた文筆家という天職への1つの階梯として、イギリスの教育制度の調査という目的であった。1888年に最初の著書『イギリスの教育』を出版した。クーベルタンもその後著述家（歴史学者、教育学者）として生涯を過ごした。

(2) 思想

クーベルタンのオリンピックと哲学、道徳に影響を与えたのはジュール・シモンとディドン神父であり、19世紀の彼の精神的恩師であった。彼らは民主的共和主義者であった。クーベルタンにはあまり友人は多くなかったが、オリンピックではスローン（アメリカ）、ヤコフスキー、バルク（スウェーデン）は彼の側近として、彼のプレーンであった⁽⁴⁾。また、社会改良家で、「社会階級は神の摂理であり、工場主はパターナリズムで労働者を保護しなければならない」と主張したル・プレーも彼に大きな影響を与えた。クーベルタンは民主的共和主義者や平和運動家に多く囲まれ、その影響を強く受けた。その思想はやがてオリンピズムに結実した。

フランスの第1次世界大戦参入と共に、クーベルタンは自らの良心に忠実に、勝利する国際主義者、オリンピック擁護者、対ドイツフランス愛国主義者となった。そもそも彼の愛国主義は1870年の普仏戦争におけるドイツへの敗北以来である。1870年、プロシアの前にフランス軍がスダンで降伏し、次いで「パリ・コミューン」が成立した。1875年には第3共和制が僅か一票差で成立した。彼が「成年」に達したのは、フランスの市民中産階級が成熟を見せた時代であり、彼が結婚し子供を持ったのは、1894年に始まるドレフェス事件のただ中においてであった。こうしたユダヤ人差別（人種差別）を目の当たりにした彼の中に、その後のオリンピックにおける人種問題はどのように反映していったのかは重要な問題である。

註

(1) ジョン・J・マカルーン『オリンピックと近代——評伝クーベルタン』平

凡社, 1988 年, p 99 (原著, *This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games*, John J. MacAloon, The University of Chicago, 1981)

(2) 同上, p 46

(3) 同上, p 47

(4) IOC, *The International Olympic Committee: One Hundred Years, The Idea, The President, The Achievements*, Volume I, Lausanne 1994, p 87.

2. クーベルタンとスポーツ (イギリス)

何世代にも渡る学生や親や理事たちに、パブリックスクールの教育の主要な目的であり、成果たるものは、強健で男らしい性格の形成にあるのだと教えたのは、一般に考えられているようにラグビー校の校長トーマス・アーノルドではなく、『トム・ブラウンの学校生活』(1857)でパブリックスクールの実情をその父母だけでなく、イギリス国内いや全世界に広めた著者で元ラグビー校の生徒であったトーマス・ヒューズである⁽¹⁾。この本は1875年にフランス語に翻訳され、疑いなくクーベルタンも影響を受けた。それ以降、彼はイギリスのパブリックスクールとマッスル・クリスチヤニティへの関心を高揚させていった。こうして、彼のイギリスの教育制度への関心は益々高まり、「軟弱な」フランスの教育を立て直す契機を見い出さんとしたのである。当時、ドイツではツルネン(体操)が学校と軍隊に導入されており、ドイツ国民の身体の強健さの基礎を形成したが、フランスの立場から戦勝国ドイツへの反感から、ドイツ体操の導入よりも、むしろイギリスのスポーツに関心が向かった。

1883年に彼はイギリスの教育調査のために(「トム・ブラウン」に会いに)、初めてパブリックスクールやオックスフォード大学やケンブリッジ大学を訪問し、まさにイギリスのスポーツを目の当たりにしたのであった。1888年にはフランスの高校チームをつれてイングランドへ遠征した。その年最初の著書『イギリスの教育』を出版し、また同年、「学校での体育教育実現のための委員会」を結成して書記長となった。執行委員長はジュ

ール・シモンであった。1889年のパリ万博ではシモンとクーベルタンは「体育の諸問題」会議を開催し、26歳のクーベルタンはその実行委員会の書記長となった。こうした活動が彼の組織能力を形成した。1890年初頭、クーベルタンとサン＝クレールの2人は共同でUSFSA（フランス競技スポーツ協会連合）を結成した。

1889年にクーベルタンは彼のイギリススポーツ・体育への関心をイギリス新聞に投稿し、イギリス内の同調者からの応答を求めた。早速W・ブルックスから著作物と共に連絡があり、1890年にクーベルタンはイングランドのマッチウエンロックへ向かった。W・ブルックスと会見し、ブルックスから世界的なオリンピックの復興を働きかけられ、期待された。この時期までにクーベルタンはフランスの学校に体育の導入をいろいろと働きかけているが、1889-90年のパリ万博を経て、この辺りから1892年の最初のオリンピック復興宣言までは、彼の思考の中で大きな変遷が生じた。それまでは彼の著述の中に「オリンピック」という表現は存在しなかったからである。

1892年フランスボートクラブがヘンレーへ向かい、クーベルタンはロンドンのフランス大使館を通じて、1893年3月5日にUSFSAは王立ヘンレーレガッタ委員会との協定を結んだ。この組織は、役員を民主的な選挙によって選ぶのではなく、役員会が次期役員を独自に選考するという、その後のIOC委員の選考の原型となったものと言われる。

註

- (1) ジョン・J・マカルーン『オリンピックと近代——評伝クーベルタン』平凡社、1988年、p145（原著、*This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games*, John J. MacAloon, The University of Chicago, 1981）

3. クーベルタンとオリンピック復興運動

19世紀のヨーロッパ情勢は、万博を生み、そしてオリンピックを生み

出す客観的条件を形成していた。その意味で、クーベルタンはオリンピック復興の着想者ではない。それでも彼の中に、体育の実現からオリンピックへと移る大きな原因となったのは、万国博覧会を別にすれば、グルーセの「定期大祭」だった。しかもグルーセは、1888年に書いた記事の中で、フランスでオリンピック競技会を開くことを提案していたのである。クーベルタンは決してこの呼びかけに言及しようとはしなかったが、彼がこれに影響されたのは確実である⁽¹⁾。

「1889年6月までに、つまりアメリカへ行く前に、そしてフランス競技スポーツ協会連合（USFSA）を設立する前に、クーベルタンはブルックスの理念を知っていた。」⁽²⁾そして、パリ万博（1889-90年）の時に、クーベルタンとフランススポーツの擁護者たちは、6月に体育に関する国際会議「体育の諸問題」を招集した。しかし、クーベルタンは1889年6月の段階で、オリンピック復活の観念を未だ持っていなかった⁽³⁾。しかし、この万博の平和理念、組織はその後オリンピックを構想する上で、クーベルタンに決定的な影響を与えた。

1890年10月にクーベルタンはイングランドのマッチウエンロックへ行った。そこで、ブルックスから国際オリンピックの構想を聞かされた。既に10年前の1880年の秋頃から、ブルックスはギリシャのロンドン代理大使・ゲナディウスにアテネで国際オリンピックの開催を提案していた。こうした活動はその後も継続されていた。その11月にゲナディウスはギリシャの財政的事情で、当面は不可能であると応えている。

1892年9月にシュロップシャーの新聞はブルックスのオリンピック復興の運動の要約を載せ、「もしも彼が長生きするならば、彼はアテネに行き国際オリンピックを観戦し、あるいは古代オリンピアの地に立つだろう」⁽⁴⁾と結んだ。こうして多くの人がブルックスの提案を読み、知った。

クーベルタンは、近代オリンピックの復興をその2ヶ月後の1892年11月25日、USFSA 記念日に初めて提案したが、スピーチの終わりに近く、次のように記した。「もしもそうした国際的大会が開催されるなら、平和

にとって新たな同盟者を得ることになるであろう。」これがクーベルタンのオリンピック復興への最初の表明であった。しかし、反応は冷ややかであった。いきなりの表明であったことと、前例の無い、具体的なイメージが示されなかったことから、聴衆も全くイメージが湧かなかったからである。

その後、クーベルタンはマッチウエンロックのオリンピックやザッパス・オリンピックを無視した。なぜか、これは彼の独自性の維持を保持せんがためのものであろう。ここに彼の勲功を求める野心家の1側面が現れている。

クーベルタンは1893年秋に文部省の調査でアメリカに渡り、プリンストン大学のスローン教授と会合した。彼はクーベルタンの主張を理解し、その後IOC委員としてクーベルタンを支えた。彼はシカゴのコロンビア万博に参加している。

クーベルタンの万博との関連は長い。15歳の時、1878年のパリ万博に参加した。その時の彼の考え方は記録されていないが、「1889年の万博には夢中で参加した」と記録されている。1900年のパリ万博はこれまでの5回のパリ万博(1855, 1867, 1878, 1889, 1900)の中でも最大級と考えられた。1900年万博の公式な計画は1893年9月9日に始まり、アルフレッド・ピカールが統括委員会の責任者となった。1893年9月9日に1900年万博の企画を開始し⁽⁵⁾、スポーツ大会もその一環に含められた。言うことは、1894年のパリ会議でのオリンピック復興会議でのクーベルタンの1900年パリ万博での第1回近代オリンピック復興に決定的な後押しを与えたのではないか。つまり、この機会に便乗してオリンピック復興のチャンス逃してしまうと、不可能なのではないかと考えたであろう。この点で、万博の意義は決定的に大きい。

クーベルタンの夢は古代オリンピアの場面を万博の地に建設することだった一寺院、スタジアム、体育館、銅像等。そうしたスポーツの祝祭がオリンピック運動と運動競技を通した国際主義の促進になると彼は考えた。

事実、1894年のパリ会議の以前に1889年の万博（パリ）の責任者に壮大な企画を提案していた。彼は寺院、体育館そしてスタジアムと一緒にオリンピックの丘（Altis）の再建を望んだ。そこでは芸術の展示と作業が行われ、古代から現代へのスポーツの歴史が展示される。こうした名誉ある環境の下でスポーツ大会が開催される。

もし1894年のパリ会議でオリンピック復興を1900年にパリで開催することを宣言しなければ、そして万博の企画に載せなければ、莫大な経費のかかる彼の企画は実現不可能となる。そこで彼はパリ会議を招集したと考えられる。この点でも、近代オリンピックの復興は万博が一種の後押しをしたと考えられる。

さて、スポーツの観客動員力のすごさをクーベルタンがアメリカ調査訪問で初めて知ったとすれば、1889年のパリ万国博覧会は、国際規模の公的スペクタクルの魅力と、そうしたスペクタクルの持つ象徴としての力を彼に見せつけたといえる⁽⁶⁾。パリ万博を通してクーベルタンは、スポーツが国際的フェスティバル＝スペクタクルの一部に組み込まれるという事態を初めて経験する機会を得た⁽⁷⁾。

さて、話は1894年6月16日開催のUSFSAの「オリンピック大会復興のパリ国際会議」に移る。直前の5月22日、高齢のために出席の出来なかったW・ブルックスからクーベルタンへの手紙があり、世界の巡回に賛成し、早急に実行に移すようにアドバイスがあった。会議には2000人の参加者があった。国外からも49協会、78代表の参加があった。ドイツの参加はフランスとの対立関係が尾を引き困難を極めたがオブザーバーで参加した。その他オーストリア、ベルギー、イギリス、イタリア、ニュージーランド、ロシア、スペイン、スウェーデン、アメリカである。これはクーベルタンの並々ならぬ執念の結果である。一方国内からは空席を避けるために数百人の高校生、軍隊から多数の軍人を動員した。ここにクーベルタンの政治力・組織力が垣間見える。

会議は事前に議題が送付されていた。大きくはアマチュアリズムについ

てとオリンピック復興についてであった。会議直前に会議の名称自体が「アマチュアリズム原理の研究と普及のためのパリ国際会議」から「オリンピック復興会議」へと変更された。後述するように、クーベルタンにとってはアマチュアリズム問題は参加者を多く集めるための手段であり、目当てはオリンピック復興であった。それでも分科会は「アマチュアリズム」と「オリンピック復興」の2つが設けられた。前者はマイケル・ゴンチネットが議長、ウィリアム・ミリガン・スローンが副議長を務め、後者の司会はギリシャの代表のデミトリウス・ヴィケラスであった。第1回の開催地は1900年のパリ万博時とクーベルタンは考えていたが、事態は2年後の1896年に第1回を開催しようということになり、そして開催地をロンドンにするかアテネにするかということになった。

ここで疑問が生じる。それはD・ヤングが指摘し、M・スミスが引き取った疑問だが、何故にヴィケラスが司会をしたのかという点である。結果はアテネに決定したのであるから、クーベルタンの事前の根回しがあったのではないかと、という指摘である。

クーベルタンは1894年春にアテネにあるアメリカ考古学学校の校長チャールス・ウォルドステインを通じて、オリンピック復興に関するギリシャ王室の意向を確認している。そしてギリシャ体操クラブの会長フォキアノスに会議の副会長を打診した。しかしフォキアノスは都合で出席できなかったのもので、パリ在住のヴィケラスに代理出席を依頼した。

ヴィケラスはそれまでスポーツ界とは殆ど関連がない文学者であり、たまたまパリ在住であった。しかしギリシャの子どもの体位向上運動にも関わり、ギリシャ体操クラブの会員であったことから、パリ会議への出席をアテネから要請されて、参加したのであった⁽⁸⁾。会議の開会式は前年にデルフィでフランス考古学代表が発掘したアポロの讃歌で始まり、参加者に感激を与えた。

ところで、諸会議、饗宴の会議の多くはクーベルタン自身が個人負担をしている。こうした財政的な負担をクーベルタンは一身に引き受けた。こ

れがその後の IOC の展開を支えていったのであるが、自らの財産を抛ってでもその理念を実現しようとした。IOC の事務局費は拡大したが、クーベルタンが自前で賄ってきた。また、伝統的に、祝祭の費用は会長に支えられた⁽⁹⁾。国際オリンピック委員会はその設立者によって財政的、政治的な不測の事態から保護されていた⁽¹⁰⁾。クーベルタンは生涯にわたり、多大な自費をオリンピックに投入してその運動を支えた。オリンピックの復興はその財政によって支えら、軌道に乗ることもできた。この点での彼の貢献は異例であった。しかしこの点での貢献を指摘する研究は殆ど聞えない。

さて、会議はオリンピックの復興に関して次のような決定を持って終了した⁽¹¹⁾。

- ①オリンピックは現代の条件に合わせて復興される。
- ②フェンシングを除いて、アマチュアだけが参加できる。
- ③大会を組織する国際組織は、参加する個々人が参加のルールを守らないときは、その参加を禁止する権限を有する。
- ④国は他国を持って代表することはできない。そしてオリンピックへの参加者の選考は、各国内で行われる。それ故に、真のチャンピオンは事実上参加できる。
- ⑤次の種目は、可能な所では、オリンピックで開催される。陸上競技、多種のボールゲーム、アイススケート、フェンシング、ボクシング、レスリング、乗馬、射撃、体操、自転車、ペントスロンなどの多種目構成も開催されるべきである。賞は登山にも与えられるべきである。過去 4 年間の偉大な達成に対して。
- ⑥第 1 回オリンピックはアテネで行われ、第 2 回は 1900 年にパリで行われる。その後は 4 年毎に世界各都市で行われる。
- ⑦オリンピックは権力の支持無くしては成功しないので、国際委員会は公共の支持を得られるように努力する。

そして最初の IOC 委員は次の 12 名であり、全員がクーベルタンの知り

合いであり、教育関係者である。会議に出席していない人も選出された。

会長：Dimitrios Vikelas (Greece)

事務局長：Baron Pierre de Coubertin (France)

会計：Ernest Callot (France)

委員：Jiri Guth (Austria-Bohemia), Master, Klatovy High School

Viktor Balck (Sweden), First Master, Stockholm Cental
Gymnastic Institute

Leonard A. Cuff (New Zealand), Secretary, New Zealand
Amateur Athletic Association

Professor William M. Sloane (USA), Princeton University, New
Jersey

Jose B. Zubiaur (Argentina), Dean, Uruguay National College
Conte Ferdinando Lucchesi-Palli (Italy), Italian Vice Counsul in
Paris

Charles Herbert (England), Secretary, Amateur Athletic
Association

Arthur, Lord Ampthill (England),

Generan Aleksei Butowski (Russia), Attache, Russian Military
School

註

- (1) ジョン・J・マカルーン『オリンピックと——評伝クーベルタン』平凡社、
1988年、p 230 (原著、*This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the
Origins of the Modern Olympic Games*, John J. MacAloon, The University
of Chicago, 1981)
- (2) David Young, *The Modern Olympics*, The John Hopkins University
Press, 1995, p 74
- (3) *ibid.*, p 75
- (4) *ibid.*, p 85
- (5) Bill Mallon, *The 1900 Olympic Games: Results for All Competitors in*

All Events, with Commentary, McFarland, 1998, p 5

- (6) マカルーン, op. cit., p 263
- (7) マカルーン, op. cit., p 280
- (8) Michael Llewellyn Smith, *Olympics in Athens 1896 to Invention of the Modern Olympic Game*, Profile Books, 2004, p 89–90. David Young, *The Modern Olympics*, The John Hopkins University Press, 1995.
- (9) IOC, *The International Olympic Committee: One Hundred Years, The Idea, The President, The Achievements*, Volume I, Lausanne 1994, p 108
- (10) IOC, *ibid.*, p 116
- (11) Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S. A. 2003, p 76

4. クーベルタンとオリンピック

クーベルタンはオリンピックをいかなるものと考えたのか、あるいはどんな理想をそこに具現したのか、それが「クーベルタンのオリンピック」と言われるものである。もちろん他の関係者の思考も関わりながら、しかしクーベルタン自身の思考が基軸としてオリンピック（大会と運動）を牽引してきたことは間違いない。また、そのオリンピックを規定する彼のオリンピック発想の源流は以下のように指摘される。

- ・フランスの主に対ドイツに対するナショナリズム
- ・古代ギリシャのヘレニズム
- ・現代教育学の知見である⁽¹⁾。

この点での内容は論者によって大差無いと考えられるが、力点の置き方で表現方法の多少の違いとなる。近現代ギリシャ史研究者であるクルーリ教授は古代ギリシャの思想・文化と近代イギリス（スポーツと教育制度を含む）を指摘している⁽²⁾。

クーベルタンのオリンピックを見る上で次のような源泉、基盤が重要である。

- ・世界戦争への危機と平和運動志向（フランス愛国主義から世界平和

へ)

- ・ヘレニズム（古代オリンピック）への憧憬
- ・マッスル・クリスチャニティへの憧憬
- ・万博の理念と可能性
- ・スポーツ・オリンピックの可能性（若者の集いによる国際平和）
- ・生育環境からの意志形成

これらについては既に触れたものも多いが、再度、クーベルタンの意志として確認しておこう。

註

- (1) Vassilis Kardasis, *The Olympic Games in Athens 1896-1906*, ISP, May 2004, p 79
- (2) Christina Coulouri, 'On the Path to Revival,' *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Iphigenia Vogiatzi (ed), Historical and ethnological society of Greece, 2004

(1) 世界戦争への危機と平和運動

19世紀の第4四半世紀は帝国主義の時代と呼ばれ、先進諸国の植民地争奪戦下にあつて、世界情勢は一触即発の状態にあつた。国際的諸機関が多く結成され国家交流が急速に推進され、ヨーロッパでは国内、国際的に平和運動も高揚した。

1894年のパリ「オリンピック復興会議」の名誉会員の1/3は国際平和委員会のリーダーたちと国際議会連合の名だたる議員たちが登録された。Bajer, Feldhause, Hegelins, Kemeny, Pratt, Lafontaine ら。Jules Simon や Elie Ducommun らはすべて平和活動家であつた。「単なる偶然以上の問題」である。クーベルタンが自己の存立基盤としたものは、愛国主義と同程度に、国際主義にも大きく依拠していた。ここで強調すべきは愛国主義 (Patriotism) — 国家主義 (Nationalism), 国際主義 (Internationalism) — 世界主義 (Cosmopolitanism) の差異である。

マカルーンは次のように明快にまとめている。

「愛国主義（Patriotism）とは文字通り自分の国を愛する心であり，国に奉仕したいという願いであった．それに対し国家主義（Nationalism）は他国を憎むことであり，他国に害を与えたいという欲求であった．この区別は当時の社会思想においては珍しいものではなく，またクーベルタンの場合，青年期の経験に深く根ざしているものでもあった．……

愛国主義と国家主義を区別することこそ，オリンピズム及びオリンピック運動のイデオロギー的側面に彼が与えた根本的な遺産である．1896 年以来，近代オリンピックは常に，国民国家を原理とする近代世界における，愛国主義と国家主義との抜き差しならぬ関係が雄弁に立ち現れる場として機能してきたのである——競争相手たる他国を憎むことなく自国を愛し，自国に奉仕することは可能か？ ライバル国に対する憎悪を，愛国的義務以外の何ものかとして評価することは可能か？」⁽²⁾

さらに，「オリンピックが育むのは世界主義ではなく真の国際主義の方であると彼が 確信していたことは明らかである．」⁽³⁾

これらの用語には少し補足を付けておいた方がよいであろう．愛国主義——国家主義の関係であるが，ここで使用されている国家主義（Nationalism）はフランス革命後は自由主義や左翼と結びついた概念であったが，次第に帝国主義段階になると熱狂的愛国主義者，帝国主義者，排外主義者の右翼的運動へと転換した⁽⁴⁾．しかもこれらのすべての発展形態に共通することは，新たに起こりつつあった労働者階級の社会主義運動を拒絶することであった．それらは労働者階級の運動だったからのみでなく，意識的かつ戦闘的なインターナショナル主義であったからである⁽⁵⁾．

しかし近年の研究ではナショナリズムにも 3 層が指摘されている．①国家の政治体制の擁護，他者の排除，②民族，国家への素朴な帰属意識，③郷土等への郷愁，である．排外主義はこの場合①であり，上記のマカルーンの述べる「国家主義」はこの分野である．しかし人間にはごく自然に，生育過程に規定された②の意識が存在する．それは必然なものである．例えば国際試合を観戦する場合，自然に自国の選手を応援するような場合で

ある。このような場合、一般に「束の間のナショナリストになる」などと表現される場合がある。クーベルタンの愛国主義とされるものは現在ではナショナリズムにおける②の範疇と捉えてよいであろう。しかし、この場合は多分に他国、他民族との友好関係を前提としており、必ずしも①の排外主義へ直結するものではない。クーベルタンも、愛国主義を基にした国際主義へ展望した。

そしてもう1つは国際主義 (Internationalism) —— 世界主義 (Cosmopolitanism) の関係である。前者は国家の存在を前提とした上で、相手の存立を認めながら平和共存へと向かう思想であり、現在の国連などの国際機関の多くが踏襲している思想である。しかし後者はそうした国家の存在を否定し、世界を1つの共同体として構想する。いずれも平和を志向する上では共通するが、現状認識と今後の推進の方法は大きく異なってくる。その点で後者は理想主義ないし空想主義的である。

そうした世界平和はクーベルタンにとって至上のものであり、その達成にオリンピックと教育を構想した。彼自身教育学者でもあった。愛国主義とナショナリズムの問題もまた教育問題として構想した。クーベルタンはスポーツが、「ナショナリズム」のない愛国主義を育むと期待した⁽⁶⁾。というのは、近代オリンピックは実際、政治的メッセージを発信するために復活された。クーベルタンやその後継者たちにとって大会の政治的目的——戦争国家間の和解——はスポーツよりも重要なことであった⁽⁷⁾。

いずれにせよ、クーベルタンは、ナショナリズムの高揚する時期にあって、それを否定するのではなく、ある程度前提にしながら、現実的な平和への手段としてオリンピックを構想した。

こうした思想に大きく影響を与えたのは万国博覧会であった。万博会場中至る所で賛美されていた物質的進歩に対応すべき、全人類の精神的進歩の印として当時は受け取られたのである。少なくともこの出来事が、国際主義の価値をクーベルタンの心に一層深く植え付け、方法こそ違えやはり国際主義を賛美することになるオリンピック大会へ向けて、彼の精神を鼓

舞したことは間違いない⁽⁸⁾。

註

- (1) IOC, *The International Olympic Committee: One Hundred Years, The Idea, The President, The Achievements*, Volume I, Lausanne 1994, p 57
- (2) ジョン・J・マカルーン『オリンピックと近代——評伝クーベルタン』平凡社, 1988年, p 511) (原著, *This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games*, John J. MacAloon, The University of Chicago, 1981)
- (3) MacAloon, *ibid.*, p 524
- (4) E・ホブズボウム『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店, 2001年, p 156 (原著 E. J. Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780*, Cambridge University Press, 1990)
- (5) 同上, p 158
- (6) Segrave, Jeffrey O., and Chu, Donald, ed., *The Olympic Games in Transition*, Human Kinetics Publishers, 1988, p 152-3. ここでも用語の使用は若干異なっているが、意図していることはナショナリズムの①ではなく②であるということである。
- (7) Allen Guttmann, *The Olympics: A History of the Modern Games*, University of Illinois Press, 1992, p 1
- (8) マカルーン, *ibid.*, p 331

(2) スポーツマンシップ

クーベルタンはオリンピックの当初より、ディドン神父による「より早く、より高く、より強く」を採用してオリンピックのスローガンとして提唱した。そのために、フェアプレーとスポーツマンシップ、そして誇り高い騎士道精神を青年の心に植え付けようとした。そのような指導者を創り出すことによって、相互の理解と尊重の精神を土台とした平和な人類社会が生まれる——これがクーベルタンの理想であり確固たる信念であった⁽¹⁾。ここで「騎士道精神」が強調されることの是非は残るが、これは「ミスターアマチュア」との異名を持つ A・ブランデーによるクーベルタン理解でる。

註

- (1) アベリー・ブランデージ『近代オリンピックの遺産』(宮川毅訳), ベースボールマガジン社, 1974 年, (原典 Avery Brudage, *The Challenge*, proSport-Verlag GmbH & Co., p 103-4

(3) アマチュアリズムへの考え方

ところで, クーベルタンのオリimpiズムを理解する上で1つの重要な軸はアマチュアリズムへの彼の態度, その一方での労働者階級への態度である。クーベルタンのアマチュアリズムへの態度として, 1894 年パリ「オリンピック復興会議」の2つの議題の1つとしてアマチュアリズムを挙げたことから, アマチュアリズム擁護者からは長い間, クーベルタン自身がアマチュアリズムの信奉者として奉られてきた。しかし, 次の告白はそれを否定する上で決定的ではないだろうか。

「今ここで私は, 敢えて告白しよう: 私はかつて一度もこの問題に熱中したことはない。この問題はオリンピック大会を復活するため, 初の会議を招集する口実を作るのに役立っただけである。スポーツ界はアマチュア問題が非常に重要だと考え, 私もソウだと見たので, 一緒になって熱心にならざるを得なかった。しかし私の熱心さは心から自信の持てる熱心さではなかった。」⁽¹⁾

当時の研究水準として, アマチュアリズムが古代ギリシャから存在したことが吹聴され始めたから, クーベルタンもそう考えていたようだ。しかしその彼も明らかに, アマチュアリズムが下降にあることは認識していた⁽²⁾。そのことは, アマチュアリズムが排除した労働者階級へのスポーツ普及への彼の態度からも推測できよう。

「クーベルタンにとっては, スポーツとは道徳的エリートを育てるべきものであって, 社会的エリートを育てるものではなかった。スポーツが学生や有閑階級から始まって大衆に浸透するには長大な時間を要することをクーベルタンは覚悟していたが, 如何に時間がかかろうともそれこそ

が彼の一貫した目標であった。」⁽³⁾「手工業労働者にスポーツが普及したことは、オリンピックの思想にとっては、それが将来生きながらえていく明白な保証である。」⁽⁴⁾

このような態度を何故クーベルタンは形成したのか、については今後の本研究の課題でもあるが、現時点で仮説的に述べれば、彼の生育過程と環境が決定していたであろう。つまり、1870年の普仏戦争敗北後のパリはプロシア（ドイツ軍）の支配下において、フランス軍の手薄の中で、労働者階級によるパリ・コミューンが約2ヶ月に渡って実現したのであり、フランスの民主的共和主義者にとってもこの点は大きな意義を持った。この点で、クーベルタン自身社会主義者を名乗ることはなかったが、一方、その後ヨーロッパ全土に高揚していった労働者階級の運動を嫌悪するものでもなかった。こうしたことが、彼がイギリスのマッスル・クリスチアニティからイギリススポーツを信奉したとしても、労働者階級を露骨に排除したアマチュアリズムには決して馴染めなかったであろう。

それならばどうしてそのアマチュアリズムをオリンピックの理念として提起せねばならなかったのか。この点を指摘した研究は私の管見するところ、これまでは皆無である。これは「アマチュアリズム」の項で既に触れたように、当時の世界各国のブルジョアジーが「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」を必須としていたからであり、それを独自のナショナリズムと結合させ、労働者階級を排除しながら、自国のブルジョアジーを統合できたからである。1890年代は既にこうした時点に至っていたのである。したがって、1894年のパリ「オリンピック復興会議」でのアマチュアリズムのセッションでもイギリスのような厳格なアマチュアリズムに対しては結構な反対があったにもかかわらず、結局はアマチュアリズムの採択へ進んだ。

ともあれ、クーベルタン研究は、その重大さにかかわらず、マカルーンの代表的なものを除けば、体系的なものは皆無に近い。これはオリンピック研究それ自体と同様に対象が膨大だからでもある。さらに、私自身、

Pierre de Coubertin, *Olympism, Selected Writings*, IOC, 2000 や IOC, *The International Olympic Committee: One Hundred Years, The Idea, The President, The Achievements*, Volume I～Ⅲ, Lausanne 1994 等の基本的な資料を未だ読了していない。資料自体が膨大なものであるが、クーベルタンを論じるにはそれらに目を通してからでないと確定できない。したがって、本章は今後の仮説的な研究課題をいくつか挙げながらひとまず終了する。(本章未完)

註

- (1) ピエール・ド・クーベルタン『オリンピックの回想』カール・ディーム編(大島謙吉訳)、ベースボール・マガジン社、1976、p 102 (原著、1959 年)
- (2) Christopher R. Hill, *Olympic Politics, Athens to Atlanta 1896-1996*, Manchester University Press, 1996, p 7
- (3) ジョン・J・マカルーン『オリンピックと近代——評伝クーベルタン』平凡社、1988 年、p 333 (原著、*This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games*, John J. MacAloon, The University of Chicago, 1981)
- (4) ピエール・ド・クーベルタン、前掲、p 193

第7章 ギリシャの近代化と第1回アテネ・オリンピック

第1回アテネ・オリンピックの研究は、①国際社会でのギリシャの位置、②ギリシャ国内の政治・経済・社会・文化、③スポーツの歴史・社会など、その後の大会がそれぞれに抱えた問題を最も典型的に示しているように思われる。それ故、第1回のギリシャ大会をかなり詳細に検討することは重要である。

しかし、その割には第1回のアテネ・オリンピック研究は余りない。近代オリンピック史の通史の第1頁として記述される程度である。それでも

これまでの力作としてはリチャード・マンデル⁽¹⁾(1976) やデーヴィッド・ヤング⁽²⁾(1995) の研究が代表的なものであった。特に前者に依拠したのもその後いくつかは提起された。(最も、ここでは英語文献のみを対象としている。)

日本語での論文としては、もちろん通史の1ページを記述したものであり、もちろんそれらは翻訳ものであるが、中には引用さえ明記しない研究上問題の多いのも結構多い。ギリシャ前史としてのザッパス・オリンピックの研究は真田論文が唯一である。真田はギリシャ語も駆使しながら、第1次資料にも当たっている⁽³⁾。

これまで、ギリシャでの大会ながら、ギリシャ人研究者からのものは散見されなかった。しかし、2004年のアテネ・オリンピックに向けて、ギリシャ人による研究が一気に加速し、いわば内部からの「爆発的な」研究が続き、しかも英語文献として発表されたので、ギリシャ研究は大いに促進された⁽⁴⁾。本研究はそれらに大きく依拠している。

註

- (1) Richard D. Mandell, *The First Modern Olympics*, University of California Press, 1976
- (2) David Young, *The Modern Olympics*, The John Hopkins University Press, 1995
- (3) 真田久「近代オリンピック前史——近代ギリシャ人によるオリンピック復興」『スポーツ』近代ヨーロッパの探求⑧, 有賀他著, ミネルヴァ書房, 2002年, 真田久「近代ギリシャにおける第2回オリンピア競技会に関する研究」『体育・スポーツ史研究の展望——国際的成果と課題』阿部生雄代表, 不昧堂出版, 1996年。
- (4) 以下のようなものがある。
 - ・Christina Koulouri (ed.), *Archives and History of the Hellenic Olympic Committee*, International Olympic Academy, Athens, 2002
 - ・Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S. A. 2003
 - ・Vassilis Kardasis, *The Olympic Games in Athens 1896-1906*, ISP, May

2004

- ・ Iphigenia Vogiatzi, *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Historical and Ethnological Society of Greece, 2004
- ・ Christina Koulouri (ed.), *Athens, Olympic City 1896-1906*, International Olympic Academy, Athens 2004
- ・ Michael Llewellyn Smith, *Olympics in Athens 1896 to Invention of the Modern Olympic Game*, Profile Books, 2004,

1. 19 世紀のバルカン半島

既述のように、19 世紀のヨーロッパは歴史上最も激動した時代であり、経済的には産業革命を経ながら、政治的には新興ブルジョアジーが国内的には議会制民主主義を発展させながらも、一方で拡大しつつあった労働者階級の勢力への対応に迫られた。その一環として、ブルジョアジーは自らの階級と国家を国民国家として確立し、その維持、統合のために多くの「伝統の創造」に邁進した。そしてナショナリズムでそのイデオロギー的な粉飾を施した。国外的には産業の原材料の輸入と製品輸出のために、資源の豊富な未開発地域を次々に植民地化し、こうして列強は帝国主義化した。それ故に地域的小競り合いを繰り返しながら、やがて 20 世紀の植民地争奪を巡る帝国主義戦争（第 1, 2 次世界大戦）へと突入していった。バルカン半島はイギリスに、やがてフランス、ドイツ、ロシアが参入してくるに従って、諸々の対立を引き起こすようになり、19 世紀末から 20 世紀初頭にはさながらヨーロッパの「弾薬庫」となり、ヨーロッパにおける「武装平和」は一触即発状態にあった。

そのプロセスにあって、バルカン半島の 19 世紀末は列強（イギリス、フランス、ドイツを中心）、特に「パックス・ブリタニカ」=イギリスの支配下にあった。その後バルカンには、ロシアが汎スラブ拡張主義に基づいて進出を企てた。ロシアのオスマン・トルコ帝国とのクリミア戦争（1853～6 年）では、この進出を警戒したイギリスとフランスはオスマ

ン・トルコ帝国を応援した。パリ条約（1856年）の後、英仏のバルカン半島への進出が加速し、この地域の経済は活性化した。一方オスマン・トルコ帝国の崩壊は加速し、これまでその支配下にあったバルカン半島の諸民族が独立を要求した。セルビア、モンテネグロ、ブルガリア等であるが、これは一方で領土を拡大しようとしていた「大ギリシャ主義」と対立した。バルカン諸民族はお互いに対立しながらも、オスマン・トルコ帝国に対しては共通に防衛する利害を持った。

ロシア＝トルコ戦争（1877～8）でオスマン・トルコ帝国の崩壊はいつそう進み、バルカン諸国の独立は更に確定的なものとなり、その分各ナショナリズムとその国家対立も激化した。1878年のベルリン会議で領土が決定した。これにより1877～8年のロシア＝トルコ戦争と1875～8年の東部問題（Eastern Question）は終結した。それはギリシャの領土を多少拡大し、1881年にコンスタンチノーブル条約で締結された。そしてこれまでバルカン半島には独立国家はギリシャだけだったが、新たにセルビア、モンテネグロ、ルーマニアが独立国家として誕生し、これによって国家対立の緊張が高まった。

ところで、イギリスは東方問題への政策を変え始めていた。というのはオスマン・トルコ帝国はすでにインド支配の重要な拠点では無くなっていったからである。逆に1885年の危機によって、ロシアはブルガリアを基点に地中海への進出をねらっていた。1880年代になると、ドイツもトルコへの経済的・政治的浸透をますます強めるようになり、イギリスとフランスに代わり始めた。

1880年代から1900年代まで、マケドニアにはギリシャ人、ブルガリア人、セルビア人、アルバニア人が混在していたが、それぞれがバルカン地域で失われてゆくオスマン・トルコ帝国の権力と領地から出来るだけ大きな分け前にあずかろうと争い、ギリシャ、ブルガリア、セルビアの民族主義が競い合う中心地となった。さらに、バルカン半島における中心的なマケドニア問題に、東地中海の重要事項であるクレタ問題が加わった。

2. 19世紀ギリシャの状況

ギリシャの中世はビザンティン帝国（キリスト教圏：476～1453年）であるが、その後オスマン・トルコ帝国（イスラム教圏：13世紀末～1922年）による支配下に置かれた。その間は、ルネサンス、宗教改革、17世紀の科学革命、啓蒙運動、フランス革命、産業革命など、西欧の歴史の進展に大きな影響をもたらした諸革命から隔絶された。それ故、ヨーロッパ国家としてのギリシャのアイデンティティが曖昧であった。19世紀末、支配者であるオスマン・トルコ帝国の弱体化と共に、ギリシャの独立意識とナショナリズムは高揚した。

19世紀は列強特にイギリスによる支配下にあったが、バルカン半島にはロシア、フランスそしてドイツも参入してきた。その下での対トルコ戦争、バルカン半島内での領土獲得戦争も厳しいものであった。これらのバルカン半島内の小競り合いは、列強の大局的な戦略から見れば、極地の小競り合い程度であったが、それぞれの小国にとって見れば、そこでの生死をかけた闘いであった。

19世紀始め、ギリシャが国家として復興しようとしていた時期に、古代ギリシャの言語・文化に対する崇拜熱（ギリシャ回帰）がヨーロッパ中に高まった。この状況に触発されて、ギリシャ人、特に民族主義者の知識階級は、自分たちこそ普遍的に尊敬されている古代ギリシャの末裔であり、遺産の継承者であるという自覚（錯覚）を持つようになった。ギリシャ民族運動の大きな要因となったこの「過去に対する自覚」はオスマン・トルコ帝国時代には殆ど見られず、いわば西欧から輸入されたものだったが、そのおかげでギリシャは他のバルカン諸国に先駆けて民族運動を起こすことが出来た⁽¹⁾。「メガリ・イデア」（「Great Idea」＝「大ギリシャ主義」「偉大なる思想」）とは、近東のギリシャ人居住地域をすべて統一し、首都をコンスタンティノープルに置く一大国家を樹立しようとする理念であり、1844年1月の議会でジョーン・オレットイスの演説で述べられたものである。民族的解放の理念はビザンティン帝国の復興を意図した。ギリシャ

王国の首都はアテネだが、「ギリシャ人すべての夢と希望の都」はコンスタンチノーブルだと考えた。

ギリシャは1821～8年にオスマン・トルコ帝国に対し、独立戦争を挑み、1822年1月に民主的憲法を制定した。とはいえ、ギリシャ内も内戦状況であり、1832年には連合国であるイギリス、フランス、ロシアは3国保護下によってギリシャの「独立」を承認したが、それぞれの勢力の均衡保持のために3国以外の地、ドイツのバヴァリア（現在のバイエルン）から10代のドイツ人王子、オットー（後にオットー2世）を即位させた。これにより、君主国家として列強の保護の下に「自立」した。

ギリシャの中世であるビザンティン時代への関心は、19世紀半ばに生じ、古典、中世、現代のギリシャ史を断絶の無い連続した形で捉えようとした。そして国民国家としての自立化へ邁進した。1837年にはアテネ大学が設立され、西欧文化の積極的な摂取と同時に、ヘレニズム全体の文化的中心となり、そしてギリシャインテリジェンスのセンターとなった。しかし、古代ギリシャからビザンチン帝国を経て現代のギリシャを通観するギリシャ史と「大ギリシャ主義」は古代ギリシャ文化、言語の「純化」ないし偏重を来とし、一時的に知的展開の後退をもたらしたとも言われる。オットーはその後憲法を形骸化して、専制政治を行ったことからギリシャ市民の反感を買い、1862年のクーデターでオットーは退位した。その後1863年にはデンマーク王の次男であるゲオルグを国王とし、ゲオルギオス1世（即位1863-1913）を即位させた。

経済は1856年から1875年に掛けて発展した。特に農地の拡大に伴うオリーブ油、ワイン、干しぶどう等の輸出品目が拡大した。政治的には、対トルコ、対バルカン諸国、対イギリスの政策が次第に確立し、1880年代からそれまでの多党乱立から2党政が確立した。こうして、19世紀のギリシャの課題は国内的には経済発展が問われ、対外的には、「大ギリシャ主義」による領土拡張であった。1875年には議院内閣制の承認を国王に強いて成功した。それまでも、そしてその後100年間ギリシャの派遣国王

の権力は列強に支えられて強力であり、1970年代までの王室と政治との紛争は殆どこの両者の関係であった。

さて、トリクゥピス政権は国内経済の安定を優先する近代化路線を採り、デリアニス政権は民族主義的対外戦争、領土拡大を主張し、両者の対立はトリクゥピスの引退する1895年まで続いた。1864年から1880年までの間に、9回の総選挙と31の異なった内閣が存在した。1881年から1910年までの間には、さらに12回の総選挙と39の内閣が存在した。全くの政治の不安定状況である。こうして、両政権の特徴が滲み出て、国内では節減と浪費、国外では慎重と冒険を交互に繰り返してきた。

1879年から1890年までの間に、外国からの6回の借款が契約されたが、すべて大幅に利息分を天引きされ、1893年までに借款返済準備金が国家予算の3分の1に上った。1892/3年に乾しぶどうの危機と1893年の公共負債危機の結合で農村は危機に直面し、産業と商業は麻痺し、国家の介在による何らかの救済措置を必要とした。この時期は移民、特にアメリカへの急増期である。1890年から1914年におよそ35万人と言われている。トリクゥピス政権が1893年に「国家破産宣言」を行ったのも不思議ではなかった⁽²⁾。これはデリアニス政権の尻ぬぐいでもあった。

その国家破産宣言は首都アテネを直撃した。例えば初等教育費、軍事警察費などが国家から自治体負担に移行した。一方、1895年4月の総選挙でデリアニス政権が発足し、同じ年、アテネ市議会選挙でもデリアニス派が勝利した。19世紀末の都市化するアテネにおいて、都市問題は深刻化しつつあり、アテネ市の財政の逼迫でこれまで都市整備は軽視されてきたが、オリンピック開催のための都市整備が進められた。

ところで、ギリシャ王国の誕生から第1次世界大戦に至るまでのギリシャの対外政策全体は、他のすべてのバルカン諸国のそれと同様、列強からは東方問題の細部の1つとしか見なされなかった。ギリシャではその「保護」を引き受けた3つの列強のうち、19世紀以降地中海の覇者でありギリシャの経済を手中にしていたイギリスが優位な役割を演じていた。オリ

ンピック翌年の1897年のギリシャ＝トルコ戦争（30日戦争）でのギリシャの敗北は「大ギリシャ主義」政策最大の敗北であった。クレタ島では「エノシス」（統一、合体）、すなわち「大いなる島」の王国統一を求めて蜂起が頻発した。（1841, 1858, 1866～9, 1877～8, 1896～7）そのため、オスマン・トルコ帝国との関係は絶えずぎくしゃくし、列強は介入を繰り返した。

1870～1年の普仏戦争に勝利した後、ドイツはギリシャの発掘費においてもフランスを圧倒した。ギリシャ回帰のヨーロッパにあつて、古代ギリシャとの系列の本家争いがそうさせたものである。古代オリンピアの発掘主体はドイツであった。その発掘競争で先頭を走っていたドイツからではなく、後塵を拝していたフランスから近代オリンピック復活の声が挙がった。

註

- (1) リチャード・クログ（高久曉訳）『ギリシャ近現代史』新評論、1998年、p 6 (Richard Clogg, *Concise History of Greece*, Cambridge University Press, 1991)
- (2) C・M・ウッドハウス（西村六郎訳）『近代ギリシャ史』みすず書房、1997, p 232
- (3) ニコス・スポロノス（西村六郎訳）『近代ギリシャ史』白水社、1988年、p 81
- (4) Christina Koulouri, 'On the Path to Revival', *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Iphigenia Vogiatzi (ed.), Historical and ethnological society of Greece, 2004, p 21

3. ギリシャのスポーツとオリンピック前史

19世紀に入ってギリシャでもスポーツ大会がいくつか開催されているが、それらは次の3つの流れを汲んでいる。

- ①宗教祭、定期市での伝統的ゲームの開催
- ②意図的な古代ギリシャ競技の復興

③既に行われていた地方ゲームに「オリムピック」という名を冠した⁽¹⁾

ところで近代オリムピックに直結する動向の最初は詩人ソウソトスがその詩の中での提案したことがきっかけとされている。ギリシャの独立運動の一環での提起であり、ギリシャの政治、経済、文化の諸領域で共鳴を得た。次の詩は1833年にギリシャの最初の首都ナフプリオンで自らの編集する新聞『イリオス』で「死者たちの会話」という表題で発表されたものであり、その中で古代オリムピックの復興をプラトンの言として謳ったものである⁽²⁾。

古代のオリムピック競技会やパンアテナイア祭はいずこ、
荘厳な儀式や古代の劇場は、
美しい絵画、彫刻、聖地はいずこに。(中略)
輝かしいオリムピックを始めようではないか。
本流の市民たちよ、競技場で楽しもうではないか。
ヒエロン、ゲラ、フィリッポスがかつてそうしたように、
4万人のギリシャ人の前で、国王が競技者に敬意を表すのだ。

1835年に就任したオットー王子は、1837年にオットー1世として王令「国家の産業、農業、畜産業の奨励について」を発し、「アテネで3年ごとの産業展の開催」することを決定した。ここにはスポーツも含まれることになった。スポーツには古代ギリシャの種目一円盤投げ、やり投げ、走り幅跳び、競走、レスリング、4頭立て馬車一が予定された。しかし諸事情(財政難)により実行されなかった。これは既にヨーロッパ、特にフランス当たりで頻繁に開催されていた産業博覧会のギリシャ版である。ギリシャも多少産業化が進みつつあり、先進諸国へ追い付き追い越す意気込みを示し始めた。

1838年にはレトリオニ市(オリンピアの近く)が古代オリムピックの

復興を提唱した。それは1821年の独立戦争の開始日＝ギリシャ独立記念日の3月25日に行われる予定であった。しかし実現しなかった。

以上のように、いくつかの国内「オリンピック」復興が提唱されたが、実現しなかった。しかしこれだけの提唱がなされたこと自体、国内に競技大会開催の条件が形成されつつあることを示唆するものである。

ソウトソスの詩はルーマニア在住のギリシャ人富豪エヴァンゲリス・ザッパスを動かし、彼の寄附申し入れの具体化として、1858年8月19日には王令によって、4年ごとのオリンピックの開催を規定した。それは工業、農業、畜産業、そして芸術、音楽などの知的作業と運動競争を開催することになった。運動種目は乗馬、レスリング、円盤投げ、競走、跳躍、やり投げ、民族ダンス、その他である。1859年のザッパス・オリンピックとして初めて実現した。

これから分かるように、当時のギリシャにおけるオリンピック復興にはスポーツを産業振興の一環として利用する勢力と、スポーツを純粋に復興させようとする勢力とがあった⁽³⁾。ギリシャの近代スポーツ普及は未だ「未開」であったが、1870年代になるとギリシャの都市でもブルジョアによるスポーツ協会が設立され始めた⁽³⁾。

註

- (1) Christina Koulouri, 'On the Path to Revival', *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Iphigenia Vogiatzi (ed.), Historical and ethnological society of Greece, 2004, p 30
- (2) 真田久「近代オリンピック前史—近代ギリシャ人によるオリンピック復興」『スポーツ』近代ヨーロッパの探求⑧、有賀他著、ミネルヴァ書房、2002年、p 253。ここで真田は、最後の「国王が競技者に敬意を表すのだ」という部分を、「ギリシャ古代文化への回帰とともに、外国人の国王や政府に対する民族的な対抗意識と受け取れる」と表現している。
- (3) Christina Koulouri, 'Voluntary Associations and New Forms of Sociability: Greek Sports Clubs at the Turn of the Nineteenth Century', *Greek Society in the Making, 1863-1913, Symbols and Visions*, (ed.) Philip Carabott, Variorum, Ashgate Publishing Ltd., Gower House, Croft

4. ザッパス・オリンピアとその影響

(1) ザッパス・オリンピアを取り巻く状況

1821 からのオスマン・トルコ帝国に対する独立戦争, さらにバルカン半島における独立国の増加とナショナリズムの高揚の中で, ギリシャは独立国家としての自覚が芽生え始めた. そして 1840 年代から徐々にではあるが産業化の進行の中で, ビザンチン帝国を再現するナショナリズム「大ギリシャ主義」「偉大なる思想」も浸透してきた. こうした中で, 国内ばかりでなく, 国外に多く住んでいるギリシャ人をも含めて「大ギリシャ主義」を確認し, 普及するイベントが求められていた. そこで古代オリンピックの復興が何度となく提起されたが, 財政難から具体化されずに来た.

(2) エヴァンゲリス・ザッパス

ザッパス (1800~1865) はヤニア近郊のラボヴォで生まれ, 1821 年の対トルコ独立戦争に参加して, 1824 年には准将となった. 1831 年にはブカレストに移り, 実験医師になり名声を得た. それから地方のギリシャ修道院の土地を借り農業をした. その後急速に財を成したといわれている.

財産の一部を祖国ギリシャに寄附しようと考えていたが, 1843 年の憲法制定時に詩人ソウトスの詩でオリンピックの復興を思いついた. それはオットー国王に憲法を承認するように強いた革命であり, 海外在住 (ディアスポラ) のギリシャ人のザッパスにとっても自分の信念を公表するのに相応しい機会であった.

1856 年 6 月 6 日付けでルーマニアのギリシャ大使館からギリシャ外務省にザッパスの意図を伝えた. それはパナシナイコスタジামの側に印象的な展示場を建設する資金を寄附するというものである. ギリシャではこれを受けて 1858 年 8 月の王令でオリンピックの 4 年ごとの開催を規定し

た。

(3) ザッパス・オリンピアの概要

ザッパスは産業祭ではなく古代ギリシャ競技の復興を提案したが、当時の外相アレクサンドロス・リゾス・ランガヴィスは「オリンピックの復興など馬鹿げたことで、意義はない」と否定した。国内ではむしろ近代化へ向けた産業祭の方をより必要としていた。しかし、最終的には寄付者の意向が組み入れられたが、それはあくまでも産業祭の一環としてであった。1859年、1870年、1875年、1889-90年の4回行われた。各大会の概要は以下の通りであった。

①第1回ザッパス・オリンピア開催（1859年11月15日）

祭典は11月の各日曜日に開催され、スポーツ祭典は11月15日に行われた。場所はアテネ市内のオモノイア公園であった。開催種目は以下のようである。近代スポーツ的種目は競走だけで、あとは地方的な種目であった。

種目

- ・競走：スタジアム競走（200m）、2週競走、長距離走（スタジアム7周）
- ・跳躍：たち幅跳び、溝跳び、ブラッダリング
- ・投擲
- ・登坂棒

種目の推進の組織、ルール、スポーツ精神なしということで、大会は不成功、競技場もオモノイア公園とあるが、実質は辻であった。それに11月中旬の天候は競技スポーツには不適切であった。

新聞批評には、「観戦はひどいもので、誰もが悲喜劇の不快に駆られて見物を止めた。我々は決して忘れないだろう。」「政府の展望の欠如を批判」など、否定的なものが多かったが、好意的批評もあった。そして今後は適切な組織を持つて行う必要があることが明記された。前例が無く、最初の競技会であったが故に、とまどいも大きかったようである。

それでも、第1回のオリンピアはギリシャ内外から、ギリシャ人がアテネに集合した最初の機会であった。ギリシャ人たちが「共に語り、共に考えよう」という第1の目的は、ギリシャ人たちの政治的統合であり、行動の一致である。それは過去の栄光を思い起こさせ、羽ばたいたばかりの国家との絆を強めることであった。何世紀にも渡るオスマン・トルコ帝国による支配の後、ギリシャ人たちは集合し、同じ言語で会話し、同じ文化的ルーツを確認し、文化的継続性を確かめ、そして彼らの国家を確認し合った。

この時期、ギリシャ人たちは新たに設立された国家を支える最高の機構を求め、彼らの最高の要求はその経済的かつ政治的回復を達成することであって、もしここでスポーツが紹介されなければ、ギリシャでは殆ど知られなかった。オリンピック大会への関心は、スポーツへの社会的価値への関心よりも、政治的目的達成の必要性から主に生じていた。最初のザッパス・オリンピアで運動競技が無視されたのは以上の背景からである⁽¹⁾。

この辺りにも、「大ギリシャ主義」に基づく、国民国家成立期のギリシャの実態と課題が見えてくる。そこで、オリンピックはギリシャ人たちを統合する何よりも優れた媒体であった。たとえ、スポーツ自体が片隅に置かれようとも。

註

(1) Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S. A. 2003, p 36

②第2回ザッパス・オリンピア(1870年10月18日)

1865年にザッパスの死去後、彼の遺言と王令によって8月11日に「オリンピアと遺産委員会」が設立され、ホール(ザッペイオン)の建設地は国立公園内、パナシナイコスタジアムの側が選ばれた。

第2回大会はザッパスの寄付で一部復元され始めたパナシナイコスタジアムで1870年10月18日開催された。今回も商工業展示と併行である。

新種目もレスリングが加えられた。しかし馬上競技、ボート、水泳は行われなかった。競走の優勝者には 100 ドラクマ、競馬の優勝者には 500 ドラクマの賞金も与えられた。

施設の改善もあり、また開会式の宗教行事、軍隊楽団の演奏など新たな試みもなされ、もはや古代オリンピックの復興ではなく、新時代の要素が加味された。展示類は 11 月 1 日からとなった。「オリンピアと遺産委員会」の副会長デミトリオス・クリスティディスは開会挨拶で、オリンピアがその法令が要求しているように 4 年ごとに行われなかったのは、「国を治める人々のコントロールを超えた外部的要因によるものだ」と述べた。これはザッパスの遺産をめぐるルーマニア政府との法廷闘争があり、事態が進展しなかったからである。

それでも、大会は 2 回目ということもあり、大成功であった。この大会はギリシャ人にとって運動競技との最初の大きな出会いでもあった。その一方で、産業展示会への人気はいま 1 つ盛り上がらなかった。

③第 3 回ザッパス・オリンピア（1875. 5. 18～）

第 3 回（1875）の大会は大ギリシャ博覧会（1200 の国内展示者、72 の外国展示者でギリシャ最大のイベント）の 1 部として開催された。運動競技では第 2 回ほど成功せず、参加選手は高校生か大学生を中心に絞るすぎ、参加も少数であった。種目には体操、綱引き、的やり投げ、ボート、水泳も加えられた。この点ではこの間に多少スポーツの普及したことを示している。

当時の大会の特徴は、農民や町民も含めた、地域の住民一般の参加を意図していることである。これは、①地域・国家の精神的統合、②地域の身体的防衛能力の強化を狙いとしていたと思われる。③また賞金・賞品を供与して、参加者を多く募っていた。しかし、次第にアマチュアリズムが侵入し、労働者階級排除のスポーツクラブの結成を見るようになった。そして 1875 年の大会には、17 歳以上の大学生の参加が認められた。ギリシャ

にもアマチュアリズムの波が少しずつ押し寄せてきていた。

④第4回ザッパス・オリンピック（1889年5月・商工業展は1888年10月20日～）

1888年までにパナシナイコスタジアム横に建てられたザッペイオン（展示場）が完成し、第4回ザッパス・オリンピックはその落成式をかねて10月20日に開始された。実行委員会はスポーツ競技会よりも商工業展を重視した。それ故、当初スポーツ大会は予定されていなかった。ザッパスの遺志にも反することから、5月にスポーツ競技会が開催されることになった。4回目に新たに追加されたのは音楽、詩、ドラマである。スポーツ競技も参加者が少数であった。

1889年の大会が最後となってしまったが、オリンピックは今後4年周期に開催され、次回は1892年であると政府と皇室の承認が得られていた。つまり、産業推進派はもはやスポーツ大会をその一環とは考えなくなり、一方スポーツ推進派も独自に活動を始めようになり、フォキアノスは1891年に「全ギリシャ体操協会」を結成し、王室の後援を得て、91年と93年に「汎ギリシャ競技会」を開催した。

ザッパス・オリンピックは、1892年の息子コンスタンチノス・ザッパスの死によって財政的後押しを失い、継続困難となった。終了はしたが、ザッパス・オリンピックはギリシャの精神的統一を達成する点では大きな成果をもたらした。スポーツイベントを組織する体制を確立した。そのことが1896年のクーベルタンの国際オリンピックゲームズ開催の提案を受容する基盤となった。開催経費問題を別にすれば、躊躇すべき事は何もなかった。

それ故に、1894年のIOCの決定をギリシャ皇室は歓迎したのである。また、この段階で、ギリシャにおいてもスポーツはブルジョア競技化しつつあった。しかも商工業展との併行であった点で、資本主義的要素がにじみ出ている

そして、近代オリンピックにおける近代スポーツやドイツ体操の展開は、ギリシャの近代化にも結合した。

(4) ザッパス・オリンピアの特性と影響

近代ギリシャ社会でも身体運動が市民権を獲得していった。そしてザッパス・オリンピアはこの過程で重要な役割を果たした。4回の大会で、古代競技、現代競技、ドイツ体操が紹介され、混在した。とはいえ、ザッパス・オリンピアは身体競技ではなく、むしろ知的（精神）な競技であった。主要な特徴は各種経済部門の製品の展示会であり、運動競技は添え物であった⁽¹⁾。

ここに、ザッパス・オリンピアの社会的意義が見て取れるが、スポーツ界にとっての意義は何であったのだろうか。それは以下のように描けるであろう⁽²⁾。

- ①ルールを統一し、組織を確立し、恒常的な定期大会を組織した最初の競技大会
- ②古代オリンピックの伝統を正式に再組織化した公共的象徴的な競技会
- ③多数の観客を組織した都市型競技会の誕生
- ④古代オリンピックと直接に関連づけた
- ⑤それと共に現代の競技も取り入れた、ドイツ体操の近代化とも結合した

こうして、ザッパス・オリンピアはギリシャが近代社会に入り、近代的身体文化を求め始めた事を基盤とした。そしてそれはギリシャの産業化と国民国家としてのナショナリズムの確立を求めた。それらのいくつかを実現する手段として、ザッパス・オリンピアは実現した。資金の寄付者ザッパスの意図とは異なって、純粹のスポーツ大会ではなく、産業祭とスポーツ祭との結合であった。そして主要には前者であり、後者は付け足し程度の位置付けであった。確かにそうではあったが、またそうであっても、ギリシャのスポーツ界の近代化に大きな影響をもたらし、近代競技会の基点

となったことも事実である。こうしたことは、ギリシャの近代化＝資本主義化を基盤として可能であり、必要になったことであった。こうして、ギリシャ内でオリンピックのある程度の受容体制が形成されていった。この点は、クーベルタンのアテネ開催への不安であった政治、経済の不安定状況とスポーツの未発達という視点に対して、スポーツ面だけでいうならば、国家レベルでの競技会開催という既成事実は形成されていたのである。

註

(1) Christina Koulouri, 'On the Path to Revival', *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Iphigenia Vogiatzi (ed.), Historical and ethnological society of Greece, 2004, p 31

(2) *ibid.*, p 35

5. 近代オリンピックの復興

(1) 1894 年 IOC 決定以降とギリシャ

1894 年 6 月のパリ会議（IOC を選出）の決定は早速ギリシャ政府に伝えられ、その了解を得るはずであった。ところが、それは当時のギリシャの置かれた国際的、国内的諸状況によってギリシャ国家を二分するほどの大事件となった。

第 1 に当時のトリクूपリス政府は、前年の 93 年に国家破産宣言を行い、国家緊縮財政の下で、こうした国際イベントを大々的に行えば、諸外国から非難は免れないだろうと考えて受容を拒否した。一方、こうした国際イベントはヨーロッパ化を強め、世界にギリシャを認識せしめる絶好の機会であり、逆に大会をキャンセルすれば世界的な不評は免れないとする賛成派である。前者は国内経済の安定を優先する立場であり、後者は専らギリシャの国際的な地位を向上させんとするナショナリズムを意識した立場である。

最も、当時のギリシャは近代スポーツそれ自体はそれほど普及していた

わけではないから、競技会はスポーツ大会それ自体の歓迎よりも当時のバルカン半島におけるギリシャの存在感を高めるための手段と考えられた。ここにギリシャ皇室が絡んだからなおさらである。ギリシャにとって、オリンピック開催受容は、開催目的としてスポーツの普及や平和運動を受け入れたわけではなく、むしろ当時のバルカン半島における、あるいは世界への「大ギリシャ主義」というナショナリズムを発信する機会として受け入れられた。

(2) 現地実行委員会と IOC（ギリシャとクーベルタン）

①クーベルタンの準備活動

この間のクーベルタンとギリシャの様子、関係は以下のようである。

1894年6月16日のパリ会議でアテネ開催が決定した。当初は1900年のパリ万博で第1回開催をクーベルタンは考えていたが、それまで6年間は間が開きすぎるということで、急遽2年後の1896年の開催案が持ち上がり、会場にはロンドン案が何人かから主張されたが、クーベルタンはアテネを推薦し、総会で決定した。

ヴィケラスは9月にギリシャに帰り、知人でもあるトリクーピス首相を始め政府要人と会い、開催方いろいろと要請した。しかし彼は成果を残せないままパリに残した妻が重病のためにギリシャを後にした。

1894年11月1日、政府の担当官ドラゴウミスは長い、公式の手紙をクーベルタンに送り、ギリシャは財政危機であること、またオリンピックで行う近代種目が未だ普及していないことを述べて、オリンピック大会を開催できないこと、さらにクーベルタンがギリシャに来るには及ばないことを述べた。

ことの重大さに1894年11月8日に、クーベルタンはギリシャへ飛び、25日間滞在し、コンスタンチン皇太子、ニコラス皇子、そして多くの政治家と会見した。IOCの決定に対するギリシャのトリクウピス首相は、①経済危機がそれを許さないこと、②近代スポーツがギリシャでは未だ普

及していないこと、③新興国にとって1900年パリ大会以上には1896年大会は時宜に叶っていないことを挙げた⁽¹⁾。

とはいえ、アテネでのギリシャ政府の否定的態度に動揺したクーベルタンはハンガリーのフェレンク・ケメニーに手紙を出し、ハンガリーは建国1000年でもあることから、オリンピック開催の可能性を打診していたが、ハンガリーもギリシャと同様に政治的危機をむかえており不可能であると結論を得た。クーベルタンの動揺は増した。

しかし1895年1月にトリクウピス首相が辞任した。税金率アップに対する国民の反発と、皇太子自身が反発のデモを組織したことに対する、皇室との確執だと言われている。その4月の選挙でトリクウピスは破れ、代わってオリンピック開催推進派のデリアニス政権が誕生した。それと併行してアテネ市の選挙においてもデリアニス派が勝利を占めた。デリアニスは数年間パリ生活をしたことがあり、パリ会議（1894）の提案を最初に受け入れた1人である。

実はトリクウピス辞任の前に、既にオリンピック委員会は再編されていた。それまでのトリクウピス派の委員会からコンスタンチン皇太子の任命で政界、財界、軍隊、学界の実力者、行動派の「20人委員会」が組織され、90名の準委員も任命された。1895年1月13日にザッペイオン展示場で会議が持たれた。議題はすぐに資金捻出問題に入った。

1月31日にはオリンピック中央委員会が各実行委員会の構成とメンバーを明記して会合した。委員会構成は以下のようである。

- ・海上種目委員会
- ・ライフル委員会
- ・陸上競技・体操委員会
- ・フェンシング委員会
- ・自転車種目委員会
- ・アスレティック競技（ローンテニス、クリケット他）委員会
- ・ギリシャ選手準備委員会

- ・ パナシナイコ競技場の準備と刷新委員会
- ・ 接待委員会.

②クーベルタンの「不誠実」とギリシャの怒り

しかしクーベルタンは1894年に帰国後してから1896年まで、およそ1895年はオリンピックから殆ど関心を失ったように見える。研究者ヤングの指摘によれば、この時期のクーベルタンは現在の我々が考えるよりも、ヴィケラスに比べて遥かに役割は低かったのではないかということである。1895年にクーベルタンはUSFSAから事実上退任している。そしてさらにIOCからの辞任をヴィケラスに提出し、拒否されている。ヴィケラスから見れば、「全く素人の私をIOC会長に選出しておいて、自分が止めてしまうとは何事か」という心境であったろう。1886～1937年の間で、1895年は唯一本を出版していない年である。これは一方から見れば、クーベルタンが多忙であったことでもある⁽²⁾。何がクーベルタンをそうさせたのか、それにはいくつかの理由が考えられている。

第1に、クーベルタンが1895年3月12日に結婚したことにより、オリンピックから気持ちが離れたのではないかとする説である。第2は『フランス発展史』の執筆に没頭したとする説である。そして第3の理由は、彼の意志に反して、ノルマンディ県 (the Prefecture of Upper Normandy) によって提案された新たな仕事 (知事) の任命を引き受けた。それは彼の地方 (country) を代表して国会 (Counseil-General) へ参加することであった。

このように理由は単一ではなく、複合的に原因となったと考えられる。クーベルタンはヴィケラスに対して「既にたくさんの仕事を処理し、今も同様に他の仕事に追われている」と通知している。

一方、ギリシャの実行委員会では、IOC会長のヴィケラスはスポーツには素人であるために競技のルール、施設、その他諸々のことをすべてIOC事務局長のクーベルタンに問い合わせた。何せ、前例がない最初の

大会であり、ギリシャでもあまり馴染みのないスポーツのルールなど現地としても情報不足であり、IOCの指導を得なければ先に進めないことが沢山あった。しかし、クーベルタン自身も先のような多忙な状態であり、かつ彼自身も各スポーツ競技団体に照会した上でなければ決めきれない事項も多かった。

しかし現地アテネの各委員会は時間不足に迫われ、不安だけが拡大した。クーベルタンは彼等の必要とするペースで詳細を送らなかった（あるいは送れなかった）。彼等の不安は中央委員会書記のゲルギオス・メラスがヴィケラスに送った手紙の中に明らかに読みとれる。アテネにおけるクーベルタンへの怒りを伝えている。それはクーベルタンやIOCの返答の遅さに対する怒りである。「クーベルタンはペテン師であり、我々を混乱の中に陥れている」とまで述べている。また、同様の内容を直接にクーベルタンにも出している⁽³⁾。こうして、クーベルタンは殆どギリシャには援助せず、ギリシャからは結果的に無視されていった。そしてオリンピック開催時、ギリシャ側のクーベルタン無視は継続した。これがまたクーベルタンを怒らせる原因となった。

オリンピック時におけるギリシャ側のクーベルタンに対する態度は以下のようなものがある。

- ・これまでのギリシャ側からの要請に対してクーベルタンの返答の悪さ、「不誠実」に対するギリシャ側の怒り、不信
- ・ヴィケラスにのみ敬意を表し、クーベルタンには何も示さない
- ・ギリシャのクーベルタン夫人への無礼（5月15日のヴィケラスへの手紙）
- ・国王のギリシャ永久開催案の発表

さらに、オリンピックの開会日（1896年3月25日）はイースターとギリシャ独立、そして古代ギリシャとが結合されている。これらがギリシャナショナリズムの昂揚の手段とされたために、クーベルタンの位置付けが抜けた、とも指摘されている。イースターはキリスト教の復活祭であり西

欧の代名詞である。オスマン・トルコ帝国（イスラム教）から脱出し、ヨーロッパの一員となるための儀式として、またそのためのナショナリズムを高揚させる為にも、この日以外はあり得ないことであった。従って、これまでじっくり来なかったクーベルタンを仰々しく位置づけることなど、ギリシャにとってはどうでも良かったと思われる。

ここには、クーベルタンと現地実行委員会とのこれまでのやり取りの経緯に基づくもの、オリンピック復興に果たした人と国のナショナリズム等が絡み合って、こじれてしまった様子が示されている。

註

- (1) IOC, *The International Olympic Committee: One Hundred Years, The Idea, The President, The Achievements*, Volume I, Lausanne 1994, p 64
- (2) Kimberly D. Pelle, 'Demetrios Vikelas', *Encyclopedia of The Modern Olympic Movement*, J. E. FIndling, Kimberly D. Pelle (ed.), Greenwood Press, 2004, p 453
- (3) Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S. A. 2003, p 116, p 158
- (4) Christina Koulouri, 'The Hour of Revival and the Holding of the Modern Olympic Games in Athens', *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Iphigenia Vogiatzi (ed.), Historical and Ethnological Society of Greece, 2004, p 67

6. 第1回アテネ・オリンピック

第1回アテネ・オリンピックは1896年3月25日に開始された。オリンピックの誕生はまさに「伝統の創造」そのものである。それは万博の運営形式からも多くの影響を受けた。国家の長による開会、オリンピック讃歌の演奏、優勝者の国旗の掲揚、厳粛な儀式の後の競技など。その後開会セレモニーを含む儀式には、五輪旗の掲揚（1920）、オリンピック宣誓（1920）、聖火の点火（1928）、トーチリレー（1936）等が加えられた。

(1) 参加状況

第1回大会の参加状況は、ギリシャ側が期待したよりも少数であった。特に外国からの参加が少なかった。ここにはヴィケラスが心配していたように、宣伝不足であろう。そればかりでなく、まさにオリンピックであるが故の理由もあった。そのうちのいくつかを列挙する。

- ・フランスの射撃協会は、射撃種目が one of them になり、軽視されると考えて参加を辞退した。これは、これまで単一の国際種目は形成されつつあったが、万博形式で多くの種目が並行して競技するオリンピックというような形式は古代以来存在せず、イメージが形成されなかったと考えられる。
- ・フランス体操連盟はドイツが参加するなら不参加であると決定した。これはこれまでの両国の対立が引き起こしたものである。
- ・イギリスは自らが近代スポーツ発祥国として、そしてオリンピックで競技される種目の殆どが「イギリス種目」であることから、またイギリスへの根回しがなかったことに対する反発、プライドもあり公式参加はしなかった。それゆえに、対抗的に「汎イギリス大会」⁽¹⁾さえ主張された。それに、アマチュアリズムに強く縛られていたから、参加費も自弁であった。それ故に、旅費の工面がつかなかったことも理由であった。
- ・ドイツの主要な体操連盟は不参加を表明した。それは1894年のパリ会議にドイツがメンバーとして招待されていないこと、ドイツ語が公用語として認知されていないこと、IOCメンバーにドイツ人がいないこと、IOCの事業がフランスによる企てであると考えられることなどである。しかし1896年3月13日の最終会議で、10～13名の体操家の小グループの参加を決めた。
- ・当時の不安定なヨーロッパ情勢の中で、参加を見合わせる国もあった。ともあれ、オリンピックは開会に漕ぎ着けた。参加は以下のように外国13カ国81名を含め、全体で311名の参加であった。(全体の参加数は資

料によって多少異なる。)

オーストラリア (1), オーストリア (4), イギリス (8), ブルガリア (1), チリ (1), デンマーク (4), フランス (19), ドイツ (19), ハンガリー (8), スウェーデン (1), スイス (1), アメリカ (14), ギリシャ (230)

開会式典は、バンド 400 人、コーラス 200 人という盛大な布陣で、厳かに開会した。

註

(1) Bill Mallon and Ture Widlund, *The 1896 Olympic Games: Results for All Competitious in All Events, with Commentary*, McFarland, 1998, p 11

(2) 開催種目

大会は以下のような 9 種目, 43 競技で行われた。

- ・陸上競技 (100m, 110m ハードル, 400m, 800m, 1500m, マラソン, 3 段跳び, 円盤投げ, 走り幅跳び, putting the weight, 高跳び, 棒高跳び)。会場は莫大な寄付金で復興したバナシナイコスタジアムである。馬蹄形をした競技場である。
- ・重量挙げ。会場はザッペイオン。
- ・レスリング
- ・体操 (リズム体操—平行棒: 団体, 水平棒—団体, 跳馬, 吊り輪, 水平棒—個人, 平行棒—個人, ロープ登り)
- ・フェンシング (マスターズ, サーベル)
- ・射撃 (ライフル—200m, サービスレボルバー—25m, フリースタイル, レボルバー—30m, ピストル—25m, フリースタイルライフル—300m)。競技場は新たに建設された。
- ・海上種目 (100m スピード, 500m, 1200m, ボート)。アテネ近郊の港, ピラエス。
- ・自転車 (2km, 10km, 100km, 時間レース, 自転車マラソン, 12 時

間レース).

・テニス (シングルス, ダブルス)

パナシナイコスタジアムでは陸上競技が行われ, そのフィールド部分では体操, 重量挙げ, レスリングが行われた. パナシナイコスタジアムの入場料はギリシャの経済から見れば高かった. 400m でコンクリート・トラックの自転車競技場も招聘されたオランダ技師の設計で建設された. そのフィールドでテニスコート2面が建設された. テニスでは, イギリス人旅行者のジョン・P・ボランド (ケンブリッジ大学の学生) はたまたま見学に来ていたが, 急遽参加してシングルス優勝, ダブルスもドイツ人とペアを組み優勝した. このように, 参加規定も曖昧な状況であった.

フェンシングはザッペイオンで行われた. ギリシャの組織委員会はプール建設を拒否したために, 水泳はアテネ近郊のピラエス港 (海水) で行われたが, ボート競技は暴風雨のために中止された.

ここでマラソンの様子について特記しておかなければならない. このオリンピックを成功に導いたのはこのマラソンに依るところが極めて大であるからである.

そもそもこの種目の誕生は, フランス人でクーベルタンの友人であり古代ギリシャ研究者であるミカエル・ブレールがマラトンの故事 (紀元前490年に対ペルシャ戦争でのギリシャ軍の勝利を知らせるためにマラトンからアテネまで走って伝え, その後死んだ) に倣って新設するよう進言して実現したものである. ブレールは特別に優勝者用に銀カップを寄附した. もちろん, これまでそれほどの長距離走はなく, 未知数のものではあったが, マラソン競走はギリシャ人にとって, 他の種目と同レベルではなく, 国家の威信を掛けた競技となった. もっとも他の競技の多くはこれまでギリシャにとってあまり馴染みの無いものであったから, このマラソン競走はたとえ新設であろうと, その歴史を思い起こさせるだけに, 競技会前からの盛り上がりは異様なものであった.

マラソン観戦の動機はギリシャ人にとってスポーツそのもの以上で, 国

民感情であった。沿道の応援もすごかったが、ゴールであるパナシナイコスタジアムには7万人、その周りには入りきれない数万人が押し寄せた。先頭走者はギリシャ人であると先導隊から告げられると、スタジアムの歓声と熱気は一気に高まり、ゴールに近づいたスピルドン・ルイスにはコンスタンチン皇太子が伴走をするという興奮状態となった。

ルイスは諸外国に対するギリシャの優越性を象徴した。3月31日の王宮での祝賀会に招かれ、生まれて初めて民族衣装を着た（着せられた）。彼は国家のシンボルであり1821年の独立運動と連結され、国民の英雄となった。

当時、種目によってはその普及度に大きく国毎の差もあり、優勢種目も異なった。例えば陸上競技はアメリカであり、12競技のうち9競技で優勝した。自転車はフランス、体操はドイツ、水泳はハンガリー、的当て、重量挙げはギリシャ、等である。

ルールは各競技で混乱した1つであり、各国のルールの妥協でどうにか構成された。アマチュアルールは1894年のソルボンヌでの会議で主旨は決定されたが、各競技はそれぞれに補足した。陸上競技ではイギリスの陸上競技協会のものが、フェンシングはフランス協会、自転車は国際自転車協会、テニスは全英ローンテニス協会のものがそれぞれ採用された。

1928年のアムステルダム・オリンピックまで、各競技の入賞者への表彰式は閉会行事の一環として行ってきた。第1回ギリシャ・オリンピックでは優勝者には銀メダル、賞状そしてオリーブの冠が、そして2位者には銅メダルと月桂樹の小枝が授与された。そして最後に、マラソンの優勝者スピルドン・ルイスを先頭にパナシナイコスタジアムを1周し、観覧者から盛大な拍手が送られた。

(3) アテネ永久開催論

3月31日の祝賀会に国王は250名のゲストを招いて大昼食会を催した。その乾杯の挨拶として次のように述べた。これが事の発端となるオリンピ

ックのアテネ永久開催を提案した。

古代競技会の母であるギリシャは、ヨーロッパや新世界の注目の下に、今新たにその競技会を復興し、大会の成功は広く確認された。ここに参画する海外からの多くの人々が、我がギリシャが諸国家、諸民族の平和的な参集の場であり、オリンピック永久開催地としての栄誉を賜れんことを、ギリシャは望んでいる。

この望みと共に、第1回大会成功に乾杯したい。

大会の雰囲気は呑まれ、この国王のアテネ永久開催論に賛意を示したIOC委員もいたが、クーベルタンは厳として受け入れなかった。ヴィケラスは新聞のインタビューを受けて、「オリンピックは国際大会の中間年に開催できるかも知れない」と折衷案を出した。ヴィケラスの板挟み状態が見て取れる。

これに対して、新聞界はヴィケラスとIOCを厳しく批判した。新聞界はIOCの国際的な正統性、国際法的な妥当性、オリンピックの将来を決定する法的権利問題まで言及して公然と批判した。IOCは国際法上、国際組織として正式に確立しているわけではないと言いたいのである。また、クーベルタンが1894年のパリ国際会議にドイツを排除しており、大会後に新IOC会長になったクーベルタンは国際スポーツにとってむしろ危害を与えるものだとの論調まで張った。極めつけは、ギリシャはIOCと決別して、新たな国際的オリンピックを開催すべきだという状況までエキサイトした。

こうしてヴィケラスも堪らずにさらに折衷案を出した。つまり、中間年の大会は単に「オリンピック」とし、ギリシャ大会を第1回大会とした大会には「国際オリンピック」を付すというものであった。

議論は白熱のまま、次年度のIOC会議に持ち越されたが、1897年のギリシャ＝トルコ戦争（30日戦争）において、ギリシャが敗北し、「大ギリシャ主義」の威光も薄れ始めたことによって、アテネからの提案はなかった。これによってアテネ永久開催論は下火になった。しかしその後、中間

年開催問題は事ある毎に提唱された。

ところで、その後、オリンピックのアテネ永久開催論に対して、クーベルタンがアテネに抱いていた不安は、①経済危機と 1893 年の国家経済破産、②オスマン・トルコ帝国との引き続く不安定な状態、③ギリシャ＝トルコ戦争（1897 年）敗北、④バルカン半島における不安定な地理的位置が理由であった⁽¹⁾。また、次のようにも述べている。「同じ国で開催すると、どんな国も毎回多額の経費を支出するので責任が持てなくなるだろう。少なくともギリシャは技術的、経済的理由から遠のいてしまうことだろう。」⁽²⁾

ギリシャでは、ギリシャ＝トルコ戦争の傷も少し癒されてくると、再びナショナリズムが高揚し、その 1 つの手段としてオリンピック開催への要望も強まった。そして 1899 年ギリシャ国内法 2621 号で、「オリンピック委員会が 4 年ごとの大会を主催する」と規定した。しかし 1900 年の大会準備はフランスで進んでいた。そこでコンスタンティン皇太子は折衷案を提案した。つまり中間年に大会をギリシャで開催するというものである。

アテネ永久開催論は 1896、1899、1906 年のギリシャ側からの主張、一方、1900、1904 年の万博下でのオリンピックの失敗の中で、もし 1897 年のギリシャ＝トルコ戦争でギリシャが負けていなければ、ギリシャは IOC とは分離して、独自に国際オリンピックを組織していたかも知れない、という状況にもあった。

ギリシャでは 1906 年の国際アテネオリンピックを成功させた。ギリシャ人たちは 1910 年、1914 年そしてその後も 4 年ごとに大会を持つつもりでいた。しかしそれは再現しなかった。ギリシャは 1910 年大会の仮計画を作成し、アレクサンドロス・メルカチを長とする組織委員会を組んだ。しかし 1907-8 年のトルコとのクレタをめぐる戦争、1908 年 10 のマケドニアでの戦闘の再開は 1912 年のバルカン戦争に至るまで継続された。そして 1904 年からの第 1 次世界大戦突入と、そしてオスマン・トルコ帝国を撃退する努力の中での 1910 年に始まる軍事的グローバル化は、スポー

ツ大会への集中を困難にさせた⁽³⁾。

しかし、幸か不幸か、ギリシャは対トルコ戦争に敗北して永久開催論の勢いを一気に失速させていった。歴史に「もしも」という問いはナンセンスかも知れない。しかし、それは歴史における1つの、しかもある程度可能な選択肢として俎上にあがっていたことも事実なのである。

アテネ永久開催論はその後、1976年のモントリオール・オリンピック時に、開催準備が遅れていた時、アフリカ諸国が南アのアパルトヘイトへの抗議でボイコットした時、ギリシャのカラマンリス首相はキラニンIOC会長にアテネ永久開催を申し入れた。そして1980年1月のソ連のアフガニスタン侵攻の数日後にもカラマンリス首相は同様な提案を行った。

註

- (1) Christina Koulouri (ed.), *Archives and History of the Hellenic Olympic Committee*, International Olympic Academy, Athens, 2002, p 71
- (2) ピエール・ド・クーベルタン『オリンピックの回想』カール・ディーム編(大島謙吉訳), ベースボール・マガジン社, 1976(原著, 1959年), p 27
- (3) Bill Mallon, 'Athens 1906', John E. Findling and Kimberly D. Pelle (ed.), *Encyclopedia of the Modern Olympic Movement*, Greenwood Press, 2004, p 46

(4) 予算

パナシナイコスタジアムの修復は、全席大理石で再生するという壮大なものであり、それはエジプト在住のギリシャ人富豪ゲルギオス・アベロフが当初58万5千ドラクマを寄附することで着工したが、結局121万ドラクマを超えた。アベロフは全額を寄付した。しかも1896年の大会には間に合わず、上階層は板張りであった。修復作業は大会後も続けられた。アベロフは「ギリシャ国家や国民のために」と、ギリシャへの愛国心で寄附をした。同じように、海外ギリシャ協会寄附と国内個人からと自治体、クラブ等からの寄附を加えると、寄附だけで全収入の2/3を占めている。特に、海外在住(ディアスポラ)のギリシャ人たちの愛国心がいかに強く、

それに支えられたかが分かる。それだけギリシャ国家の確立が強く求められていたということでもある。

第1回アテネ・オリンピックの財源⁽¹⁾ GDR（ドラクマ）

ゲオルギオス・アヴェロフ	1,210,000.00
記念切手販売	400,000.00
スタジアム入場料	182,492.80
自転車競技入場料	3,277.45
汎ギリシャ大会	10,126.00
ギリシャ銀行からの借款	200,000.00
記念メダル販売	7,806.40
自治体、クラブ等の寄附	97,262.20
海外ギリシャ協会寄附と国内個人	309,815.00
合 計	2,330,779.85

註

(1) Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S. A. 2003, p 196

7. オリンピックの影響

近代オリンピックの誕生が持った国際的影響、特に国政政治への影響については今後の歴史展開の1つの大きなテーマとなる。オリンピックでのナショナリズム高揚が国家の対立を煽っているとするコスモポリタニズム的立場もあるが、大半は大同小異を調整しながら国際平和に貢献しているとするインターナショナリズムの立場である。

その後の国際スポーツ界にとって、オリンピックはスポーツの高度化、スポーツの大衆化、アマチュアリズム、ナショナリズム、コマーシャルとの関連など、資本主義社会のスポーツイベントの在り方をまさに典型的に提起している。そしてこれらも、国際政治との関連と同様、今後の大きな

検討課題である。

ここでは、第1回アテネ・オリンピックがギリシャに対して与えた影響を見る。その場合、大会が意図したものに対する影響と同時に、その範囲外の影響もある。

(1) ナショナリズム

大会は外的世界へのギリシャの印象づけと、内的には民族意識の高揚であった⁽¹⁾。近代ギリシャはオリンピックのギリシャでの復興を心から欲した。集团的自信は古代の栄光の記憶の中に再確認され、一方、「内的」ギリシャと「外的」ギリシャ—国家としてのギリシャとオスマン・トルコ帝国のギリシャディアスポラ—が共通の夢を抱いた。ビザンチン帝国の再現である「大ギリシャ主義」⁽²⁾で、ギリシャ人にとって、オリンピック大会はよちよち歩きの新ギリシャの、単に純粋なスポーツ大会であるよりも政治的、国家的存在に不可分に結合したより政治的、文化的な行事であった⁽³⁾。

特にマラソンに優勝したスピルドン・ルイスは表彰式に民族衣装を初めて着て（着せられて）登場し、ギリシャの愛国主義を象徴した。（そして1906年の中間オリンピックにも、1913年のバルカン戦争でも軍事班に参加して兵士の士気高揚に利用された。さらに1936年のベルリン・オリンピックでも、同じくギリシャの民族衣装でゲストとして招かれ、ドイツ大会と古代ギリシャとの連繫を強調する為に利用された。）

表現はそれぞれに若干異にするが、意図するところは共通である。ギリシャにとって、オリンピックはスポーツ大会という形式をもった政治的、文化的儀式であったということである。ここに、アテネ・オリンピックが持った客観的な意味がある。

こうしてオリンピックはギリシャにおけるスポーツの発展と同様に、バルカン半島情勢、「東方問題」の解決の枠組みにおけるギリシャの海外政策と戦略にリンクしていた。政治的に見れば、王室安泰、国民の自信強化、失地回復主義者を元気づけた。その点で、翌年1897年にこの国民の自信

がギリシャ＝トルコ戦争の前線で炸裂したのは歴史の皮肉である⁽⁴⁾。軍事力が不足していたギリシャ内でも慎重論はあり、デリアニス政権もその範疇にあったが、軍事専門的で民族主義的集団「国民連合」が挑発しクレタでの対トルコ蜂起に対応して戦艦と軍隊を派遣し、テッサリーではトルコに対して「30日間戦争」を闘い、政府も追従せざるをえなかった。国民の高揚したナショナリズムがそれらを後押しした。結果は悲劇的な敗北であり、これによってオリンピック直後の国民の自信は消え失せて、道徳の頹廃が起きた。「大ギリシャ主義」の決定的な敗北であった。

註

- (1) Michael Llewellyn Smith, *Olympics in Athens 1896 to Invention of the Modern Olympic Game*, Profile Books, 2004, p 4
- (2) Christina Koulouri, 'Introduction-The Hellenic Olympic Committee before its History', *Archives and History of the Hellenic Olympic Committee*, Christina Koulouri (ed.), International Olympic Academy, Athens, 2002, p 22
- (3) Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S. A. 2003, p 116, p 198
- (4) Christina Koulouri, 'The Hour of Revival and the Holding of the Modern Olympic Games in Athens, Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games', Iphigenia Vogiatzi (ed.), Historical and ethnological society of Greece, 2004, p 73

(2) スポーツ分野での影響

オリンピックの開催がその後のギリシャのスポーツをある程度促進した。これまで近代スポーツが十分には普及していなかったギリシャにおいて、国家の近代化、西欧化を進める上で、近代スポーツの摂取は他の文化摂取と同様に不可避な課題であった。

19世紀後半のギリシャにとって、1896年のオリンピックは次の理由で重要であった。

- ①古代の名声、宣伝は失地回復主義者の夢に貢献した。
- ②ギリシャでの観戦スポーツの発展は、教育でもスポーツクラブでも、スポーツの観戦化へ貢献した。
- ③運動組織や大会の機能についてのルールや体制の形成は、ギリシャでの今後の発展を規定した。
- ④選手の高度化とクラブレベルでの記録の集積は、スポーツへの政治的関心を高めた⁽¹⁾。これは総括的な意見であるが、もう少し個別具体的な主張を見てみよう。

まず、翌 1897 年の初期に第 1 回汎ギリシャ体操会議が開催され、ギリシャの運動クラブが全体で 3717 設立された⁽²⁾。その多くはその後消失したが、既存のクラブはより活発になり、海外のものは国内のものとの絆をより緊密なものにした。ルールの統一、スペクテータースポーツの確立、新聞のスポーツ扱いの拡大、そしてオリンピックがギリシャ史一般に組み込まれるようになった。

女性クラブによって 1897 年には女子体操学校が設立された。オリンピックの影響は体育科教育にも及び、1899 年 7 月 10 日の「体操について」の法律が採択され、学校で週 3 時間の体操が小学校から大学まで必修となった。

「国家的勝利」の神話は、若者の多くがマラソンランナーになったことであり、ギリシャ中の運動競技会でマラソンのない大会は無くなった。国際的にも、アメリカのボストンマラソンは翌年 1897 年に開始された。

さらに、汎ギリシャ競技会がオリンピック大会委員会とギリシャ運動体操協会連盟 (SEGAS) とによって行われることが決定された。

その後サッカーの普及もあり、この辺りは他の国々と大まかには異なっていない。

ところで、大会の準備過程で IOC 会長のヴィケラスは、ギリシャの実行委員会側からの問い合わせも含めて、IOC の各国の連絡対象の選定に苦勞した。どの団体に選手、観戦者の招待状をいかなる原理で、誰の名義

で発送するのか、これらさえ皆無の状態であった。それ故、各国のオリンピック準備を進める委員会を結成することを提案した。これは後のオリンピック運動を推進する上で重要な視点であった。

註

- (1) Christina Koulouri, 'Introduction-The Hellenic Olympic Committee before its History', *Archives and History of the Hellenic Olympic Committee*, Christina Koulouri (ed.), International Olympic Academy, Athens, 2002, p 38
- (2) Christina Koulouri, 'The Hour of Revival and the Holding of the Modern Olympic Games in Athens', *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Iphigenia Vogiatzi (ed.), Historical and Ethnological Society of Greece, 2004, p 73

(3) アテネの都市整備

アテネは1834年にギリシャの首都となった。ギリシャの近代化に伴い、1890年代のアテネは人口が急増し、都市問題が深刻化していた。産業、商業の発展に伴い都市の拡大、中産階級が増大していた。急速な都市化に伴う水道供給、市のゴミ処理と清掃、そしてほこり対策は首都として喫緊に解決すべき課題として迫られていた。1893年の国家破産宣言は首都アテネの財政にも深刻な負担を強いた。ここにビッグイベントが舞い込んだ。

しかし1895年のアテネ市議会選挙でオリンピック推進のデリアニス派が勝利することによって、1896年にはアテネ市は10万ドラクマを支出して都市整備、民宿整備、道路の舗装化、散水、植樹、都市清掃、ガス灯の設置、ひろばの修復、道路標識の設置などを行い、これまでにない都市整備を、オリンピック開催という名目の下に敢行した。

劇団グループ、路上芸人も田舎からアテネに集まり、アテネの活況はいっそう高まった。ビッグイベント開催に伴う都市整備は単にオリンピックに限ったことではない。それは単にスポーツ（文化・芸術・産業）のイベントに留まらず、それらを収容する箱物＝建物、宿泊施設、交通手段など

の都市インフラストラクチャーの整備をも必須とすることから、そうしたイベントを招致した都市はそろってインフラの整備にも力を入れた。しかし近年ではスポーツそのものの振興よりも、そのイベントに伴うインフラ整備を経済振興の梃子にしたり、あるいは国際的なイベント開催による都市の名声の向上、観光業の振興、あるいは開催者の政治的名声の向上などを主目的とする商業主義的、政治主義的な開催も指摘され始めている。それらは往々にして都市や国家の福祉財政を圧迫したり、環境破壊を考慮せずに、強引に推進することも多いことから、オリンピック大会そのものへの反対よりも、運営する政治への反発として起きている場合が大半である。この点では住民の意向もまたオリンピック開催の大きなモメントになりつつある。

この点で、第1回アテネ大会を見ると、インフラ整備まではできなかったが、福祉レベルとしての都市整備は多少なされた。

8. 1906 年中間オリンピック

1897 年の IOC ル・フェーブル会議には第2回オリンピック開催地に関して何ら提案はなかった。ギリシャ＝トルコ戦争による敗北のために、ギリシャは代表団を送れなかったからである。1901 年の会議でアテネ永久開催論は再燃した。1900 年のパリ大会が失敗したからである。ドイツ代表が発言した。最終的にクーベルタンからの提案として、公式なオリンピック大会の中間年にアテネでの大会が認められた。クーベルタンとしてもパリ大会の失敗が多少立場を弱くしていた。1905 年のブリュッセル会議では「アテネ国際オリンピック大会」(1906 年)の名称を与えることを了承した。

1900-1906 年はアテネのベルエポックであり、都市整備が進んだ。HOC (ギリシャオリンピック委員会 Hellenic Olympic Committee) が各国の委員会の結成を呼びかけたのは成功であった。これは当時の国際スポーツに次の3点で貢献したと考えている。第1は、スポーツ途上国では、各国の

代表を選考する状況が曖昧であった。第2に、中間オリンピックは新スポーツの導入に関して、ルールに関する継続的交渉を形成した。第3に、1906年の中間オリンピックは、大小の民族的グループにとってスポーツを通して彼らの存在をアピール出来る機会、口実を与えたからである⁽¹⁾。

1906年の中間オリンピックの組織化は際だった。1896年の経験もあり大成功であった。HOCは地理的遠隔地の参加には何らかの資金援助を行い、そして各国の20名分の宿泊費を無償にした。

中間オリンピックの開催は、東地中海のギリシャコミュニティの中産階級からの大きな支えがあった。彼らは本土との緊密な関係があった。とはいえ、1896年、1906年のオリンピックへの観光客の最大の関心はギリシャ観光であり、オリンピックは副次的なものだったといわれている。西ヨーロッパからの観光客は理想的古代ギリシャへの魅力であり、海外にいるギリシャ人たち(diaspora)にとっては本国へのノスタルジアであった⁽²⁾。と同時に、この地でも、スポーツは次第にアマチュアリズムが浸透し、中産階級の所有物化をしていた。その点で、この中間オリンピックはギリシャのブルジョア階級とそれに対応する諸外国の彼等の交流会でもあった⁽³⁾。

こうして、中間オリンピックは、マケドニア問題が最前部に現れた時に準備され、開催された。オスマン・トルコ帝国に属していたマケドニアの東方正教会の統制のために、バルカンナショナリズム間のライバル意識の高揚する中で開催されたものである。そして大会の成功は、バルカン半島におけるギリシャの力の誇示となった。

註

- (1) Yiannis Yiannitsiotis, 'The Intermediary Olympic Games in 1906', *Archives and History of the Hellenic Olympic Committee*, Christina Koulouri (ed.), International Olympic Academy, Athens, 2002, p 74
- (2) Christina Koulouri (ed.), *Athens, Olympic City 1896-1906*, International Olympic Academy, Athens 2004, p 49
- (3) Vassilis Kardasis, *The Olympic Games in Athens 1896-1906*, ISP, May 2004, p 279

第2部の総括

第2部の総括として以下の事が指摘できる。

オリンピックの復興過程は大きく次のような特徴を有する。

A：オリンピック復興の客観条件

- ① 19世紀の資本主義形成期（近代化）における運動文化の必要性が、体操やスポーツを誕生させた。
- ② 19世紀末という資本主義の独占段階である帝国主義下で、それら体操やスポーツの国内的のみならず国際的な団体が形成された。スポーツ文化においても国際化が可能となり、必要とされた。こうしたスポーツの国際組織の結成もまた人類史の長い歴史の中で、この帝国主義下の国際化の段階において初めて可能となったものであり、帝国主義段階の産物である。
- ③ 19世紀は世界史の上でもヨーロッパが初めて世界の中心を占めると同時に、これまでの時代にはない急速な科学技術の発展を遂げた時代である。それ故、万国博覧会や、やがて勃発する第1次世界大戦の中心がヨーロッパであったように、オリンピックもヨーロッパ開催である故に世界から注目された。
- ④ 近代スポーツ発祥の国・イギリスでは、「伝統の創造」の一環としてアマチュアリズムが形成され、労働者階級が高度化のみならず大衆化の点からも排除された。
- ⑤ こうして、圧倒的なシェアを占めるイギリスの植民地を中心に、「アマチュアリズムに包まれたスポーツ」は全世界を席卷した。これは各国のブルジョアジーが、その国民国家建設の上からスポーツ文化を必要としたことと、アマチュアリズムによって労働者階級を排除し、牽制することができたからである。
- ⑥ 帝国主義段階の植民地争奪戦による国際紛争の可能性は、国際的な平和運動の必要性を高めた。この点で、スポーツ面での国際平和貢献を意図した組織化が求められていた。

B：オリンピック復興の組織化

⑦クーベルタンの提唱と組織化。同じく、資本主義の発展段階の産物である万国博覧会をモデルに、クーベルタンの提唱による近代オリンピックの復興が平和運動として提案された。万博の開催にはそれへの出品である近代産業の成熟、資本の蓄積、交通・通信手段の発達、宿泊施設の完備など、近代都市の形成が前提である。万博から多くのアイデアを得た「オリンピックとはスポーツの万博」である。こうした国際的なオリンピックの開催を必要とし、可能とする条件が形成されていた。万博をはじめとする諸国際機関の設立等のスポーツ版である。問題は誰が、いつ動き出すかであった。つまり、客観条件は熟していた中で、誰が主導するかという主体的条件が問題であった。従って、もしクーベルタンが現れなくても、その数年後ないし数十年後には、オリンピックに類似した何らかの世界的大会は形成されたであろう事は仮定できる。1892年の提唱、そして1894年のパリ国際会議はその組織化である。ここにはそしてこれ以降クーベルタンの理念、組織力（政治力）、そして財力が大きな役割を持った。

⑧クーベルタンは万博の一環としてオリンピックを構想した。それは単に競技会の開催様式ばかりでなく、国家（含自治体）からの援助を期待してのことである。それは財政的援助ばかりでなく、国家援助による権威付けも得られたからである。しかし国家的援助の一方でアマチュアリズムという階級的要素を採用し矛盾を内包した。

C：オリンピックの実行

⑨19世紀末のギリシャは未だ列強の支配下にあり、主だった産業も成長しておらず、実質的には農業国を脱し切れたいなかった。それでもバルカン半島におけるヨーロッパ意識と領土拡張意識が独立戦争に何度も駆り立ててきた。そうした近代化の端緒に着いた発展途上国に、突如帝国主義段階の国際的文化である近代オリンピックの開催要請が舞い込んだ（1894）。当初は、非開催＝開催の国を2分する事態となり、時の政府は前

者に立っていたが、1895年に後者の立場に立つ政府が成立した。現地実行委員会が設立され、ギリシャは国家の存亡を掛けてオリンピックの開催に取り組んだ。しかし、現地からの諸々の質問にクーベルタンは「非協力」的であった。これによって、現地とクーベルタンの関係は冷え切った。ギリシャのザッパス・オリンピアの経験が、大会の成功の基礎となった。

⑩第1回アテネ大会は、13カ国、311名の参加で、9種目43競技が行われた。種目によって得意とする国の偏りもあったが、大旨順調であった。特に新種目マラソンはギリシャ・ナショナリズムの高揚となり、その直後から全世界に普及した。全体として、オリンピックはギリシャにとって「メガリ・イデア」「偉大なギリシャ」思想、つまりギリシャナショナリズム高揚の格好な機会と位置づけられた。

⑪オリンピックの影響として、1896年の第1回大会は規模は予想よりは多少小さかったが、国際スポーツ運動にとっても開催国ギリシャのナショナリズムにとっても大成功であった。直後、ギリシャにもスポーツ組織が多く設立されたが、発展途上国・ギリシャには大衆スポーツの基盤は未だ形成されておらず、国民全般の経済状況は広く国民のスポーツ享受を可能にはさせず、多くが消滅した。また、国際的ビッグイベント開催の常として、アテネ・オリンピックもまたアテネという都市振興の手段やナショナリズムの高揚に直結され、時の政府や皇室のイメージアップに活用された。

⑫近代オリンピックは確実に復興したことが世界に発信された。大成功であったが故に、ギリシャのアテネ永久開催論が持ち上がった。その後10年間のオリンピックは困難を抱え、クーベルタンとIOCの立場は大きく後退して行く。それ故、アテネ永久開催論は大きな可能性を有していたが、結局はその後のギリシャはバルカン半島を覆う諸戦争での敗退がその可能性を消失させた。この点は次の時期（1894～1920）で詳述する。

⑬クーベルタンの意図したオリンピズムがこの大会でどれだけ実現できたかは評価の難しい問題である。しかし、古代文化の発祥地アテネでの競

技会は、参加者の国際交流を明らかに促進した。それ故、以降の国際スポーツ競技会に大きな影響を与えた。この点で、国際平和への貢献は広く承認されたのではないか。

⑭オリンピックとは資本主義社会がその近代化の過程、特に帝国主義下で産んだ「スポーツの万博」である。それゆえ、帝国主義段階にあった資本主義社会が有した諸性格、つまりナショナリズムの対立や、宗主国＝属国関係等を抱え込んで行く。

⑮資本主義社会の中に生まれ、育ったスポーツそしてオリンピックは、資本主義の発展に伴ってそれぞれに変化、発展した。それ故に、資本主義の経済、政治、文化の影響を受け、またそれらに影響を与えてきた。スポーツ、オリンピックの持つ性格の多様さ故に、スポーツへの期待、位置付けもまた多様である。例えば、歴史的に見ても次のようなものが例示される。

- ・労働者、兵士の身体と精神の育成のための学校での教育
- ・アマチュアリズムとして労働者階級の排除と資本家階級の統合
- ・ナショナリズムの担い手
- ・国際平和、友好の手段
- ・企業統合、地域統合の手段
- ・スポーツ産業
- ・メディアによる企業の宣伝媒体として
- ・スポーツ資本（プロ、用品、情報産業など）
- ・スター：国民のアイドル、夢、生きる勇気の源泉
- ・国民の文化享受の対象、等々。

これらが時代の、社会の、階級の特徴によって規定される。今後の歴史はこれらの関連を追究することになる。

⑯第1回大会の復興過程と開催によって、オリンピックが抱える問題点が少し垣間見えた。最大の問題は開催の財政であり、アマチュアリズムを採用したにもかかわらず国家的援助を必須とした。そしてIOCが未確立

の段階であったからリーダーシップも含めた組織体制問題が露見した。また、第1回を引き受けたギリシャ・アテネではナショナリズム高揚の手段とした。そして大会の成功によって、「アテネ永久開催論」も主張された。